

Stage Twelve

「天空の騎士」

Stage Twelve

「昔々、人間とオウガが大陸の覇権をめぐつて争ったことがある。戦いは何千年にも及んだという。人間は神を、オウガは悪魔を味方につけ、戦ったが、圧倒的な数と力を誇るオウガにくらべ、人はもろく弱かった。ついに人間がカストラート海の縁に追いつめられた時、天より三人の騎士が舞い降りた。十二人の賢者を従えた三騎士は、最後の決戦を挑み、見事、オウガたちをうち滅ぼしたのじゃ。戦いを終えた三騎士は天へ帰り、あとには一本の剣が残された。聖剣ブリュンヒルドがな。こうして、我々人間がこの大地の主となったのじゃよ」

「おまえたちは反乱軍だな？」

真紅のお揃いの鎧の上に着る外套を身につけた騎士たちがカオスゲートを取り囲んでいた。

「あなたたちは、帝国軍ではなさそうだな？」

グランディーナの回答に一人の騎士が進み出る。

「我々は赤炎のスルストさまにお仕えるムスペルム騎士団、わたしが騎士団長のファーレン＝ホールルスヘルンだ」

「ムスペルム騎士団が何の用だ？ 赤炎のスルストはどうした？」

「スルストさまの命により、おまえたち反乱軍を捕える。抵抗はするな、我々も無闇に危害を加えるつもりはない。ここはおとなしく従ってもらいたい」

「スルストがなぜ私たちを捕えようとする？ 私たちはゼゲネア帝国と戦うため、天空の三騎士の力を借りに来た。私たちを捕えよとスルストが命令したと言うのなら彼はゼゲネア帝国に与したと考えてもいいのか？」

「ならば、どうすると言うのだ？」

「知れたこと！」

その時のグランディーナの動きは速く、すぐ側にいたランスロットにも止められなかった。彼女はファーレンの首筋に剣を突きつけていた。

「天空の三騎士だろうとゼゲネア帝国に与するならば私たちの敵だ。動くな！」

ムスペルム騎士団の者たちは動揺したが、ファーレンはそれほどでもない。静かにグランディーナを見下

ろし、ひとつ息を吐いた。

「実は、おまえたちに頼みがある」

「捕えるの次は頼みか。どんな用事だ？」

グランディーナは剣を引つ込めないが、ファーレンはまるで気にしていない様子で続ける。

「我らが主、赤炎のスルストさまは、どうやら操られているようなのだ。先日、カオスゲートから現われた魔導師がムスペルム城をおとなつてから、スルストさまは突然、反乱軍が現われたら捕えろと言いつ出した。

だが、我々ムスペルム騎士団はムスペルムを守るのが仕事、地上の争いに関与することはない。スルストさまもそのことはご存じだ。これはスルストさまがその魔導師に操られているとしか考えられないだろう」

ここでようやくグランディーナは剣を収めた。
彼女は皆を振り返り、休息を言い渡すと、ファーレンと二人だけで話し始めた。

どうなることかと見守っていた解放軍もムスペルム騎士団も、やつと肩の力を抜いた。

「わたしはサラディンⅡカームと申す。あなた方、ムスペルム騎士団について伺つてもよろしいかな？」

「何なりと、サラディン殿。私は副団長のマリオンⅡカナルといます」

肌色の黒っぽい中年女性が差し出された手を握り返す。よく見るとムスペルム騎士団には女性が何人も混じっていたし、ゼテギネアでは珍しい黒い肌の者も何人かいた。彼らはボルマウカ人として知られる人びとと、共通の祖先を持つているのだろう。

「先ほどはあのようなことをして失礼しました。部下たちに飲み物を運ばせています。どうか、おかつろぐください。ここは地上より暑いでしょう？」

「そうですな」

確かに彼女の言うとおりだった。ましてや解放軍は厳寒のガルビア半島から来たばかりで、皆は汗だくになつていたので。防寒具と冬服を脱ぎ、またドラゴンに積み直した。しかし、いちばん体の大きいプロミオスに荷を積めないのは不便としか言いようがない。下手に可燃物を載せると、すぐ発火してしまうからだ。

「先ほど団長も申し上げたとおり、私たちは天空の三騎士のお一人、赤炎のスルストさまにお仕えしています」

「天空の島の方々は、オウガバトルの後に地上での絶えぬ争いを憂えて島に昇ることを許されたと記憶しておりますが、このような地になぜ騎士団があるのですか？」

「お恥ずかしい話ですが、戦いを棄てたはずの私たちのあいだでも小競り合いを起こす者がいます。天空の島は天空の三騎士の方々が治めているので、私たち騎士団の役割はその手足となつて掟を破つた者を捕まえたりすることになります。三騎士の方々が裁き、私たちはその実行部隊ということですよ。そのために私たちに剣を持つことが許されているのです」

「なるほど、よくわかりました。ではこの島で、あなたの方のように紅い外套を身につけていない者が武器を持つていた場合、よほどのことがない限り、我々解放軍か、帝国軍の者ということになりますね？」

「そうです。ですがスルストさまは、あなたたちを反乱軍と仰いましたか？」

「我々はゼテギネア帝国に反旗を翻した者です。帝国から見れば反乱軍に過ぎないが、当初から帝国の圧政からの解放を掲げ、解放軍と名乗つておりました」

「そうでしたか。よくぞ、このムスペルムまでおいでくださいました。さあ、さつさと帝国のやつらを追い出さない！ この野蛮人どもめ！」

言うなり、カナールは杯の中身をサラディンにぶちまけた。

手の平を返したような態度に解放軍は驚いたが、当

のサラディンが腰を下ろしたままだ。彼は袖で顔をぬぐつたが、ぶちまけられたのも水であった。

「ようやく本音が出たようだな」

「これが我らの偽らざる気持ちだ。天空の三騎士殿の力を借りたいけど？ たかが地上の争いに半神たる御方を巻き込もうとは身の程知らずにもほどがある」

「だからあなたたちは甘いと言うのだ」

「何だと？」

カナールばかりか、ムスペルム騎士団の全員がサラディンを睨みつける。

だが彼の態度は変わらない。それで解放軍の皆も、事の成り行きを見守ろうという気持ちになれた。

「半神たる天空の三騎士を操ることのできるラッシュデイ殿の力を、あなたたちは甘く見すぎている。それに、これが地上だけの争いだと思つていいのか？ それほどの力を持つ方がたかがゼテギネア大陸の覇権を欲していると思つていいのか？ その程度の方ならば苦勞することもない。この不肖の弟子が倒してみせよう。だが、あの方の狙いはそんなところにはない。決してそんなものではないのだ」

彼の口調は穏やかだったが、そこに込められた気迫には並々ならぬ覚悟が感じられた。

カナール以下、ムスベルム騎士団は思わず後ずさり、そこへグランディーナとファーレンが戻ってきた。

彼女は解放軍を集め、ファーレンもムスベルム騎士団を招集する。

「状況は先ほどファーレンが言ったとおりだが何点か補足する。ラシュディはムスベルムにいない。オルガナカシグルドに向かったのだろう。少数だが帝国軍も乗り込んできている。彼らはスルストの居城、ムスベルム城にいるらしいが、ムスベルム騎士団の者も若干混じっているようだ。よって、私たちはこのままムスベルム城に向かう。この島はシャングリラより小さいが、あの火山、ムアスカル山を迂回しなければならぬ。ムスベルム城までは二日ほどかかるそうだ」

「騎士団の助力はただけるのか？」

先ほどの件があつたので誰もそんなものは頼みたくなかつたが、サラデインが冷静に尋ねる。

「帝国軍が乗り込んできた時に何もできなかった人たちだ。戦力として当てるには思えない。頼めることはせいぜい道案内だろう。それもファーレンが買って出た」

「ラシュディ殿の力で操られているスルスト殿をどうするつもりだ？」

「倒す。ファーレンが言うには、天空の騎士は半神のために、殺されても、じきに生き返るそうだ。殺すほどの衝撃を与えれば、ラシュディの呪縛から解放されるだろう」

「ならば、スルスト殿のお相手はわたしが引き受けよう」

「クアス?!」

デボネアはノルンを制しながら続けた。

「悪いが、このなかでわたし以上の腕の者は君以外にいないと見た。天空の三騎士ほどの方が並みの剣士で相手になれるとは思えない。そうではないか？」

グランディーナはデボネアと正面から向き合った。やがて、彼女はランスロットを見た。

「デボネアに聖剣を渡せ」

言われてブリュンヒルドがやりとりされる。

ランスロットのシャングリラで負った怪我はまだ全治していない。それだけでなくても、彼には自分がデボネアに敵わないことはわかつていた。ゼノビア城での戦い以来、彼も様々な戦いを経てきたが、デボネアとは天賦の才が違うという自覚はあつた。

先にムスベルム騎士団の方が解散し、ファーレンだけが残っていた。

「ムスペルム城まで案内しよう。悪いが、このような事態だ。騎士団には各都市の自警に当たらせることにした」

グランディーナが頷く。

「ファーレン殿、ラシュディ殿はすでにオルガナカシグルドに向かったとのことだったな？」

「そうだ」

「あの方が使ったのは、どのカオスゲートだ？ あれは別の手段があるのか？」

「ムスペルムには特別なカオスゲートがある。オルガナとシグルドに行くことができるが、天空の三騎士殿の御力でしか開けない。ラシュディとやらはそれを使ったのだろう。スルスト殿がカオスゲートを開いたという報告も聞いている」

サラディンが頷き、グランディーナは皆にムスペルム城に向かうよう指示した。

かくして解放軍はムスペルム城を目指して発った。雷竜の月二二日のことである。

ムスペルムの気候は地上よりも暑く、厳しい日差しが一行に照りつけていた。加えて島の中央にシユレフ火山地帯がある。アヴァロン島にも火山はあったが、

これほど活発ではなかったし、ムスペルム自体が狭い島なので、火山の影響も受けて暑くなるらしい。他の山々もムアスカル山ほど頻繁ではないが、どれかの山がいつも白煙を吐き続けている。

「あの山が噴火したことはないのか？」

「記録に残っている限り、ないな。スルストさまは炎の女神ゾシヨネルさまの加護を受けた御方だ。あの火山はその象徴のようなものだから。一説にはムアスカル山が煙を吐かなくなった時、ゾシヨネルさまの加護が失われ、ムアスカル山が噴火する時にはムスペルムが滅びるのだと聞いている」

「スルスト殿は太陽神ファイラーハにお仕える騎士だと聞いたが、ゾシヨネルの加護もいただいているのか？」

「そうだ。全ての生き物は四神のどなたかの加護をいただく。スルストさまも例外ではない」

サラディンとファーレンの話には皆が耳を傾けていたが、グランディーナが振り返り、また前方に向き直った。

「ランスロットたちも、四神の加護が当たり前のようには言われても自覚がない。四神の誰に加護されているのか、わかっている者など、ごく少数だ。」

四人の女神、大地のパーサ、水のグルーザ、炎のゾシヨネル、風のハーネラは誰もが、ゼテギネアではそれほど親しみやすく、また縁遠いとも言える。人びとは気楽に女神の加護を願ひ、その頻度は主神ファイラーハの比ではないからだ。

春の日、種まきの前に大地の女神パーサに願ひ事をせぬ農夫はない。昨年の実りが厳しいものであったなら今年も豊かであるように、昨年の実りが豊かであれば今年も足りるように誰もが祈る。その代わり、収穫の時には誰もがパーサに感謝を捧げることを忘れない。パーサを讃え、実りを祝う祭りは各地で開かれる。

水の恵みを願ひ、女神グルーザへの祈りも欠かせない。水不足は地域によって深刻なものとなるし、かと思ふと多すぎる地域もある。足りぬことも多すぎることもないように、人びとはグルーザに願ひ、祈る。一方でお産に水はつきものと、人であれ家畜であれ、無事な出産を水の女神に願う地方も多い。

新しく家を建てる時、結婚する時、竈かまどに幸運を願ひぬ者はいない。炎の女神ゾシヨネルはその象徴だ。新しい家庭が円満であるよう、新婦が料理上手に一家を切り盛りできるよう、誰もがゾシヨネルの祝福を願う。寒い冬にも、もちろんゾシヨネルの加護が必要だ。炎

の暖かさが人びとに冬を乗り切る力を与えてくれる。

風の女神ハーネラは旅人の神である。遠き地よりの頼りを待ち望む時、己が旅に出る時、人はハーネラの祝福を願う。海沿いの者ならば、さらに願ひは切実だ。良き風が吹くように、と願わずにいられる船乗りはいない。もちろん風も適当に吹くのが望ましい。

このように、四神への祈願はしょっちゅう行われるのだが、さて、ファーレンの言う四神の加護となると、誰もがとんと心当たりがないのだった。

「しかし、ゾシヨネルさまがムスペルムに降臨したとは記録にない。ファイラーハさまも同じだ。天空の島は本来、三騎士の方々に与えられた島で、わたしたちはそこに住むことを大昔に許されたに過ぎない」

「ゾシヨネルの加護はラシユディ殿の力の前には、さしたる効果はなかったようだな？」

ファーレンは嘆息する。

「わたしにはわからない。ファイラーハさまにお仕えるスルストさまが、なぜ守られなかったのかは誰にもわかるまい。だが地上のことに神々は介入できないとも聞いている。ラシユディがいくら強力な魔法の使い手でも、地上の者である限り、神々が手を下すことはできないのだろう」

「では私たちがスルストを殺しても、神は咎めないということだな？」

「そうだ、倒せるものならばな」

「あなたたちはスルストに抵抗しなかったのか？」

グランディーナの口調はいつものように淡々としていたが、ムスペルム騎士団長は皮肉ともとれる、その物言いに、しばし苦り切った表情で沈黙した。

「おまえたちはあの方の強さを知らないから、そんなことが言えるのだ。それにスルストさまはオウガやサタンとも戦った御方だぞ、わたしたちなど敵うはずがない」

「あなたたちは天空の島の住人だが、私たちと同じ人間だ。スルストは、あなたたちを殺すことができるのではないのか？」

「だが、いまのスルストさまはふうの状態ではない。誤って我々を殺したことで、スルストさまが咎められるようなことがあっていいはずがない！ それではわたしたちムスペルム騎士団の名折れだ」

「なるほど」

大して納得もしてなさそうな顔でグランディーナは頷いたが、騎士としてランスロットはファーレンに同情するところがあつた。しかし彼女は容赦がない。

「名折れといえば聞こえはいいが、要はあなたたちではスルストを解放できそうにないから、私たちにやらせようということだろう。あなたたち天空の島の住人は、私たち地上の人間が殺されても痛くもかゆくもないのだろうからな」

「わたしたちはスルストさまと戦おうとは考えられない。あの方に敵わないとわかっているし、我々も含めてムスペルムの民はあの方を慕っている。スルストさまを助けるためにスルストさまが咎められるようなことには、できるだけしたくないのだ」

彼女は肩をすくめた。

「スルストというのはそんなにいい奴か？」

「陽気で優しい方だ。半神でありながら威張つたところもないし、いろいろなこともご存じだ。ムスペルムの民でスルストさまの悪口を言う者などいない。ただ、ひとつだけ困った癖がおりだが、誰しも欠点の一つや二つ、持っているものだろう？」

「なんだ、その癖というのは？」

ファーレンはまた黙り込んだ。よほど言いたくないことなのだろうと皆が推測し始めたころ、彼は渋々と口を開いた。

「スルストさまは惚れっぽいのだ。女性と見れば誰

でも口説かずにいられない上、簡単に結婚の約束までされる。贈り物はいつものことだし、例外というものがない」

誰もが二の句も継げずにいると、ファーレンは口にしたことで勢いづいたらしく続きを話した。どうやら騎士団長という立場上、日頃からスルストの悪癖にかなり悩まされているようだ。

「騎士団の者も何人か被害に遭っている。肉体関係までいった者もいると聞いたが、なにしろ男女の仲だわたしが口を挟むわけにもいかない。スルストさまの悪癖については、ムスペルムの民は小さいころから聞かされているので本気にすることも少ないのだが、おまえたちも女性が少なくない。気をつけた方がよいだろう」

「スルストが正気を取り戻した後にでも話そう」
 グランディーナはそう応えたが、皆が嫌そうな顔をしたことは、言うまでもなかった。

いつも煙を吐き続けているムアスカル山を左手に見ながら、解放軍はシュレフ山地沿いの街道を辿っていった。

途中の町にはムスペルム騎士団が逗留しており、住

人たちの外出も極端に制限しているとのことだ。人びとは抵抗することもなく、騎士団の命令に従っているそうだが、天空の島で武器があるということは、それだけで脅威なのだろう。

帝国軍は大した数がおらず、ムスペルム全土を制圧するに至っていない。あるいは最初からそのつもりがなかったと言っべきかもしれない。

「サラディン、ラシュディは何のために天空の島へ来たと思う？ フィラーハの許しがなければ動けもしない、天空の三騎士を味方につけるためか？」

「そうではないだろう。天空の三騎士は先のオウガバトルのことを覚えている数少ない人物だ。一時的にでも味方につけ、彼らしか知らない情報を引き出そうとした可能性がある」

「たとえば？ シャングリラでもそうだ。奴は何を探している？」

「それは、わたしにはわからぬな。わかれば、あの方の目的も明らかになるのだろうが、わたしには想像もつかぬ」

「ラシュディという魔導師が、スルストさまが容易に地上には降りられないことを知らなかったという可能性はないのか？」

「あの方に限って、それはないか、限りなく低い可能性だ。あの方は驚くほど多くのことをご存じだ。弟子入りが許された時、わたしはその知識の源がどこにあるのか、何とか追いつこうとしたものだ。書を読み、調べ、賢人と名高い方々にも教えを請うたが、そのうちにそれが無理だとわかった。あの方の知識とは学んだものではないのだ、身につけているものだ。追いつこうと思って追いつけるものではない」

「なぜ、そんなことがわかったのだ？」

「単純な話だ、あの方に訊いたからだ。通常ではあり得ることではない。だが、わたしはそれのことで師の目的を疑うようになった。常人には持たざる知識が、あの方の行動に影響を与えているのは間違いない」

解放軍が夜営したのはムアスカル山を南に見られる位置でだった。山は白煙を吐き続けているが、静かなものだ。

「そうは聞いても、この光景はぞつとしねえな」
カノープスはそんなことを言ったが、魔獣たちはおとなしい。フレアブラスのプロミオスも、こと夜営の火には敏感でも、ムアスカル山はほとんど無視だ。

「あの噴煙は我々に見せるのが目的だからだろう。」

ゾシヨネルの加護の証というのなら、その恩恵を忘れさせぬためのものであつて、実体はないに等しいのかもしれない」

一方、グランディーナとデボネアは、ファールンも交えて話し込んでいた。スルストと戦う時の話だろう。半神の強さがどれくらいのものか、ファールンにもわからない。デボネア一人で対処できるのか、助太刀が必要なのか、それもわからないままで、戦闘もないというのに、いつもとは違う緊張感が解放軍内にあつた。しかし、いくら心配とは言つても、スルストのところまで全員が行くはずもない。リーダー以外は皆、のんびりとしているのも事実だ。

それにはムスペルムの気候が暑く、皆がこれほどの暑さに慣れていないという理由もあつた。ゼテギネアでムスペルムに匹敵するほど暑くなるのは、ライの海周辺か、ダルムード砂漠ぐらいだからだ。もつともダルムード砂漠の暑さはもつと乾燥しているそうだ。

加えて女性たちには、強烈な日差しに日焼けを心配したり、肌の手入れを気かけたりしているところから、この上、スルストが加わつたら、どんなことになるのかという懸念もある。

「スルストさまがどのような方かはわかりませんが、

私たち自身に油断があつてもなりません。できるだけ一人で行動しない、浮ついたところを見せない。皆さんで気をつけていくことにしましょう」

マチルダ「エクスラインが皆に呼びかけて、ラウニーやノルンも同意した。男性陣も、互いに気をつけようと言いつつ。みんな、それで何となくスルトへの対策はできたような気がしていた。いくら天空の三騎士とはいえ、そこまで無茶は言うまい、との期待もあつた。

だが、それでは甘かつたことも、それでもそんなことをしないで済んだことも、皆はスルスト本人に会つてから知るのだった。

シュレフ山地が切れたところにムスペルム城はあつた。裏庭は無人で、シャングリラ城と違つて無骨な造りの城だ。高さも一階しかない平屋建てである。

グランディーナはそこで皆を止め、スルストと戦う者だけでムスペルム城に行くと言つた。デボネア、サラディン、それにランスロットとカノープスだ。

さらにファールンもともに行くことになつたが、どうしても行く主張したノルンは、万が一スルストが人質を取つたら身を守れないという理由で退けられた。

「ムスペルム城はムスペルムに住むことを許された者たちがスルストさまのために建てたと言われる。スルストさまは華美な装飾はお好みではないので、あのような簡素な形になつたという話だ。ムスペルム騎士団も本拠を置かせていただいてるが、実際に住んでいるのはスルストさまだけだ」

城は南向きに建つており、入り口までは皆の待機しているところから、かなり廻り込む必要があつた。

玄関から、赤い鎧を身につけた肌の黒い男が出てきたのは前庭を半分も過ぎた時だ。

「スルストさまだ！」

ゼテギネアでは珍しい肌色にランスロットもカノープスも驚いた。彼の祖先もボルマウカ人と同じらしい。

「なるほど、それでゾシヨネルの加護を受けたというわけか」

と、サラディンは一人で納得していた。

スルストは帯剣しており、六人を認めると近づいてきた。彼が歩きながら剣を抜くと、白刃が強烈な日差しを受けて光つた。

「あれがスルストさまの愛剣ザンジバルだ」

デボネアもブリュンヒルドを抜き、素早く皆の前方に出る。

「ラシュディ様に逆らう愚かな者たちよ。この天空を荒らす悪しき下界の殺戮者たちよ。わが剣を受けてみよ！」

「我が名はクアスIIデボネア！ 天空の騎士スルスト殿に挑戦させてもらおう！」

聖剣と神剣が激しくぶつかり合う。

だが、最初の一撃でデボネアは己の不利を悟った。技に劣るとは思わない。しかし半神の力は人が及ぶようなものではなかったのだ。

鮮血が飛ぶ。デボネアは倒れなかったが、傷つけられていた。

けれどスルストは止まらない。地上の者に手を下せないとはいえ、殺してもしない限り、罰されることもないのだろう。むしろ彼は壮絶な笑みさえ浮かべた。

デボネアの敗北どころか、死は時間の問題だった。すかさず加勢に飛び出したのはランスロットだ。

グランディーナが舌打ちする。

しかし、いまの解放軍では最強の攻撃手のはずだ。

もつとも、カノープスが出遅れたのも、彼女はしっかりと捕まえていた。

だが、ランスロットとデボネアという二人を相手にしても、スルストは互角以上の戦いを繰り広げている。

ザンジバルとて大剣ではない。しかしそれを扱う天空の騎士の力は、皆の想像を遙かに上回っていた。

「待て！」

それでも二人を加勢しようとしたカノープスをグランディーナが止める。

「サラディン！ あなたたち二人で、私の右腕と身体を押さえておいてくれ」

「どういうことだ?!」

「いいから早く！」

グランディーナが右手の先をスルストに向ける。

「行け、スコルハティ、スルストを倒せ！」

差し出された腕から大きな影が飛び出して、その反動で三人は後ろにひっくり返った。

影はユリマガアスの門番だったスコルハティの姿となり、苦戦するランスロットとデボネアを越えてスルストに襲いかかった。

天空の騎士は神剣ザンジバルを振りかざして応戦しようとしたが、わずかに遅れた。否、狼の方がそれほど速かった。

スコルハティがその喉元に食らいつく。神をも殺すと言われた牙がスルストの喉笛を食いちぎり、骨をへし折り、首が転げ落ちて、彼は倒れた。

たちまち血溜まりが広がったが、素早く起き上がったグランディーナの視線はずっとスコルハティに向けていた。

そうと気づいて、巨大な狼も近づいてきた。久々に見たが、フレアブラスが小さく思われるほどだ。その並外れた大きさに、カノープスは素直に背筋が寒くなった。

「よく私の存在に気づいたな」

「自分の身体のことだ。異質なものが宿れば察する。それにこの状況ではあなた以外に考えられなかった。使いたいところで使えなかったのは残念だが、しょうがない」

今度はカノープスにも、スコルハティの言葉が聞こえた。だがそれは、人の言葉とはあまりに異質なものだ。人の言葉を操っているが、無理に言葉にして出していると思えない。そんな奴とふつうに会話しているグランディーナはどこかおかしい。

もつともスコルハティの方は、彼女以外の人物にはまったく無関心の様子だった。

「これで契約は果たされたのだろうか？」

「いま一度、戻ってもらいたいわけではあるまい？ 我也長く門を空けた。大事はないが、そろそろ戻ら

ぬとうるさいからな」

巨大な狼の姿がかき消えた。

ランスロットもデボネアもまだ息を荒くして、自分たちには見向きもしなかった狼のいたところを眺めている。ランスロットはともかく、カノープスが事情を説明しようとしてデボネアに近づくと、交叉してグランディーナが倒れたスルストに歩み寄った。

天空の騎士は血溜まりの中に倒れたままだ。スコルハティに食い千切られた首も、明後日の方に転がっている。

彼女はスルストの首を拾うと、傍らに膝をつき、胴体にくっつけた。

それだけのことで天空の騎士は生き返った。死んだ魚のようだった目に生気が戻り、さらに彼は、グランディーナを認めると勢いよく跳ね起きた。流した血もそのままだというのにな。

「オオウツ！ わたしとしたことがとんだ醜態をさらしマシタ！ 美しいお嬢さん、わたしを助けてくれたのはあなたデスカ？」

スルストは倒されても手放さなかったザンジバルを放り出すと、両手でグランディーナの手を握り、素早く追ってきた。

「コンナところで立ち話もなんデスカラ、わたしの城に行ってお近づきになりマセンカ？」

「スルスト？」

「アア！ そんなに震えることはありません。わたしは女性は大にすることはない。特にあなたのように若くて美しい娘さんはね」

「スルストさま！」

「オヤ、ファールンではありません。こんなところで何をしているのですか？」

「スルストさま！！」

その場にいる誰もが、生真面目なムスペルム騎士団長のこめかみが脈打つのを見た。彼の心中を思えば無理からぬことだが、同時に彼が語っていたスルストの惚れっぽいという悪癖が、あれでも控えめだったこと、惚れっぽいと言うよりも、むしろ女たらしと言う方が相応しいことに気づいたのであった。

「オウ、ファールン、そんなに声を張り上げないでクダサイ。さすがのわたしも蘇生したばかりナンデス。本調子ではないんですカラ」

「あなたほどの方が蘇生しなければならなかったのがなぜかお忘れですか？ スルストさま、何があったのかも覚えていらつしやらないのですか?!」

「エエ？ 何があったかなんて、何を大袈裟なことを言つてルンデスカ——」

スルストの語尾は消え入り、それでもグランディナーの手を片手だけでも離さなかったのは、女たらしの面目躍如と言うべきだろう。

「そうデス！ ラシュデイがやつてきて、それから、わたしは奴の手先となりマシタ。アナタたちと戦いマシタ。なんてこつたイ！ このわたしが三騎士の名譽を傷つけたなんテ!!」

「だが、あなたは正氣を取り戻した」

「オオ、それだけではわたしの氣が済みマセン。あなたたちがラシュデイの言つていた反乱軍デスネ？ わたしが力を貸してあげまショウ。それがいいデス。フェンリルさんやフォーゲルさんにも紹介してあげまゝス」

「ですがスルストさま、それではムスペルムの守りはいかがなりますか？」

「ファールン、わたしを三騎士の名譽を傷つけただけでなく、恩知らずにさせたいのデスカ？ それに、ラシュデイに手を出すコトはできなくても、あれほどの魔術師が魔界に手を出さないと、考えられません。わたし、そのためにもこの人たちに手を貸します。」

オウガバトルのように、人類が減じる寸前になるまで天界が手を貸さないというわけにはいきませんカラ」

スルストはそこでファーレンの背を力強くたたいた。「大丈夫デス！ ムスペルムにはあなたたちムスペルム騎士団がいるじゃありませんカ！ わたし、あなたたちに稽古をつけてあげたでショウ？ もっと自信を持つてくだサイ！」

それでもムスペルム騎士団長はまだ不安そうな顔をしていたが、スルストも後は笑うばかりで解放軍に行うと引つたことを引つ込めようとしないので、とうとう不承不承に頷いた。

「承知いたしました。スルストさま。ムスペルムのことには我らムスペルム騎士団が守ります。ですが、お早にお帰りをお待ちしております」

「ハッハッハッ！ わたしに任せなサイ！」

スルストは豪快に笑ったが、ファーレンの顔からは結局、不安そうな様子は消えないままであった。

「けつこう、スルスト。そろそろ手を離してくれ」
 そう言いながら、グランディーナは彼が手を離しそ
 うにないのを見てとると、かなり強引に自分の手を引っこ抜いた。

「オウ、そんなに素っ気なくしないでクダサイ。わ

たし、女性につれなくされると悲しいデス。あなたにも仲良くしてもらいたいです。わたしのことを悪く言う人もいますが、ミンナ誤解してマスネ。わたしは単に女の人たちと仲良くするのが大好きなんデスヨ」

彼女は立ち上がり、彼を見下ろすようにしたが、すぐにスルストも立った。身長だけでいったらカノープスと同じくらいで、筋肉質の体格もいかにも神の騎士と思わせる。しかし彼がなれなれしく肩に置いた手を、グランディーナはすげなく払いのけた。

「私は解放軍のリーダーだ。あなたとリーダーとして話したいことはあるが、女として話すことはないし、あなたにとつては一時の慰めにすぎない女たちと同じように扱われる覚えもない」

スルストはそれでも微笑んだ。

「わかりマシタ。あなたをわたしの城に招待しまショウ。そこでゆつくり二人だけでお話ししましょう。それならいいデスカ？」

「わかった」

そこで彼女は、素早く肩を抱こうとするスルストをかわすと、サラディンたちを振り返った。

「そういうわけだから、あなたたちは先に皆のところに戻っていてくれ。話をつけたら私も行く」

「承知した」

「それと、デボネア」

「何だ？」

「浅いようだが天空の騎士に斬られた傷だ。甘く見るな」

「わかったよ」

彼女とスルストがムスペルム城に入っていくのを見送って、サラデインたちもファアレンも城の前を発った。あれだけグランディーナが言っても、まだ腕を組んだり、肩を抱こうとするスルストには逞しさと同時に厚顔なところも感じられる。

あの調子で解放軍の女性たちに迫られたらと思うと、ランスロットもカノープスも、当然デボネアもぞつとしなかった。

「ファアレン殿はこれからどちらへ行くのだ？」

「ムスペルム騎士団を招集する。ここから西にタニスという町がある。そこで皆を集めて、これからのことを話すつもりだ」

「世話になった。グランディーナに代わって礼を言おう」

「わたしは大したことはしていない。ただ、スルストさまがしばらく留守にすると知ったら、皆も驚くだ

ろう。それで醜態をさらすことがないようにしなければな

そう言うのと、ファアレンはすぐに四人と別れ、西に道をとっていった。

一気がつくと、ムスペルム城に來たのは昼前だったのに、陽はだいぶ西に傾いていた。

しかし皆に合流しようとするサラデインをカノープスが引き止める。

「なんでスコルハティなんかがあいつの腕から出てくるんだ？ あんたは絶対知っていたんだろう？ なぜ隠していた？ あいつとあんたしか知らないことが、あと、どれだけあるんだ？」

「わたしもあれも知っていることをすべて、そなたたちに話すつもりはない。スコルハティがあれの腕を封じていたことで、そなたたちに何か不都合があったというのか？ スコルハティを放ったことで、ランスロットとデボネアの命を救えたのではないのか？ あれはこのような時のためにスコルハティに引き腕を封印させていたのだ」

サラデインの口調が激しさを増していったが、そうになった自分を恥じるかのように彼は口を閉ざし、顔を背けた。

ようやく事情を理解したデボネアが冷静な様子で頷く。一度は帝国四天王にまでなった男だ。その判断はカノープスよりもギルバルドに近いようだ。

「確かに、彼女がスコルハティとやらを放つてくれなければ、わたしたちは間違いなくスルスト殿に殺されていただろう。結果的に、スルスト殿はそのことで咎を受け、ラシュデイの呪縛も解けたかもしれないが、解放軍の受ける打撃も相当なものになったはず。わたしはともかく、ランスロットを失うことは解放軍には大きいのではないか」

「けどな、俺が言いたいのは、そうだとわかっていれば、俺たちにはだつて、できたことがあつたんじやないかつてことだ」

「知っていたところで、わたしたちに何かできたわけでもないだろう、カノープス？」

「何だと？」

「スルスト殿が半神というだけで、わたしたちはその力を恐れた。デボネアが自らスルスト殿と戦う役を引き受けてくれなければ、わたしたちは戦つてもいらないスルスト殿の力を恐れ、もしもスコルハティのことを知っていたなら、真つ先に彼女に使うように言っただろう」

「そのために封印させていたんだろう、どこかで使うのは当たり前じゃねえか」

「だが、もしもスルスト殿をわたしたちの力で倒せても、スコルハティを使えということにならなかったか？ 結果的にスルスト殿はわたしたち二人では敵わないほど強かった。だが、スコルハティの強さはそれ以上だ。ならば、彼女はもつと別の相手に使いたかつたのではないか？」

それが誰かは、言われなくてもカノープスにも見当がついた。

「しよせんは借り物の力だ、思うように使えぬことはあれもわかつていた。さあ、そろそろ皆のもとに戻るとしよう。だが、スコルハティのことは他言無用だ。よいいな？」

サラディンはそう言うのと三人の顔を見回した。反対できるはずもなかった。

一方、ムスペルム城に招かれたグランディーナは、ムスペルム騎士団の者でも滅多に來ないだろうと思われる、奥の部屋まで通されていた。

「すみません。わたしたち、召使いを置けません。あなたには少し不便かもしれませんが」

「別に気にしない。あなたは食事もしないのか？」

「はい。食べることはできません。でも必要ではありませぬ。わたしたち、ファイラーハに永遠の命を与えられまじタ。その時から食べる必要がなくなつたのデス。でも時々、お酒を飲みマス。天界のお酒、とても美味しいですネ。あなたもいかがデスカ？」

「私は酒を飲まない」

「つき合つてもいただけませんカ？」

「酒を飲みたいのならば、解放軍には私以上の適任がいる。だが、あなたの話とはそんなことではあるまい？」

「あなたたちに協力するという話デスヨ。でも、あそこにしたのはあなた以外は男ばかり、わたし、とても楽しくは話せませんデシタネ」

スルストは杯に酒を注ぐと、グランディーナに向けて軽く持ち上げた。

「あなたとの出会いに乾杯しましょう」

彼女はこつそりため息をついた。

「ラシュデイと帝国軍はどこへ行つた？」

「オルガナへ行きマシタ。わたしがカオスゲートを開いたのデス。アア、怒らないでくださいネ、その時のわたしはラシュデイに操られていたンデス。彼が古

くから知っている、友人のように見えたのデスヨ。だから、彼の言つたことは頼みのように聞こえまシタ。

オルガナへ通じるカオスゲートを開けてくれと友だちに頼まれマシタ。友だちの願いを聞いてあげるのは当然デスネ」

「ムスペルム騎士団の者も何人か帝国軍に協力していたと聞いたが？」

「ええ。ヴァインソンとフィンクのことですネ。彼らも一緒に行つてしまひマシタ。わたしがラシュデイの術に落ちたことに衝撃を受けたんでシヨウ。かわいそうなことをしてしまひマシタ。でも、わたしが復活したことを知つたら、キット戻つてきてくれますネ。騎士団の人たち、とてもいい人たちデス」

「ラシュデイはあなたに何を頼んだ？」

「最初は地上へ降りるように言われましたタ。デモ、わたしたち、それ、できませんネ。ファイラーハの許しが得られなくて、地上に降りられなかつたンデス。彼は残念だと言いましたが、わたし、そんなにおかしいとは思ひませんデシタ。それならば、あなたたち反乱軍、解放軍というのデスカ？ 追いかけてくるから、それを倒してくれと言われマシタ。ムスペルム騎士団に命じて、あなたたちを連れてくるよう言ひましたが、

大事に至らなくて良かったデス。ところで、わたし、とても大事なことを聞き忘れていましたネ。あなたの名前、教えてくだサイ」

「グランディーナだ」

スルストは杯にこぼれそうなほど酒を注ぐと、彼女の隣りに素早く座り込んだ。この部屋にはスルストほどの長身でも楽に横になれる、大きな長椅子が二つも置いてあった。

「とてもいい名前デス！ あなたに相応しいデスネ。それではグランディーナ、今度はわたしから訊かせてください。あなたたちは、どうやってわたしを倒しましたカ？」

「覚えていないのか？」

「はい、面目ありません。あなたたちと戦っていたことは覚えていマス。でも気がついたら、わたし、正気に戻ってしまシタ。ですが、あなたたちにわたしたちが倒せるはずがありません。何を使いましたカ？」

「スコルハティだ。ずっと私の右腕に宿っていたのを放った」

「スコルハティとはどこで会ったんでスカ？」

「ユリマグアスだ。サラディンがアルビレオに石化されたのを解くために、光のベルを探しに行った。私

は彼と戦って負けたが、彼が私の腕を封じることユリマグアスに入れてくれたんだ」

「それはいつのことデス？」

「二ヶ月ぐらい前かな」

「そんなにユリマグアスを空けるトハネ。あなたはよほどスコルハティに好かれたんでシヨウ。彼は気紛れデス。オウガバトルの時にも誰の味方もしなかったデスカラ。ですが、あなたがスコルハティと戦ったんでスカ？ ヨクそんなことができましたネ」

「ユリマグアスに入るのにスコルハティを何とかしないといけないと言われたんだ。私は魔法が使えない、剣で黙らせられないかと思つたが負けた」

「ふつうの人、そんなコトは考えませンネ。わたしだつて、躊躇ためらいますヨ。さつきだつて何かに襲われたことまではわかりましたが、反応が遅れマシタ。だてに神殺しとは呼ばれていませン。スコルハティはそれだけ強いデス。それに、ユリマグアスやスコルハティのことを知っているなんてただ者じゃありません。ユリマグアスにはそれだけ大事な物が取められていマス。簡単に人が来られては困ります」

そう言つて杯の中身を飲み干したスルストは、杯を傍らに置くと素早くグランディーナの右手を取つた。

「この手にスコルハティが入っていたんでスカ？」
彼女も負けじとその手を振りほどく。

「私が終わっているのはスコルハティが右腕を封じていたことだけだ。どうしていたのかなんて、彼に訊いてくれ」

「デモ、ふつうの人、スコルハティを宿していたら、腕が千切れてしまいマス。あなたの腕、とつても頑丈デスネ。考えられませんネ」

「そんなことは私にも説明できない。私だって自分のことがわかっていけるわけじゃない」

「だったら、この話はココでおしまいにしまショウ。わたし、あなたに嫌われるようなことはしたくありません」

「ならば、もう一つ訊きたい。ラシュデイがあなたに頼んだのはそれだけか？ 奴はほかに何を言った？ ラシュデイが空しいとわかっていて、あなたたちを味方にするためだけに天空の島に来たはずがない。奴の狙いは何だ？」

「天界のこと、いろいろ訊いてきましたネ。でも、わたしたちも自由に天界に入入りできるわけではありません。天界については知らないことの方が多イノデス。神々のことは特にわかりマセン」

「だが奴が手ぶらで帰ったはずはあるまい？」

「そうデスネ。彼はキャターズアイという石の行方を知りたがっていまシタ。とても危険な石デス。わたしたちも名前しか知りマセン。でも、その名を知っているということだけでもずつと危険なノデス」

「キャターズアイ？」

「エエ、恐ろしい破壊の石デス。でも、それは天界にありマス。わたしたちは在処も知りませんネ。彼はやつぱり、なんて言つてまシタネ」

「ほかには？」

「それだけデスネ。神に誓つてもいいデス」

「キャターズアイについて訊いてもいいか？」

スルストの表情が急に真面目になった。

「知つて、どうしますスカ？ あの石はあなたたち人間には破壊しかもたらしませんヨ」

「ラシュデイがなぜ、そんな石の行方を知りたがっているのか気になる。ゼテギネア帝国を倒すためには奴を倒さなければならぬ。だが奴の目的が不明だ。手がかりは多い方がいい」

彼は杯を卓に置き、立ち上がった。

「話す前にわたしの質問に答えてください。ユリマグラスのことは、どうやって知りましたカ？」

「人に教えてもらった」

「誰にですか？ 別にあなたやその人に何かをしよ
うとは思っていませんヨ。わたし、優しいのです。恐
いこと、ありません」

「デネブルローブという魔女にだ」

「わかりました」

スルストは愛嬌のある笑顔を浮かべた。

「ラシュデイがキャターズアイを手に入れられたと
は思えませんガ、石のことを教えてあげますネ」

「本当にそう思っているのか？」

「何をデスカ？」

「ラシュデイがキャターズアイを手に入れられない
と本当に思っているのか？」

「わたしたちでさえ滅多に入ることのできない天界
に、たかが人間が入れるはずがありませんネ。キャ
ターズアイは天界に封印されています。手に入れられ
るとは思いません」

「天界に入らなければ、入る手段を考え出す。人間
が無理ならば、それ以外の手を考える。あなたの考え
か天界の共通の認識か知らないが、ラシュデイを甘く
見ている。サラディンなら、そう言うだろう」

それでも彼は肩をすくめてみせた。

「それよりもキャターズアイのことを話しましょう。

キャターズアイは十三人目の使徒の石です。十二使徒
は知っていますか？ そう、オウガバトルの時に、わ
たしたちとともに戦った賢人ですネ。でも本当は十三
人目がいたんです。いまでは裏切りの使徒と言われ、
存在も認められていないデュルダがネ。彼は使徒の
なかでいちばん強く、賢く、物事を知っていました。
それなのに、彼は力に走り、ファイラーハを裏切つて、
デムンザについたのです。そのために神々はその対応
に追われて、人間たちがカストラート海に追い詰めら
れるまで手を貸すことができませんでした。しかし、
デュルダはどうとう捕まり、その力のほとんどを石
に封じられ、追放されました。彼は神々への復讐を誓
いました。最後は惨めに殺されたとか。デュルダ
の力を封じた石がキャターズアイです」

「デュルダはなぜファイラーハを裏切った？」

「サア。わたしは彼と戦っていないので詳しいこと
は知りません。ですが、キャターズアイに封じられた
力はすごいものだそうです。力の使い方を知っている
者に渡せば、再びオウガバトルを起こすのもたやすい
でしょう。だから天界の奥深くに封印されているので
スヨ。誰でも行けるところではありませんネ」

彼女はしばらく考え込んだ。そのあいだにスルストが杯に酒を注ぎ、隣りに座りなおしたのも気にしていない様子だ。だが、彼の手が髪を弄び、頬に触れるにつれ、かなり乱暴にその手を振り払った。

「いろいろ話してくれたことは感謝する。だが一つだけあなたに頼みがある」

「何でしょうカ？ あなたの頼みなら、喜んで聞きまスネ」

「解放軍には私のほかにも女性がいます。彼女たちにこんなことをしないでくれ」

「なぜですか？」

「彼女たちは帝国と戦うために解放軍に加わった。

あなたに慰めを与えるためじゃない」

スルストの目が細くなり、笑みも消えかけたが、それはかろうじて留まった。

「わたし、皆さんとは了解の上でおつき合いをしていますネ。それにわたし、女性に無理を言ったことはありませんヨ。わたしのことをフアーレンが何と言ったか知りませんが、わたしたち、とても楽しく過ごしているだけデス。わたし、女性を泣かせたくありませんカラ」

「あなたはそのつもりかもしれないが、女性もそう

だとは限らない。天空の三騎士の頼みとやらを、無碍に断れる女性はなかなかいないだろう。ましてや解放軍に支障があつては困る。あなたが彼女らと接触しなければ済むことだ」

「男と女の仲に口を挟むなんて、あなたも野暮なんですネ。わたし、女の人をただの慰めと思つたこともありませぬ。わたしたち、いつでも真剣なおつき合いをしているんですヨ」

「あなたも戦うためにムスペルムを離れるのだろう。真剣なおつき合いとやらは、この戦いが終わつてからにしてもらおう。だが、あなたは半神だ。私たちには想像もつかないほど永く生きています。あなたにとつて、私たちの命など一瞬のものでしかなかろう？ 本当に真剣なおつき合いをしているのなら、女と見れば見境なしに声をかけるのでは、誤解されても仕方ないな」

スルストの表情から完全に笑みが消えた。

彼はしばらくグランディーナを睨みつけていたが、やがて彼女の肩に手を置くと勝ち誇つたような笑みを浮かべた。

「あなた、解放軍の女性たちのこと、言いまシタ。

『私のほかにも』と言つた、そうですね？」

「そうだ」

「それは、あなたならば、いいということですか？
わたしのお相手をしてくれますか？」

「あなたが皆に手を出さないと約束してくれるなら
だが私は戦争屋だ。過度な期待をされても困る」

スルストは微笑んで、彼女の赤銅色の髪に指をと
した。グランディーナはそんな彼を、まるで石でも見
るような目つきで眺めている。

「もしも、もしもです。わたしが約束を守れなかつ
たら、どうしますか？」

「殺すと言っても言つてほしいのか？」

「わたしは不死ですよ。いくら殺されてもすぐに蘇
ります。どうやって殺しますか？」

「あなたの身体を繋ぎ止めて、ずっと殺し続ける。
蘇つて死に続けなければならない、とでも？」

「オオウ！」

スルストは手を離し、万歳をした。

「そんな恐ろしいことを表情も変えずに言わないで
ください！ わたしも約束は守りますよ。天空の騎士
が約束も守れないと言われるのはしゃくですからネ。
それならばいいですか？」

「それが、あなたの望みなのだろうか？」

「でも、わたし、あなたに強制するようで好みませ

ンネ。それに、あなたはわたしを好いてくれていませ
ン。わたしのことを好きでもない人と一緒にいても楽
しくありませんヨ」

と言いつつ、スルストは再度、彼女の手を握る。

「わたしを好きになれとは言いまセンネ。でも、一
緒にいる時は笑つてくだサイ。わたし、人形に興味は
ありません。それでもあなたが微笑んでくれたら、楽
しいですネ。女性の笑顔には、それだけで全てが癒さ
れる力がありますネ」

「笑うのは苦手だ。だが努力はしよう」

彼女の言葉にスルストは満面の笑顔を浮かべたが、
またしてもその手がほどかれた。

「明日、オルガナへ向かう。カオスゲートを開けて
くれ。その次はシグルドに向かう。つき合つてくれる
だろうか？」

「もちろんです。フェンリルさんやフォーゲルさん
がどうなったか、すごく心配ですネ。特にフェンリル
さんはとても優しい人です。ラシュデイの魔法にかけ
られて、心の中ではきつと苦しんでいマス。早く助け
てあげたいです」

「私は皆に説明してくる。前庭も借りる」

「エエ、どうぞ。でも、戻つてきてくれますネ？」

「少し遅くなるかもしれないがな」

「待っていますスネ。わたしたち、眠る必要もありませんカラ」

グランディーナが外に出ると、辺りはすっかり暗くなっており、彼女が断るまでもなく、解放軍は前庭に野営地を築いていた。食事も済んだようで、皆は思い思いに休んでいる。

彼らが驚いたように自分を見るのを彼女は疑問に思っていたが、右腕が動かせるようになったことを、サラディンたちが説明していかないのだと気づいて納得した。

「ずいぶん長かったのだな」

「スルストは相当な女好きだ。その話をつけるのに時間がかかった」

「皆にはスルスト殿にかけられた術が解けたという話はしてある。だが、おまえの右腕のことは話してない」

「スコルハテイのことも話していないのか？」

「話してない。先日のこともある。おまえから話した方がいいだろう」

「面倒だな。またスルストのところに戻らなきゃな

らないんだ」

「無理をするな」

「そうは言っても、スルストに好き勝手させておくよりはましだ。さっさとオルガナに行つて、フェンリルを味方にすれば、スルストのお守りも押しつけられるかな。」

ランスロット、カノープス、リーダーたちを集めてくれ」

いまの話聞いていた二人は、黙つて皆を集めに行つた。

グランディーナの話に、ほとんどの者は忘れていた二ヶ月前の記憶を掘り起こさねばならなかった。

しかし、存在さえ疑つていたスコルハテイが、彼女の腕を封じていたという話は、実際にその姿を見たのでもない者には、やはり眉唾としか聞こえないようだ。

実際に彼女とスコルハテイの戦いを目撃しているランスロットとカノープスだつて、まさかそんなものが彼女の腕から出てくるとは思つてもいなかったのだ。

否、皆と同じようにスコルハテイのことなど、きれいさっぱり忘れていた。グランディーナがその名を呼ぶまで、思い出しもしなかったし、彼女の腕が動かなくなつた原因にも思い至らなかつた。

「何はともあれ、あなたの利き腕が動くようになってきたことは我々には朗報ですな」

ケビンⅡワルドの言葉に皆が頷く。それだけで十分だとも言いたげだ。彼らはお伽話だと思っていなかった天空の島におり、半神を助けた。それだけでも伝説など腹一杯だというのに、これ以上、説明のつかないような不可思議なことはもうたくさんだと言いたそうでもあった。

「明日はオルガナへ向かう。おそらく、水のフェンリルもスルストのようにラシュデイの術にかかっているだろう。だが、今度はスルストの力を借りて、フェンリルにかけられた術を解くつもりだ。その後でシグルドに渡る。竜牙のフォーゲルも同様だろうが、その時にはスルストとフェンリルがいる。私たちの出る幕はあるまい。ラシュデイが何のためにカオスゲートを開き、天空の三騎士を配下に置こうとしたのかは不明だが、あなたたちはこのムスペルムで待機していてもいい。スルストに同行するのは私とサラディンだけがいい。そのあいだ、こちらの指揮はランスロット、あなたに任せる」

「すまないが、それは引き受けられない。わたしは何があつても君に同行する。例外はなしだ」

グランデイナーは案の定いい顔をしなかったが、サラディンがランスロットに助け船を出した。

「わたしも話し相手がほしいところだ。来てもらった方がいいな。それにアイーシャにも同行してもらいたい」

グランデイナーが珍しくサラディンに反論しようとしたが、ほかの者が何か言うよりも早く、アイーシャが来る場合と置いていく場合とを天秤にかけたらしく、不承不承に頷いた。

「ならば、こちらはケビン、あなたに頼めるか？」

「かまいませんぞ。あるいは先にアラムートの城塞まで戻っていてもよいですが？」

「天空の島が片づいて、すぐにダルムード砂漠に進めるとは限らない。ムスペルムで待っていてくれ」

「承知しました」

「デボネアはどうしている？」

「ノルンさんとご一緒だと思えますが、怪我の方はこれといった異状は見つかりませんでしたわ」

「ないに越したことはない。ただ相手が半神だ、後で厄介なことになつても面倒だからな」

「でしたら、あちらの天幕にいるはずですから、直接お話を伺つた方がよろしいと思います」

「そう言つてマチルダが指した天幕は、皆の物とは一
つだけ離れたところにあつた。」

グランデイナーナはそちらに向かい、リーダーたちは
明日以降のことを軽く打ち合わせて解散する。

一人、グレッググシエイクだけが残つて、例によつ
てサラデインにユリマガアスやスコルハティについて
訊ねていた。魔術師の彼には皆よりもずっと惹かれる
話題のようで、その熱心さは若者に負けるとも劣らな
かつた。

「それよりも俺は気になることを聞いたんだがな」

「スルスト殿のことだろうか？」

「いくら天空の騎士だからつて、そこまで気を遣う
必要があるのか？」

「彼女の話だと、相当の女性好きらしいが、ならば、
わたしたちが首を突つ込んだら、逆効果だろうか？」

「だからつて、黙つて見てるわけにもいかねえだろ
うが」

「彼女も子どもじゃない。余計なことだと言われ
るのが落ちだと思ふんだがな」

「いや、俺は絶対に反対だ」

「いくら女性好きだからつて、スルスト殿も無理は
言わないだろう」

「そんなことどうだか、わかつたものじゃねえぞ」

一方、グランデイナーナはデボネアを訪ねると、その
傷口を見、ノルンと二人から話を聞いていた。

「少し血が止まりにくいようだったな。やつと落ち
着いたところだ」

「大したことがなければいい。ただ、明日の朝まで
気をつけていろ。スルストがムスペルムを離れてから
では取り返しがつかなくなる」

「私が見ているわ。何かあつたら、ムスペルム城に
行けばいいでしょう？」

「あの城、出入りは簡単ではなさそうなんだが、あ
なたなら入れるだろう」

その言葉の意味をノルンは考えていたが、いまはそ
んなことよりもデボネアの方が大事だと思ひ直した。
幸い彼は聞き分けが良く、治療に関しては彼女に任せ
きりだ。

それでグランデイナーナが天幕を出ると、早速カノー
プスにとつつかまつた。

「ムスペルム城に行くのか？」

「スルストに戻ると約束したからな。だが、あなた
は連れていけないぞ」

「おまえだつて戻る必要なんかねえだろう。いくらスルストが天空の三騎士だからつて、そこまでご機嫌取りをする必要があるのか？」

「彼を放り出して、好き勝手にやらせておく方がよほど問題だ。私もいつもつき合う気はない。それともあなたにスルストを止める策があるのなら聞か？」

「俺だつて、そんなものがあるわけじゃねえさ。だけど、みんなのためにおまえ一人が犠牲になる必要はないつて言ってるんだ」

「別に犠牲だなんて思っていないから、気を遣わなくていい。私一人で話が済むなら、その方が気楽だ。あなたに気を遣ってもらわなければならぬというものじゃない。いまさら自分のしてきたことを否定するつもりもない」

カノープスは力づくでも彼女を止めようとしたが、グランディーナは素早くその手を逃れた。利き腕の自由を取り戻した彼女は、彼の覚えていた以上に敏捷な動きだった。それにここであんまり騒いで、事を大きくするのもまずい。その気持ちも彼女を止め損ねた。

「サラディン、あなたに話しておくことがある」

彼は頷き、己の天幕に誘った。二人はそれきり、ずいぶん長いこと、天幕から出てこなかった。

カノープスは仁王立ちになつて天幕を睨みつけていたが、皆はだんだん休んでいく。

ようやくグランディーナ、続いてサラディンが出てきた時には、起きているのはカノープスのほかに夜営だけになつていたほどだ。

彼女は散歩するような足取りでムスペルム城に向かい、サラディンはその姿を見送った。

「どうしてあんたが止めないんだ？」

「哀れまれるのは嫌だと言われた。あれの判断には口を挟まぬようにしている」

彼にそこまで言われては、カノープスにはもう口を挟む余地はなかった。

そんなわけで、グランディーナがムスペルム城に戻つていったことはごく少数の者しか知らなかった。

スルスト以外に誰もいない城は、廊下も薄暗く照らされ、不便さを感じさせなかった。

彼女は城の間取りを覚えていたが、途中にある部屋はすべて扉が閉ざされている。鍵がかかっているわけではないのだが、どの扉も開けられないのだ。この城には魔法がかけられていて、スルストの思うがままということなのかもしれない。

「どれも開けられませんかヨ、グランディーナさん」
 幾つめかの扉に手をかけた時、彼女はいつの間にか
 スルストに背後を取られていた。

「わたし、他人に勝手に城の中を歩かれるの、好き
 じゃありませんネ。別に宝物があるのではありません
 が、この城、わたしの大切な住まいデス。荒らされる
 の好きじゃないンデス。あなたにもそういうものがあ
 るでショウ？」

「ないな。私は武器以外の物を持たないようにして
 いる。だけど解放軍は別だし、あなたには悪いことを
 した」

「それでいいですネ。でも、もしもあなたがムスペ
 ルムに来てくれるなら、この部屋に何かがあるか、一つ
 ひとつ見せてあげられマス。仲良くなつた女の人は
 一つずつ見せてあげているのデス。だけど、全部の部
 屋を見られた人はまだ、いませンネ」

「私がそうしないことを、あなたはよく知っている
 と思っていたがな」

スルストの手が彼女の胸の前で交叉する。解放軍の
 誰よりも太い腕だ。天空の三騎士であることを差し引
 いても、彼の戦士としての力量は高いようだった。

「そんなことはありませんネ。でも、もしもあなた

がムスペルムに住みたいと言うのなら、わたし、骨を
 折つてもいいです。その方がみんなのためにもいいと
 思います」

「私に剣を棄てろと？ 殺されてもありません」

「それは残念ですネ。別にいますぐとは言いません
 この戦いが終わってからでもいいノデス。考え直す気
 はありませんか？」

「ない。私はファイラーハを信用していない」

スルストの手が彼女の口を塞いだ。

「そんなことを軽々しく言わない方がいいです。
 ファイラーハは何でもご存じですネ。でも、あなたの命
 を奪わないのは、あなたのことを信用しているからで
 すヨ」

彼の手が引つ込んだが、グランディーナの肩に置き
 なおされた。

「さあ、この部屋のことほもういいでしょう。あち
 らの部屋で飲みなおしまショウ」

「私は飲まないと言つたがな」

「でしたら別のお楽しみもありますネ。夜はまだ、
 これからデスヨ」

翌雷竜の月二四日、朝も早い時間から、大勢の女性

がムスペルム城に詰めかけてきた。

解放軍でも早起きのマチルダやアイーシャは、野営地には目もくれず、一目散にムスペルム城に突進する女性たちに呆気にとられてしまった。

しかし、彼女たちはムスペルム城に入ることはできず、城の前でスルストの名を連呼した。

それで先にたたき起こされたのは解放軍だったが、彼女たちの怒り狂った様子に、何が起きているのか理解できる者はいなかった。

そこへ、赤い揃いの外套を身につけたムスペルム騎士団員がすつ飛んできて女性たちをなだめ始めたころ、ようやく当のスルストが現れた。

「スルストさま!!」

「朝からいったい何なんデスカ?」

「今日こそ、はつきりしていただきます!」

ムスペルム騎士団の言うことになど、まるで耳を貸さずに数十人の女性たちが一斉に唱える。

「私たちのうち、いったい誰と結婚していただけるんですか?!」

「エッ?」

スルストの表から血の気が引いた。

ムスペルム騎士団も慌てて取り繕う。

「おまえたち、スルストさまはいま、それどころじゃないと言っただろう!」

「いいえ、今日こそは答えを聞かせていただくまで帰りません!」

「でもわたし、これからフェンリルさんとフォーゲルさんを助けに行かなくてはなりません。天空の島はいまが大変な時なんデスヨ。皆さんに答えるにはもつと時間がかかりマス。そんな暇はありません!」

「とんでもありません、スルストさま! 私たちだって、すぐに答えていただかなければ大変なことになります。誰が本命なのか存じませんが、さあ、答えてくださいませ!」

「待つてくだサイ。だから、すぐには答えられないと言つて——アッ?!」

スルストの背を誰かが押した。それで彼は女性たちのど真ん中に飛び出してしまった。さすがの彼にも、いくらかみくちやにされたからといって、彼女たちを押しつけて逃げ出すことはできなかった。

「助けてくだサイ! 待つて、待つて!!」

スルストは悲鳴を上げたが、興奮した女性たちは彼を手放そうとはせずに引つ張り合い、ムスペルム騎士団員も手を出すことができない。

一方、起こされた解放軍も、ただ嘩然とするばかりだ。事情は呑み込めたが、どう収束するのか、そもそもオルガナ行きはどうなるのか予想もつかなかったからだ。

「オルガナに出かけるのは、あちらの用事が済んでからだな」

どこからか現れたグランディーナが言った。

「でも、済むんでしようか、あれは？」

マチルダが呆れた様子で問うたが、グランディーナも首を振る。

「カオスゲートを開けられるのはスルストだけだ。

私たちが焦つてもしょうがない。放つておこう。口を挟むことじゃないし、あんなつたのも自業自得だ」

「そうですね。朝食の支度もしなければなりませんから」

女性陣はそれで良かったが、男性陣はもう少し複雑な気持ちだった。

「まさか、あの全員と結婚の約束をしていたつていうんじゃないだろうか？」

「話を聞いた限りではそのようだが」

「女好きにもほどがあらあな」

「しかし、ファーレン殿はムスペルムの女性はあま

り本気にしないと云っていたが？」

「生真面目な団長さんには女心つてやつがわからなかったんだらうさ」

スルストに同情する声は、結局、誰からも上がらなかった。デボネアの怪我也出血が止まったので、彼に緊急の用がなかったせいもある。

そのあいだにもムスペルム騎士団は何か女性たちをなだめ、事を収めようとしていたが、彼女たちはなかなか収まらず、無理もないことではあるのだが、ひどく腹を立てていた。

しかし、ようやく昼ごろに最後の一人が気を鎮め、スルストが誰とも結婚するつもりがないという言質^{げんち}を取りつけたところで事は収まった。

収まったと言うより、彼女たちの気持ちにやつと整理がついた、と言った方がよかった。

自業自得とはいえ、やつと解放されたスルストは顔と腕とがひつきき傷だらけで、神の騎士の威厳など、どこにもない。

「グランディーナさん、ひどいデス。あそこで背中を押さなくたって、いいじゃありませんか。いくら不死とはいえ、顔と腕がひりひりしますヨ」

「あなたの蒔いた種だ。逃げていないで決着をつけ

るべきだろう。オルガナに行けるか？」

「待つてくだサイ。いきなり起こされたので、わたし、剣を持ってきませんでシタ。ブリュンヒルドはもともとフェンリルさんの物デス。フォーゲルさんと戦う時に丸腰では困りますネ」

「あなたの武器庫には、まだ剣があるだろう？」

「ええ、いろいろありますヨ。名のある魔法の剣や、ただの剣までいろいろとしまっておりマス。剣が欲しいのでスカ？」

「ランズロットは丸腰だし、私もフェンリルにブリュンヒルドを返したら武器がない。補給部隊も連れてこなかったからな」

「わかりまシタ。一緒にどうぞ」

ランズロットは遠慮したが、グランディーナに強引に連れていかれた。しかも彼女ときたら、一振りの剣を選び取ると、いきなり彼に押しつけてきた。

「あなたにはこの剣がいいだろう」

「オウ、グランディーナさん、その剣は何の力もない、ただの剣デスヨ。もつといい剣を持たせてあげたらどうデスカ？」

「ランズロットの剣は別にある。ただ、丸腰の者をオルガナに連れていくつもりはないだけだ」

「そうだな。わたしの手にもよくなじみそうだ、ありがとう」

その一方で彼女は、自分のためにはスコルハティと戦った時に失ったような長い曲刀を選んでいた。両手持ちでとても扱いにくいのが、彼女なりのこだわりがあるらしい。

「グランディーナさん、その刀も大した武器じゃありません！ こつちのエウロスを使ってください！」
スルストが差し出したのは、鞘に入っけていても冷気の漂う剣だ。どうやらかなりの名剣らしいが、案の定、彼女は見向きもしない。

「私はこの方がいい。オルガナに行こう。邪魔をしたな」

「グランディーナさん、考え直してください。わたしの武器庫から持ち出すのがそんな刀だなんて、わたしが笑われてしまいマス」

「誰が笑うというんだ？ 笑いたい奴には笑わせておけばいいだろう。行こう、こんなことで時間を無駄にしたくない」

「待つてくだサイ。エウロスを使つてくダサイ、ネ？」

「いやだ。片手剣は好かない」

「お願いしマス。わたしを困らせなくてくダサイ」

「悪いな、スルスト。私はこれがいいんだ」

「待つてくダサイ！」

彼はそれでも粘ろうとしたが、グランディーナが武器庫を出、ランスロットも続くと哀れっぽい声を上げた。それでも彼女が動かされないのを見て、とうとう諦めたらしかった。

もはや意地の張り合いのようなグランディーナはともかく、ランスロットには、なぜスルストがそんなにエウロスという剣にこだわるのか、まったく理解できなかった。それにエウロスというのは確か、風神ハーネラに仕える東風神の名だ。神の名を冠するほどの剣が、ただの剣のはずはなかったが、彼女に持たせたがるスルストの意図は不明だ。

そんなこんなで彼女たちがカオスゲートに行つたのは、西の方にだいぶ陽が傾いたころだった。オルガナとシグルドに繋がるカオスゲートが、ムスペルム城から離れたところにあつたせいもある。

カノープスがグリフォンとともに見送りに来たが、スルストには不信の眼差しを向けっぱなしだ。

しかし彼はそんな視線など気にすることもなく、オルガナに通じるといふカオスゲートをいとも無造作に

開いてみせ、武器庫で見せた醜態は、サラディンたちには微塵も感じさせなかった。

「サア、これでオルガナに行けマス。フェンリルさんとフォーゲルさんを助ければ、あなたたちには百ニチカラ、オウ、百ニシリキネ！」

カオスゲートからオルガナに至ると、肌を切るような冷たい風が吹きつけてきた。スルストの助言で持ってきた防寒具が早速、役に立つ。シャングリラやムスペルム同様、オルガナも日の入りは早いらしく、辺りはかなり暗くなっていた。

「フェンリルさんはグルーザの加護を受けていますネ。寒いのはそのせいデス。オルガナ城の手前には万年雪を抱いたオロミア山があります。オルガナ城はここからずつと北デス。今日は、その町で休ませてもらいまシヨウ」

「オルガナにも騎士団はいるのだろうか？ 彼らはどこにいる？」

「もう日が暮れマス。オルガナは夜になるとますます寒くなりますネ。だから、皆さん、夜間は外にでませンネ。わたしたちがこんな時間に来ると思つていないでシヨウ」

「フェンリルはオルガナ城にいるのか？」

「たぶん、そうデス。フェンリルさんも滅多に城から出ません。彼女は天の流刑人ですかラネ」

「それはどういう意味だ？」

「寒くなりますから、休めるところを見つけてから話しましょう。大丈夫デス。天空の島の町には、わたしたち、天空の三騎士のための神殿が必ずありマス。そこが狭くても、旅人を泊まらせるのを嫌がる人はいません」

「旅人がいるということは、ムスペルム、オルガナ、シグルドは自由に行き来ができるのか？」

「そうデス。皆さん、カオスゲートを使いますネ。オルガナとシグルドでは食糧があまり実りません。ムスペルムから分けてあげないと、みんな、飢えてしまいます。だから、フェンリルさんがオルガナを閉ざした時、オルガナの人たち、とつても困りましたネ。わたしたちからもフェンリルさんにお願ひします。オルガナの人たちもみんな祈りマシタ。とつても昔のことデス」

やがてカツファという町に着くと、スルストは小さな神殿にグランディーナたちを連れていった。ロシユフォル教会の建物と似ているが、十字架や尖塔はない。

石造りで頑丈そうな、実用的な建物であった。

ムスペルムの町々もそうだったが、オルガナの町にも囲いがない。だから、彼女たちは誰の抵抗もなしに町に入ることができたのだ。ましてやスルストがともにいるとなれば、町を挙げての大歓迎のようだ。

神殿に火が着くということは即、天空の三騎士の来訪を意味するものと見え、すぐに町の人びとが集まってきた。

気をよくしたスルストが早速、神殿の前で一席ぶつ

「皆さん！ わたしたち、悪い魔法にかけられたフェンリルさんを助けに来ました。この人たちはそのため地上から来たのです。どうか、温かくもてなしてあげてください！」

「さすがはスルストさまだ！ やつぱりフェンリルさまを助けに来てくださった」

「スルストさま！ オルガナ騎士団の人たちはどこかへ行つてしまいました。シグルドへ行つたと言う者もいますが、事実はわかりません」

「それから何日も経ちますが、まだ誰も戻りません。もしもシグルドに行かれたのなら、まさか、フォーゲルさままで悪い魔法にかけられてしまったのでしょうか？」

「そのようです！ わたしも悪い魔法にかけられ、この人たちに助けてもらいました。わたしたち、天空の三騎士が魔法にかけられるなんて、とても恐ろしいことですネ。だから、わたしたち、地上に降ります。そして平和を取り戻して帰ってきます。皆さん、それまでさみしがらないでください！」

人びとは一斉に笑い転げた。スルストも一緒になつて笑い出す。

「スルストさま、ご武運を！」

「早くお戻りください！」

「フェンリルさまとフォーゲルさまを助けてください！」

「スルストさま、万歳！」

賑やかな激励の声を受け、スルストが陽気に手を振る。それらの声はグランディーナたちにも向けられた。ランスロットから見ると、その励ましは何とも無責任に聞こえた。彼らは地上の戦乱とは無縁な世界にいる。そこで平和を願われても、彼らが傷つくことはないのだ。

しかしスルストは終始、上機嫌で相手をし、ようやく人びとがいなくなった時にはグランディーナたちは食事を終えたところだった。

「すっかり遅くなりまシタ。皆さんが先に食べていてくれて良かったデスネ。オルガナの人たち、不安なんデス。わたしたちが誰かの思いどおりになったことなんて、なかつたんですかラネ。わたしも今度のこと、はとて深刻に考えていますヨ。ラシュデイの力、放つてはおけませんネ」

食事は必要ないと言つたスルストだが、酒を飲むのは好きらしく、差し入れられた酒瓶を勝手に開けて飲み始めた。それを見たランスロットは、オルガナに来た面子が全員、酒飲みでないことを少しだけ気の毒に思つたほどだ。

「それよりもさっきの続きを聞かせてくれ。フェンリルが天の流刑人とはどういうことだ？ 彼女がオルガナを閉ざしたと関係があるのか？」

スルストの表情が暗くなった。けれど、彼は基本的小しやべりなたちらしく、口を閉ざしてしまふようなことはなかった。

「ええ、ありますネ。少し長い話になりますが、いいですか？」

「頼む」

「それはオウガバトルが終わつた後のことでス。わたしたちはファイラーハの命で天空の島を治めることに

なりました。なぜなら人間たちは地上の覇権を得たというのにまた争いを始め、それを嫌がった人たちが天空の島へ移住を希望したからです。シャングリラにはもともとフェルアーナが住んでましたが、ムスペルム、オルガナは誰も統治していなかったからです。シグルドはオウガバトルの前からフオーゲルさんが治めていたので、ファイラーハはわたしとフェンリルさんにもムスペルムとオルガナを治めるように言ったのでス」

何百年、あるいは何千年も昔かわからないことも、半神として永い時を生きるスルストには昨日のこのように思われるのか、その語り口に澱みはなかった。彼特有の妙な訛りも、この時はかなり影を潜めていた。

オウガバトルの後の時代、天空の三騎士と十二使徒の助力によって地上の覇権を得た人間たちだったが、今度は我一人が王にならんと、さらなる争いを始めた。このことを憂えた人びとが争いを嫌って天空の島への移住を希望すると、ファイラーハはこれを許し、ムスペルムとオルガナの統治をそれぞれスルストとフェンリルに命じる。と同時に、天空の三騎士と十二使徒に地上への再度の介入を禁じ、カオスゲートをも閉ざしてしまつた。

しかし、ファイラーハの命でカオスゲートを開くことのできる唯一無二の聖剣ブリュンヒルドを預かつたフェンリルは、神に背いて地上にブリュンヒルドを降ろしてしまふ。そればかりか、聖なる父が人を信じなくなるとは何事か、天が人に対して全ての救いの道を断つてはならないとファイラーハを断罪する。

だが、ファイラーハによって天空の三騎士に任ぜられた身ではフェンリルの叛逆もそこまで、スルストもフオーゲルも彼女に同調しなかった。

ファイラーハは彼女をオルガナに幽閉したが、ブリュンヒルドを地上から取り返すことはしなかった。その代わり、いつか心正しき者が地上より聖剣をもたらすまで、彼女をオルガナから出さないと宣言したので、そのことに衝撃を受けたフェンリルは、オルガナへの出入りを何人にも禁止してしまつたのである。

寒冷なオルガナの気候では人びとに行き渡るほどの食糧が得られることはなく、オルガナの民は餓えた。だが、オルガナ城に籠もつてしまつたフェンリルはこの惨状に目を向けようとせず、人びとは窮地に陥る。オルガナの民はフェンリルに請い願つたが、島ばかりか心まで閉ざしてしまつた彼女には、その声も容易に届かなかつた。

オルガナの異変を知ったスルストとフォーゲルもフェンリルに呼びかけたが、彼女にはその声も届かずに何年かが経つ。

とうとう業を煮やした二人はカオスゲートを使わずにオルガナに渡り、強引にオルガナ城を開かせた。

これでようやくフェンリルはオルガナの惨状を知り、島を開くが、スルストとフォーゲルのしたことを咎め、再びオルガナ城を長く閉ざしてしまふ。

また彼女自身、オルガナから出ることを許されていなかったため、オルガナの民は救われたが、スルストやフォーゲルがたとえ会いに行っても、フェンリルに会えることはないままであった。

彼女がやつとオルガナ城から出てきたのは、ここ数百年ばかりのことで、それでも城に閉じ籠もりがちなのだという。しかしオルガナの民はそんなフェンリルの心を尊重して、滅多に城を訪ねないのだそうだ。

「フェンリルさん、とても真面目な人でス。オルガナの人たちを傷つけてしまったことも、とても悔やんでいましたネ。でも、わたしたちもとても怒られまじタ。フェンリルさん、長いこと、わたしたちを許してくれず、わたしたちもあんなに強引に城を開けさせ

ようとは二度と思いませんでしたガ、なかなか城に入ってもらえませんでしたシ、フェンリルさんに誰も会えませんでじタ。フェンリルさん、地上のことも気にかけていますネ。あなたたちがブリュンヒルドを持ってきたので、もういつでもオルガナから出られると思います。でも、そうしないのはきつと、ラシュデイの命令と戦っているからだと思ふのでス」

「あなたはそうではなかったということか？」

「ラシュデイに魅了されていた時は、そのことを疑問に感じませんでした。それにわたしはファイラーハの言うことはもつともだと思いましたが。やつとオウガバトルが終わったというのに、わたしたちの助けがなければ、人間たちは滅びていたかもしれないのニ、また自分たちで争い始めました。わたしも人間だった時がありますから、人間たちを愚かだとは思いません。でも、ファイラーハにそう言われても仕方ないところもありましたネ」

「だが愚かだと思っていた人間たちが、自分たちを支配下に置けるほど力をつけた。ファイラーハとしては放っておけないと思つたから、あなたたちが地上に降りることを許すというわけか」

「否定はしませんガ、なかなか厳しい言い方ですネ。」

でもあなたたちも、わたしたちの力を当てにして天空の島へ来たのでしょウ？ おあいこですネ」

「私たちとはあいこかもしれないが、ラッシュデイ相手にはどうかな。奴と対峙した時、あなたたちがまた魅了されれないという保障はあるのか？」

「それを言われるとわたしも弱いのですが、今度は大丈夫ですネ。わたしたちがラッシュデイに操られることは二度とありません。だから安心してくださイ」

少し間が空いて、グランディーナは訊ねた。

「オルガナ城までは二日かかると言ったな？」

「そうデス。だからフェンリルさんと戦うの、その次の朝にしてもらいたいノデス。夜に戦うことはよくありません。それは闇に乗じる悪魔やオウガたちの戦い方デス。あと、フェンリルさんとの戦い、すぐに終わりマス」

「あなたの腕が勝っているからか？」

「残念ながら違いマスネ。ブリュンヒルドはフェンリルさんの剣ですが、もともとはファイラーハの物デス。ブリュンヒルドがフェンリルさんに当たれば、彼女は正気を取り戻すでショウ」

「あなたやフォーゲルもそうなのか？」

「ハイ。でも、あなたたちでは無理でシタネ。残念

なことでしょウケド」

「スコルハティのことならば惜しんでも仕方がない。彼がいる限り、私の腕も動かなかった。どこかで決断しなければならなかったんだ。」

そろそろ休もう。明日は一日、歩きどおしだ」

しかし、そう言った当人は皆が寝に就くのを確認すると別室に移り、冴え冴えとした月を見上げて、いつまでも休もうとしなかった。

「眠れないほど気になることでもあるのでスカ？」

わたしでよければ、お相手しますヨ」

「あなたこそ休まないのか？」

「わたしたち、天空の騎士になった時から休むこともなくなりマシタ。眠ることはできませんが、必要はありません。病気にもなりませんし、怪我をしてもすぐに治ります。わたしたちを本当に滅ぼせるのは神々だけでスネ」

「ならば、あなたはなぜ天空の騎士になった？ なりたいと思つてなれるものではあるまい？」

「あなたがわたしのことに興味を持つてくれること、すごく嬉しいデス。でも、あなたの仲間も興味あるのじゃないかと思シマス。明日、オルガナ城へ向かう道中で話してあげまショウ」

「わかった」

「だけど教えてください。なぜ、そんなことを知りたいと思ったのですか？ あなたはそういうこと、つまり神のことには関心がないと思っけています」

「あなた個人に興味を持ったからだ。死ぬことも許されず、眠ることも食べることも必要ない、フィラーハのためにただ戦うだけの存在、どういいう経緯いきまじでそんな気持ちになるのか知りたくなつた」

グランディーナはわずかに笑つたが、スルストは笑わなかつた。あるいは笑えなかつたと言つた方が正しかつたかもしれない。しかしその表は崩すことなく、出てきた声音も平静なままだ。

「わたしは天空の騎士になつたことを後悔していませんヨ。たとえ、あなたの言うとおりでつたとしてもネ。でも残念なことに三人とも同じ考えというわけではありませぬ。だけど、それがわたしたちの強みでもあるのです」

「遅くなつた。私も休む」

「おやすみなさい」

彼女が立つのをスルストは引き止めなかつた。その代わりに、グランディーナがいなくなると大きく息を吐き出して、肩をすくめた。

夜は、まだ明けそうになかつた。

翌闇竜の月一日、スルストがオルガナ騎士団の行方を知らせてきた。

「オルガナ騎士団の人たち、ルーガナナに行つたさうデス。わたしのように、フェンリルさんも騎士団を招集したんでしょウネ。もしかしたら、途中で会えるかもしれませぬヨ」

「こちらは別に用があるわけではないが、戦闘になつたら面倒だな」

「大丈夫デス！ そのためにわたしがいますネ。戦闘なんかにならないよう、説得してあげマス。騎士団の人たちだつて、戦いたくないはずデスヨ」

「ならば、もしもの時はあなたに任せよう」

それから、彼女たちはカツファ中と思われる数の人びとに見送られて、オルガナ城を目指して発つた。相変わらず空気は冷たく、ガルビア半島に行つた時の防寒具は必須だつたが、天気は良かった。

照りつけるムスペルムの陽射しと違い、オルガナのそれは弱々しいものだつたが、それでもオルガナでは暖かい方なのだとスルストは言う。

「天空の島には地上と違って季節というものがあり

ません。ムスペルムは年中蒸し暑く、オルガナは年中寒いデスネ。シグルドは温暖な気候ですが、島が分断されてしまつて住みにくくなりまシタ」

「なぜ神に守られているはずの天空の島が分断されるようなことになつたのです？」

「神の守りよりもディバインドラゴンの呪いが強かつたからデス。でも詳しい話はシグルドに行つてから聞いてくだサイ。わたしから話すのはやめておきたいノデス」

「なぜだ？」

間髪入れずに訊ねたグランディーナに、スルストが渋い顔をする。

「わたしが話すと、どうしてもフォーゲルさんに批判的になつてしまいます。でも、あなたたちがフォーゲルさんに会う前に先入観を植えつけてしまうのは良くありません。だから話したくないのです。いいですか？」

彼女が少し考えてからから頷いたので、スルストも安堵したような顔になる。

ランスロットが思うに、昨日の女性たちへの対応といい、スルストは女性にあまり強く出られないたちのようだ。

「それよりも、昨日はフェンリルさんの話をしましたから、今日はわたしの話をしまスネ。わたしも元は人間でシタ。オウガバトルはとても長い戦いだつたのです。わたしが生きていたのはそんな時代でシタ」

世界各地のカオスゲートから悪魔やオウガが現れ、地上の人びとを攻撃し始めた時、名のある賢人たちはそれがいつもの魔界からの攻撃だと考えた。そのような被害は神代には多くあり、スルストもそのために戦う戦士の一人だつたのである。だが、前線で戦う者たちはいつもならでたために人びとを襲つてくるオウガたちが組織化され、人間たちの住む町や村を根こそぎ破壊しようとしているらしいと感じ、賢人たちや神々に仕える神官たちに警告するようになった。

しかし、そのことはなかなか受け入れられなかつた。魔界の住人たちが組織化することはあり得ないというのが賢人たちの定説だつたからだ。それでも、そうと聞かされた戦士たちは、次第に自分たちの直感こそが正しいことに気づき、幾度も警告を繰り返した。人間たちの対応が遅れるあいだに、いくつもの町や村が失われていき、たくさんの命が奪われ、国々が滅んでいった。

とうとう賢人たちが魔界からの侵略を認めたと時、世界の三分の一はオウガに蹂躪されてしまっていた。多くの戦士たちの命も失われていたが、腰を上げた賢人たちは組織立てて戦士や魔法使いを育てるようにし、これに対抗するようにした。

しかし、生来の破壊者であるオウガと、人ではあまりに体格が異なる。

また、戦士にしても魔法使いにしても一人前に育つまで時間がかかってしまう。人びとの抵抗も空しく、人間は徐々に悪魔たちに追い詰められていった。

そのあいだにも賢人や神官たちは神への助力を願っていた。魔界の住人があのように組織化できていた最大の理由は、魔界の王デムンザを筆頭に、名だたる邪神が力でまとめ上げていたからだだったのだ。これに対抗するにはどうしても神の力が必要であった。

人の力では、いくら強力な戦士でも神には敵わない。神々の助力を仰がなければ、人間は滅び、地上は悪魔のものとなり、第二の魔界と化すだろう。賢人も神官も揃って天界にそう進言したが、ファイラーハを初めとする神々はそれでも耳を貸そうとしなかった。

たまに地上に降りた神が気紛れに悪魔やオウガを吹き飛ばすことはあっても、それが長続きすることはな

く、そのあいだにも多くの命が失われていった。

スルストが生まれたのは、そのような時代のただ中で、戦士として数多あまたの悪魔やオウガと戦った。彼は卓越した戦士であり、鍛えられて数々の激戦を生き抜いた。それでも彼一人の力で戦況を変えられるはずもなく、人間たちは次第に追い詰められ、安全な土地も失われてゆく一方だった。

彼には神に祈る間もなかった。ただ毎日のように襲ってくるオウガや魔界の住人と戦い、疲れ果てて泥のように眠る日々の繰り返し、それもいつ終わるのかはわからず、勝てるという見込みもないままであった。

それでも彼は一心に剣を奮い続けた。いつか神が助け、カオスゲートから無尽蔵に湧いてくるオウガを追い払ってくれるものと信じて戦い続けた。それがいつになるのかなどわからなかったが、スルストは神の善意を信じていた。ファイラーハの降臨を夢見ていた。

しかし、彼はある時、悪魔の魔法に倒される。

神は最後まで自分を救いに来なかった、そう思った時、彼は自分がアヴァロン島にいることに気づいた。生き返ったのではなく、ほかの大勢の戦士や魔法使い同様、魂だけがアヴァロン島に囚われたのだ。そこで彼は、勇敢な戦士や魔法使いだけがアヴァロン島にい

ることを知り、じきにファイラーハを初めとする神々が、彼らを率いて地上に進攻することを知った。

そして、ファイラーハはアヴァロン島に集めた戦士たちに自らに仕える天空の騎士となることを求めた。スルスト以外に何人も戦士が名乗りを上げたが、神が求めるのは二人だけで、地上への進攻時に適性を計るという。それからファイラーハは彼らを、すでにシグルドを治める天空の騎士、竜牙のフォーゲルと引き合わせて、オウガや邪神を地上より一掃するよう命じたのだった。

このあいだにも魔界からの侵略は進み、人間たちはカストラート海の一角に追い詰められていた。天空の騎士となって転生したスルストたちは、この地に降臨し、反撃を開始する。

天空の騎士たちには十二使徒も従っていた。アヴァロン島に囚われた魔法使いとまだ地上に生き残っていた賢者たちを合わせてそう呼び習わしたのだ。しかもファイラーハは十二使徒に、自ら祝福した宝石を渡しており、彼らは猛烈な力で悪魔やオウガを倒していく。一時とはいえ、不死性も手に入れた天空の騎士たちも、邪神とも対等に戦えるようになっており、地上と魔界の力関係は次第に逆転していった。

その一方で、主に十二使徒たちが各地のカオスゲートを封印し、魔界から地上への出入りを閉ざしていった。ここで人間側が勝利しても、カオスゲートが自由に開かれる限り、またオウガバトルを繰り返してしまふからだ。それにその時もまだ、魔界から悪魔やオウガが無尽蔵に湧いていたのだ。いくらスルストたちが不死であつても、無限に湧いてくる相手では分が悪い。そして最後にファイラーハはカオスゲートを開く力を持つ聖剣をフェンリルに与えたのであつた。

「わたしたちが最後に行つたのはアンタンジルです。最後まで神々に逆らつた暗黒のガルフを封印するためでした。ですが、わたしたちも数が減つてしまつていました。邪神と戦うと、わたしたちの不死性も危うかつたのです。最後まで残つていたのはフォーゲルさんとフェンリルさん、それにわたしだけになってしました。わたしたちは暗黒のガルフを封印し、アンタンジルに至るカオスゲートも封印しました。それはアンタリア大地というところにありますね」

「ですが、二四年前の大戦以来、封印の儀式は行われなくなつていと聞きます」

サラデインの言葉にスルストは案じるように頷いた。

「それはわたしたちも知っています。でも、ガルフの被害はまだ出ていません。ゆくゆくはアンタリア大地とアンタンジルまで行かなければならないでしょう。その時はわたしたちも手伝いますネ。」

話が逸れました。残ったわたしたち二人は、フィラーハから正式に天空の三騎士に任命されました。そして、フォーゲルさんがシグルドを治めているように、わたしがムスペルム、フェンリルさんがオルガナを治めることになりました。天空の島に地上から人びとが来たのは、その後のことです。だから、同じ天空の島でも、シグルドとムスペルム、オルガナはちよつと違いますネ。いまではずいぶん混血も進んだと思います。シグルドの人たちはとつても保守的なんです。」

「それでは天宮シャングリラはどうなのですか？」
 「シャングリラはムスペルムの方に近いですネ。もともとと住んでいた人と、地上から避難した人たちが住んでいます。オウガバトルの前は、天空の島と地上とはたやすく行き来できたんですヨ。でも、そのためにオウガバトルも引き起こしてしまいました。だからフィラーハはカオスゲートを閉ざしたのでス。」

サラディンはさも興味深そうに頷いた。彼が熱心な聞き手なのでスルストは気持ちよさそうにしゃべって

いるようだが、グランディーナは話のあいだ、一度も振り返らず、アイーシャも彼女と並んでスルストには極力、近づかないようにしていたので、彼が本当に機嫌が良かったかは不明である。

カッファからオルガナ城に向かう道中には町がない。昨晚の手厚い歓迎とはうってかわって今日は野宿しなければならなかったが、それでも今朝、カッファの人びとが持たせてくれた糧食のおかげで、侘びしい食事にはならないで済んだ。

野宿したのは北にオロミア山を臨む川沿いでだ。川の水は冷たく、汲みに行ったランスロットは、ディアスポラの雪解け水を思い出した。それも、いまとなつては遠い昔のことのようだ。

「アイーシャ、ひとつ訊いてもいいかい？」
 「何でしょうか？」

「先ほど、スルスト殿が言っていたアヴァロン島の話は知っていたのか？」

「はい。アヴァロン島が聖地と呼ばれるようになったのは、オウガバトルの時代に戦いで倒れた戦士たちの魂が集まり、憩う場所だからなのだと言われたことがあります。ですが、ロシユフォル教会の大聖堂には、そのような方たちを祀る機構ありませんでしたので、

私も詳しいことはわかりません。もしかしたら、大神官さまならば、ご存じだったかもしれません、私は修行中の身でしたから」

「君はいまもそのようなことはあると思うかい？」

「なければ良いと思います」

アイーシャは目を伏せがちに答えた。

「神々の御心は私のような者にはわかりかねますが、死してなお戦うよう求められることはあつてほしくないと思うのです」

「それが何よりの榮譽だと思われていてもかい？」

「はい。死は神々が私たちに賜った贈り物です。その安らぎを何人たりとも奪う権利はないのではないのでしょうか？」

「勇敢さを極めるあまり、安らぎを求めることは恥とされる場合もある。考え方の違いもあるのだろう」

「そうですね」

彼らが火の傍に戻ると、スルストは相変わらず陽気な調子でおしやべりをし、グランディーナが言葉少なに相槌を打っていた。サラディンは一人で考え事のようにだ。

「わたしは食べ物、いりません。あなたたちで分けてください。それよりもお酒は入ってまスカ？」

「いや、ないようですが」

「オオ、それは残念デスネ。オルガナのお酒を飲めるかと思つて楽しみにしていたノニ。次にオルガナに来るのは、いつになるか、わかりませんネ」

「酒なら私が断つた。私たちは飲まないし、荷物になる。あなたが運んでくれるのなら、話は別だが」

「そんなつれないことをしないでくだサイ。言つてくれれば、わたしが運んでも良かったんでスヨ。ルーガナナではわたしが持ちますネ。だから、お酒は断らないでくだサイ」

「わかつた」

しかし彼女は分けられた食事も水もほとんど口をつけず、ずいぶん長いこと、焚き火を睨みつけていた。

サラディンも食が進まないようで無言のままだ。

スルストのおしやべりにつき合わされたのはランスロットで、アイーシャも時々、相槌を打つた。

二人分の片づけを済ませてから、アイーシャはグランディーナに近づいた。

「片づけた方がいい？」

その言葉にグランディーナは初めて食事に気づいたような顔をした。

「すぐに食べる。私よりもサラディンを」

「ええ」

「天空の島の食べ物だと言つても、ゼテギネアで食べる物とあまり変わらないな」

「やつと食べ始めながら、彼女にしては珍しい感想を漏らす。」

「もつと変わった物が出てくるとでも思つていたのかい？」

「ゼテギネアとガリウスぐらいには違うだろうと思つていた」

「それぐらいは異なつていると思うが、外国に來たという感じはしないね。もともとゼテギネア大陸のなかでも極端に違つているわけではないからな」

「天空の島に渡つてきたのはゼテギネアの人が多かつたからでしょウネ。ライの海周辺のボルマウカの人も來ましたが、あんまり数はいなかったデスネ」

「オウガバトルは世界を巻き込んだ戦いだつたのだから？ なぜそんなに偏つているんだ？」

「オウガバトルの後、人間はカストラート海から復興を始めました。ガリウスやジパングは遠いデスネ。人がそこまで行くには長い時間が要つたんでスヨ。それに、ゼテギネアで始まつた争いを嫌つて、天空の島だけじゃなく、ほかの大陸に逃れていった人たちもい

ますネ。人間はそうやつて世界中に広まつたデス。

「オウガや悪魔の脅威も薄れましたカラネ。それに、いまの国ができたのはオウガバトルの後でスネ。あなたの言うほどの違いは昔はなかつたんデスヨ」

「それならば、ガリウスやジパングの人間も、元を正せば、同じ人間だということか？」

「全部が全部じゃありません。ただ、かなり近いことは確かデス。だから互いに争うのは馬鹿馬鹿しいと思うんでスヨ。ファイラーハが嘆くのは当然でスネ」

「人間は兄弟とだつて争う。何も不思議なことはない？」

スルストは肩をすくめた。

「それから、グランディーナとランスロットとで天幕を張つたが、これがまた一苦労だつた。聞けば、彼女は自分で天幕を張つたことがないと言う。確かに、解放軍の結成以來、彼女がそんな仕事をしたことはなく、いつも誰かの張つた天幕か、外で休んでいたり、休むことさえなかつたりしたものだつたが、あれは彼女なりの氣遣いだつたのかもしれない。」

「だからといって、天幕なしでは冬は大変じゃないか？」

「そうでもない。木の虚こゝろでも洞窟でも、風さえ凌げ

ばいい。運が良ければ山小屋もあるし。戦場なら、集団行動だ」

さすがにカノープスにも来てもらえば良かったとは言えなかった。それに、不自由なりに三つ張れば足りたので、ランスロットはそれ以上、追及しないことにしたのだ。

「あなたは先に休んでいい。後で起こす」

「承知した」

それほど疲れたわけではなかったが、彼はすぐに寝ついた。もともと、眠るのは早い方なのだつた。

しかし、アイーシャはなかなか寝つかれなかった。昼間の疲れもあったが、一日移動などということは解放軍ではよくある話で、それは大した理由ではない。グランディーナの様子に気がかかって、目をつぶつても、火を睨みつけるようにしていた彼女の表情が浮かんできて眠りが訪れなかったのだ。

とうとう意を決して外をのぞいてみると、グランディーナ、サラディン、スルストが焚き火を囲んで座っているのが見えた。だが、三人とも話はしているわけではないようで、火のはぜる音が聞こえてくるくらいだ。

「いつまでそうして座っているんですか？」

そう言いながら、スルストがグランディーナの隣りに座り、肩を抱く。その仕草にアイーシャは思わず目を背けた。

彼の話は続いている。

「わたし、こんなに長時間、歩いたのは久しぶりですネ。とつても疲れてしまいまシタ。早く休ませんか？」

「悪いが今日はそんな気分じゃない。また明日にしてくれ」

「オオ、そんなことを言つて、二人でずっと座つてるつもりなんですか？ わたし、あなたの心配していること、当てられますネ。でも、そんなことを心配していてもしょうがないです。世の中、なるようにしかありません。ましてやファイラーハの思召しは誰にもわかりません。それよりもいまを楽しんだ方がお得ですネ。そうではありませんか？」

グランディーナが何か言つたようだが、アイーシャには聞き取れず、彼女はまた三人の方を見た。その位置は先ほどと変わっていない。スルストは相変わらずグランディーナの肩を抱いているし、サラディンも動いていない。

「もちろんデス。わたし、天空の騎士になったことをとても名譽だと思つていますヨ。ファイラーハのため、弱い人びとを守つて戦うことはわたしの誇りデス。その途上で倒れても悔いはありません。それはフェンリルさんもフォーゲルさんも同じはずデスネ。ああ、いや、ちよつと違うかもしれませんケドネ」

グランディーナは首を振つたが、アイーシャにはそれが意外に思えなかつた。

「しょうがないデスネ。今日はこれで退散しましヨウ。お休みなさくイ、グランディーナさん」

その時、スルストが自分の方も見たような気がして、アイーシャは慌てて首を引つ込めた。しかし、天空の騎士は自分に割り当てられた天幕へ行つてしまい、彼女のいる天幕には近づいてこなかつた。

それで彼女がまた外をのぞくと、グランディーナとサラデインの話が切れ切れに聞こえてきていた。

「あなただつてガルビア半島からこちら、黙つてばかりいる。何を思いついたのか、いい加減、話してくれてもいいんじゃないか？」

サラデインの返答は歯切れが悪く、ほとんど聞こえない。彼でもそんな風に話すことがあるのだ。アイーシャはいつも他人に聞こえるよう、はつきり話す印象

しかなかつたので、とても意外に思つた。

「私はまだ起きています。夜番をスルストに頼むわけにもいかないだろう。後でランスロットに替わつてもらう。あなたこそ、もう休んだらどうだ？ 手の火傷だつて、治つたわけじゃないんどう？」

グランディーナがサラデインの返答を待たずに立ち上がった。炎が彼女の髪を赤々と照らしている。

「足が痛むのか？ すまない、あなたやアイーシャには無理をさせたな。アイーシャに頼んで、薬湯を煎じてもらおう」

それを聞いて、アイーシャは再度、天幕に引つ込んだ。治療箱を探すまでもなく、疲労によく効く薬草が二種、道具のいちばん上にしまわれていた。マチルダが気を利かしたものと思われ、その心遣いにアイーシャは感謝するばかりだ。

グランディーナが天幕に入つてきたのはその時だ。彼女は天幕に灯りがついていたことに、ひどく驚いた様子だつた。

「起こしてしまつたか？」

「いいえ、眠れなくていたの。そうしたら、あなたとサラデインさまの話が聞こえたから、捜し物をしていたのよ」

「あなたも疲れたのか？」

「私は大丈夫、アヴァロン島育ちだもの、これぐらいの移動だってどうってことないわ。それよりもサラデインさまがお疲れなのでしょう？」

「何か、効く物があればと思つて。手伝うか？」

「お湯を沸かしておいてもらえる？」

「わかった」

結局、アイーシャはサラデインに按摩あんまをすることに なった。薬草だけに頼るよりも、その方が早いと思つ たからだ。

「サラデインさま、今度からもつと早めに仰つてく ださい。こんなになるまで放つておいては、お身体に も良くありません」

「色々と考え込むことが多かつたものでな。自分の 身体のこととは忘れていたのだ。だが、わたしも歳を 取つたものだ」

「お身体はもつといたわつててください。私だけでは 及ばないところもありますし」

「今度から気をつけよう」

「そんなことを言つたつて、サラデインはどうせ忘 れてしまふだろう？」

「いつもは魔獣がいてくれるからな。油断していた のだ」

サラデインは苦笑いをしたが、グランディーナは小 さく舌を出した。

「ご自分のことも忘れられるほど、何について気に かけていたのですか？」

アイーシャの言葉に二人の笑みが消える。彼女は思 わず手を止めたが、サラデインが話し出したので按摩 を再開した。

「ラシュディ殿がなぜ、天空の三騎士殿を虜にした のかということや、そもそもなぜ、このような戦いを 起こしたのかということだ。だが、わたしにできる ことは想像してみることだけだ。確証がないから、 堂々巡りを繰り返してしまふ」

「だつたら、そんなことはやめればいい。奴が何を 企もうと、いずれ出会う相手だ。会つてから潰せばい いだろう？」

グランディーナの声音は、少し怒っているようにも 聞こえる。

「先に対処できることがあれば手を打ちたいのだ。 単に戦うだけで止められるような方ならば、事態は もつと単純なもので済むだろう」

「堂々巡りをしているだけなのに、有効な手などあるものか。あなたの言うことは矛盾しているぞ」

「そんなことはわたしにもわかってる。だが、ラシユデイ殿のことはおまえよりも知っているつもりだ。考えるうちに答えが出るかもしれない」

「だけど、こんな時間にアイーシャを働かせるのは論外だ。でも、あなたは熱中すると周りが見えなくなる。だつたら、最初からアイーシャに気にかけていてもらつた方がよほどいい」

「そうだな。頼むよ、アイーシャ」

「は、はい」

妙なところで話が落ちたが、アイーシャは気にしないことにした。どちらにしても彼女は天宮シヤングリラへの遠征以来、グランディーナ専属の癒し手であるようマチルダから命じられている。ここにサラディンが加わつたところで大した違いはないはずだ。

それよりも、さすがにそろそろ眠くなつてきた。夜中に按摩をするなんて、考えてもいなかったからだ。サラディンが先に休み、アイーシャも続いて休んだ。

グランディーナがランスロットを起こしたのは、その後のことであつた。

翌日も同じような行程だつた。ただ、昼過ぎにルーガナナの町に着き、彼女らはカツファの町と同様の歓迎を受けた。

さらに、ここで初めてオルガナ騎士団長のデインⅡ マーンチと顔を合わせた。聞けば、フェンリルに召集されて以来、ずっとルーガナナに滞在していたのだそう。

「いったい、何をしていたんですか？ オルガナの秩序を守る騎士団が一ヶ所に集まっているのは、あんまりいいことではありませんネ」

「仰るとおりです、スルストさま。ですが、わたしたちもこのような事態は初めてだつたものですから、どうしたらいいのかからなくて。それに、そのゼテギネア帝国軍にはムスペルム騎士団の方が二人、混じつていらつしやいました。スルストさまやフォーゲルさまに助けを求めようにもカオスゲートは開けられず、ほかの島の状況も分からないまま、動きが取れなかつたのです」

そう言つて、オルガナ騎士団長は恐縮する。ムスペルム騎士団長も生真面目そうな人物だつたが、こちらも負けず劣らずだとランスロットは感じた。

「まあ、過ぎてしまつたことはしょうがないですネ。

それにわたしが来たからには百人力デス。明日にもフェンリルさんを解放して、オルガナも平和にしてあげまショウ！」

「お願いします、スルストさま。来ていただいて、本当に助かりました。どうか、今日はゆっくりとこの町でお休みください。スルストさまがおいでいただいたのも久しぶりですし、皆も喜びましょう」

「もちろんデス。わたし、二日も野宿するのは嫌ですネ。

グランディーナさん、あなたたちもぜひ、そうしなさい」

「そうだな」

常夏のムスペルムに比べて、オルガナの気候は厳しく、フェンリルが鳥を閉ざした時にオルガナの民は餓えてしまった、という話をスルストがしていたので、ランスロットは何となくオルガナを貧しいものだと考えていたのだが、ルーガナナで催された宴会に出された料理を見ると、天空の島について、自分がいかにものを知らないか、思い知らされるかのようだった。あるいは、それから何百年も経って、天空の島はずっと豊かになったのかもしれないが。

カッファに続いて歓待を受けて、スルストは上機嫌だった。

言ってみれば神のような存在がすぐそこにいるのだ。人びとの歓迎ぶりは地上でならば、さしずめ神に捧げる祭りと同じなのかもしれないかった。

「昨日の話が嘘のようだな。スルストの女癖の悪さはオルガナでは知られていないのか？」

「そんなことはないだろう。スルスト殿の周りにいるのは男性ばかりだ。女性はすぐに離れているよ。ムスペルムよりも警戒しているくらいだ」

「本当だ」

グランディーナが皮肉な笑みを浮かべた。

「あなたたちはムスペルム騎士団ではないようだが、どこの島の者かね？」

「私たちは地上から来た、ゼテギネア帝国と戦う解放軍だ」

グランディーナの即答に、その老人はかなり驚いたらしかった。地上と天空の島の交流などないに等しい。天空の島の住人が地上の者を見ることは、ここ何百年か何千年もなかったのだろう。

「地上の者がなぜ天空の島へ来られたのだ？ ま、まさか」

「あなたの言うまさかが何を指すのかは知らないが、カオスゲートを開く聖剣ならばスルストが持っている。私たちは天空の三騎士に力を借りに来た」

「では、おぬしたちがスルスト殿を助けてくれたのか？」

「そうだ」

老人はいきなりグランディーナの肩をたたいた。

「偉い！ おぬしたち下界の間もなかなかやるもんじゃない。見直したよ。いや、ほんと！」

彼の声がほかの者にも聞こえたのだろう。人びとの視線が急にこちらに集まった。そのまま老人がいまの話をしたので、スルストの歓待を横目で眺めていただけだというのに、いきなりグランディーナが宴の主役にならなってしまうたかのようだ。

「おお！ 皆さんを紹介するのをすっかり忘れていましたタネ。ごめんなさいデス。許してくださいネ。オルガナの人たちにつばい歓迎してもらえて、わたしとつても嬉しかったんデスヨ。」

でも改めて皆さんに紹介しますネ。この人たちはわたしを助けてくれた解放軍デス。わたしたちを魅了したラシュディという魔導師のいるゼテギニア帝国と戦っているマス。この人がリーダーのグランディーナさ

んデス。地上から来ましたタネ。その魔導師も帝国も放っておくとつても危険デス。天空の島の平和も脅かされてしまいマス。だから、わたしはこの人たちと一緒にいくことにしまシタ。フェンリルさんやフォーゲルさんも、解放したら一緒に行ってもらいマス。皆さんはわたしたちが帰ってくるまで、各騎士団の指示に従ってくださいサイ。別にいつもと変わりません。ちよつと、わたしたちがいなくなるだけデスネ」

「そうは仰いますが、フェンリルさまはともかく、スルストさまがいらつしやらないとずいぶん寂しくなります。一刻も早いお帰りをお待ちしていますよ」

「オルガナの皆さんは優しいでスネ。わたし、昨日はムスペルムの女の人たちにたくさん怒られてしましまシタ。フェンリルさんにオルガナと替わってもらいたくなつたぐらいデス」

すると大きな笑い声が上がった。
「それは無理もないですよ。どうせ簡単に口説いて、結婚の約束ばかりされたのでしょうか？ 女の人たちを責めるのは筋違いつてものですよ」

「そう言われると面目もありません。でも、わたし、女の人を見るとつい口が軽くなつてしましますネ。皆さんがあんなに真剣に受け止めていたなんて思つても

いなかっただんでスヨ」

「そいつは罪なことをしましたねえ」

「だけど、それぐらいでスルストさまの癖が直るはずがありませんや」

「そうそう、オルガナみたいに女の方で気をつけてないとね！」

人びとは笑い転げたが、スルストは真剣に抗議した。

「皆さん、そんなにいじめないでください！ しばらく会えないのに、寂しいじゃありませんか」

「それもそうだな」

「だけどスルストさま、たまには女つ気を断つて、真面目なところも見せた方がいいですよ！」

「それは手厳しいですネエ」

人びとはまた笑い、スルストも一緒になって笑った。

その時、彼の肩にグランディーナが手をかけたので、当人たち以外は一斉に笑うのを止め、彼女が何を言いつ出すのかと待ちかまえた。

「明日はフェンリルと戦うのだろう。私たちは先に休ませてもらうぞ」

「そうでスネ。」

皆さん、そろそろお開きにしませう。明日はフェンリルさんを解放して、その次にはシグルドにも行か

なければなりませんカラネ。今夜はとても楽しかったデス。皆さん、ありがトウ」

人びとはスルストの言うことに従って、片づけを始めた。一人がグランディーナたちを寝室に案内する。

ここは天空の騎士のための建物だが、宿泊施設も兼ねているようだ。そんなに大きな町ではないし、カオスゲートからも遠いので、今日のように四人も泊まることもなかなかないようだった。

寝室は一部屋だけで、あまり広くなかったが、木製の寝台からはどれも良い香りがし、気持ち安らぐ効果もあるようだ。だがサラディンもアイーシャも、そのような香りのする木には心当たりがなく、天空の島特有の種類なのかもしれないかった。

「先に休んでいてくれ。少し夜風に当たってくる」

そう言つてグランディーナが部屋を出ると、大胆にもスルストはそこで待ちかまえていた。

「フェンリルというのはそんなに気楽に戦える相手なのか？」

「そうではありませんネ。わたし、これでもとつても緊張しているのデス。だから、あなたに慰めてもらいたいと思つたのでスヨ。女の人と一緒に過ごすのは、わたしには何よりの薬でスネ」

そう答えると、スルストは彼女を真正面から抱きしめた。強い酒の匂いが鼻をつく。宴では何も食わずに酒ばかり飲んでいたので当然だ。それだけ、ふだんから何も食べないという証でもあるのだろう。

「放してくれないか。人いきれがしたから、夜風に当たりたいと思つて出てきたんだ。あなたにはその後でもつき合うから」

「エエ、喜んで」

しかし、スルストはグランディーナを一人にせず、窓のある部屋までついてきた。

「あなたは、もしかしてあのような宴は好きではないのデカ？ カツファの時も今日も、全然楽しそうじゃありませんでシタネ」

「嫌いなわけではないが慣れてない。それにカツファの時でもここでも、あれはあなたのための宴だ。私が出しやばつてはまずいだろう」

「でも、出しやばるのと楽しむのとは違いマス。あなたの仲間はそのなりに楽しんでいたようにも見えましたが、あなたは不承不承あそこにいた感じでシタネ。だから嫌いなのかと思つたんでスヨ」

「あなたの気分を害したのなら謝ろう。だけど本当に苦手なだけなんだ。ああいう雰囲気に慣れてない」

「このようなこともオルガナまででスネ。シグルドではわたしたちが来たからといって、いちいち宴なんて開きませんカラ」

「それもフォーゲルに關係があるのか？」

「わたしの口からは言えませんネ。行けばわかりマスヨ。そんなことよりも、あなたのことをもつと知りたいデス。少し話してくれませんカ？ もちろん、ここでなくてもいいでスネ」

「あなたは酒に酔うこともないのだな」

「もちろんデス。お酒を飲むのは単に気分ですネ。わたしが好きだから飲んでるんデス。無駄になつてしまふことは心苦しいと思つてますが、お酒も飲めなくなつたら寂しいデスネ」

「解放軍にも酒好きがいる。あなたと飲ませたら、気が合いそうだな」

「何でそう思うんでスカ？ きつとわたしは知らない人でスネ」

「宴の時のあなたを見ていたら、そう思つた。彼には酒なしの人生など考えられないそうだ。私には理解できない」

「いいでスネ、そういう人は。でもわたしは、あなたにもお酒を好きになつてもらつた方がもつと嬉しい」

「デスヨ」

答える代わりに彼女がそっぽを向いたので、スルストは慌てて追加する。

「だけどわたし、お酒を無理強いする気はありませんネ。あなたがそんなにお酒を嫌うわけも追及しません。お酒は楽しく飲むものデス」

「そう言うところまでそっくりだ」

グランディーナがつい笑いながら答えると、スルストも微笑んで彼女の手を握った。

「初めて笑ってくれましたネ。やっぱり、あなたの笑顔は素晴らしいデス。わたしはとっても嬉しいデスネ。それに、今日はわたしの手を払わないでスネ」

「あなたとの約束だからな。あなたが守っているのに私が破るわけにはいかない」

「義理堅い人なんでスネ。そういうところも好きデスヨ。あなたは魅力的な女性デスネ、わたしの思っていたとおりでス。わたしが女性と一緒にいるのが好きなのは、その人の魅力を引き出してあげたいからでもありますネ。たいがいの女の人は自分でも気がついていない魅力を隠しているマス。わたしが見つけて、指摘してあげるととっても喜んでくれますネ。あなたのものと同じように、一緒に見つけられたら、いいと思います」

「何のために？」

「あなたともっと良く知り合うためデスヨ！ いくらわたしが女の人が好きだからって、知り合った時のままでは話が続きません。女の人は楽しませてあげなければ、言うことを聞いてもらえませんシネ。それに、わたしも女の人も楽しいのでスヨ。好きな人のいいところを見つけてるのは楽しくありませんか？」

「そういう話はしたことがないんだ。いつも戦場にいたし」

「大丈夫デス！ わたしがいくらでも手ほどきしてあげますネ。そうすれば、あなたも楽しくなりマス。その方がお互いのためにもいいと思いますヨ」

「私はどちらでもいい。あなたを多少見直しました、いつまでもこんなことをしているつもりもない」

「でも、今夜はつき合ってくれるのでスネ？」

「あなたとの約束だからな」

スルストは彼女の手を取ったまま立ち上がった。「だったら、わたしの部屋へ行きまショウ。ここは窓が閉められないので寒いデスネ。わたし、寒いのは苦手なんデス。いくらゾシヨネルの加護があつても、オルガナは寒くてかきませんネ。早く、わたしを暖めてくだサイ」

グランディーナが立つと、彼は勝ち誇つたように笑んだ。

「さあ、わたしの部屋へ行きましょウカ」

それから闇が二人を覆い隠した。

アイーシャが目を覚ますと、サラデインとランスロットはまだ休んでいて、室内も暗かった。廊下からは外の明るさも差し込んでくるが、夜は明けたばかりのようだ。

室内を見回したアイーシャはグランディーナがいないことに気づき、割り当てられた寝台にも休んだ跡がないことを知った。昨日の晩から動かされていない掛布は冷たく、オルガナの寒さを伝えるかのようだ。

部屋の隅で身支度を調えた彼女は、足音を忍ばせて廊下に出た。右に行けば昨晚、宴の催された大きな部屋があり、そのまま玄関に繋がっている。それで彼女は左に曲がった。

吐く息が白く、空気も冷たい。昨晚より寒いのは明け方に最も気温が下がる地上と同じと言うことだ。グランディーナも地上で食べる物と天空の島で得られた食べ物とそれほど違わないと言っていたが、地上と天空の島とは、本来あまり違わぬものなのかもしれない。

すると、水の跳ねる音が聞こえ、アイーシャは四方を建物に囲まれた中庭に出ていた。その隅に井戸があり、グランディーナが水浴びをしているところだった。

「おはよう。いつも早いね」

「夜明けごろに目が覚める。身体がそうできているんだろう」

「冷たい水。ディアスポラでも言ったけど、平気なの？」

「あまり気にしない。目が覚めて、却っていいぐらいだ」

「だけど、この水ってどこに溜まっているのかしら？ 天空の島って不思議なところね。山も湖もあるのに、私たちの頭の上を飛んでいるんだもの」

「フェンリルはグルーザに加護を受けている。その力もあるんじゃないか？」

「だったら、私たちのいるゼテギネアにも、同じように神様の力が働いているところがあるのかしら？」

「さあ？ そういう話はサラデインの方が詳しいと思うけど？」

話しながらグランディーナは身体を拭き、服を着た。そういえば、彼女が水浴びをするのは、利き腕が動くようになってからだ。彼女なりに不便さは味わつてい

たのかもしれない。

「そういう意味ではないの」

アイーシャの言葉に、グランディーナは首を傾げる。

「天空の島に、神様がこんなに近くにいらつしやる
ところにいるのに、敬虔な気持ちになれなくて。傍に
いることが当たり前だからかしら？ それに天空の島
も地上とほとんど変わらない。いいえ、アヴァロン島
にいた時の方がずっと敬虔な気持ちだったと思うわ。
司祭なのに、自分が信仰を失ってしまったみたいで」

「別に不思議でもないだろう。アヴァロン島ではい
たるところに教会があつたけれど、ここにあるのはせ
いぜい天空の騎士のために建てられた物だけだ。教会
ではあなたたち司祭が神の言葉を代弁するが、天空の
騎士とは直接、話せる。たぶんシャングリラでも条件
さえ揃えばフェルアーナに会えるのだろう。天界の神
がスラストと同じだとは思わないが、私たちの想像し
ていたような神と違うのは確かだ。神なんて、ここ
では私たちより力のある存在でしかない」

「そうね。それに私たちが神様の声を代弁するの
だつて、本当は違うのだね。お母さまはきつとお
母さまの言葉で話していたわ。でも、もしもお母さま
が天空の島にいらつしやつたら、どんな風に感じるの

かと思つてしまったの。私なんか、ここにいる資格も
ないのに」

「あなたに資格がないのなら、私なんて天罰を喰
らつてるよ。天空の島の住人だつて、あなたより資格
があるなんて思えない。フォーリスさまはフォーリス
さま、あなたはあなただ。私はあなたが感じたものを、
フォーリスさまが感じたように信じる。それに、神を
必ず敬わなければいけないとも思わないけれど？」

「でも、神様には力があるわ。私たちにはかなわな
いのではないかしら？」

「力を認めるならば、ゼテギネア帝国を否定できな
くなる。力ある者が正義とは限らない。正義がいつも
正しいわけではない。もしも力を振るつて己が意に従
わせようとするとするのなら、私はそれが神でも戦うよ」

赤銅色の髪が一瞬、グランディーナの背で炎と化し
たかと思われた。その灰色の眼差しはいつもと変わる
ことなく冷静だが、アイーシャはその中に彼女の怒り
を認めた。それは彼女のなかで、決して消えることも
揺らぐこともない炎だ。その灯りが解放軍をゼテギネ
ア帝国との戦いに導いてゆく。決してぶれることのない
眼差しは、この戦いが始まった時から遙かなゼテギ
ネアを見据え続けている。

「ごめんなさい、グランディーナ。私には、あなたと同じ道は選べない。たとえ、お母さまを手にかけてガレス皇子でも、その命を奪ってしまいたくない、奪ってほしくない。誰も傷つかないで済めばいいのに、私には何もできないわ」

アイーシャは彼女の手を取った。涙が一筋、頬をつたう。

グランディーナはそれを驚きの色さえ浮かべて見つけた。そんな表情はすぐに失せてしまい、グランディーナはアイーシャを抱きしめたが、彼女にはもう一度「ごめんなさい」と言うことしかできなかった。

「あなたが謝ることじゃない」

「でも、ごめんなさい、グランディーナ」

母がいたならば、とアイーシャは思う。けれど、大神官フォーリスさえ己の無力を嘆いたことを、この時の彼女はまだ知らなかったのだ。

「サア、皆さん、行きましょウ！ オルガナ城はすぐデスネ。フェンリルさんを解放したら、一緒にシグルドへ行きましょウ」

朝食を摂り、ルーガナナの人たちの見送りを受けて、彼女たちは発った。スルストが案内に立ち、聖剣ブ

リウンヒルドと神剣ザンジバルを腰に提げ、意気揚々と歩いてゆく。

オルガナ城までではなく、という距離でもなかったが、冷たい朝の空気は気持ちよく、楽な道程でもあった。

小一時間も歩いただろうか。ムスペルム城と似たような趣の城が遠くに見えてきて、スルストはようやくおしゃべりを止めた。

空はよく晴れているというのに、その灰色の城だけ、影の中だ。その上には雲があり、太陽の光など差し込んでいないような錯覚も受ける。

「あれがフェンリルさんの住むオルガナ城でスネ。

上空はフェンリルさんの気分次第で晴れたり曇ったりします。雨が降る時はすごく機嫌が悪いデス。今日もあんまり良くないようデスネ。もつとも、オルガナ城が晴れていることはほとんどありませんガ」

「同行してもかまわないか？」

「もちろんデス。ただ、できたらサラディンさん、あなたにも来てほしいデス。グランディーナさんとだけ一緒だと、フェンリルさんに誤解されますネ。

ランスロットさんとアイーシャさん、あなたたち二人は離れたところで待っていてくださいサイ。

さあ、行きましょウ」

彼女たちがオルガナ城に近づいていくと、その雰囲気を察したかのように青い鎧を身につけた女騎士が城から出てきた。透き通るような白い肌と淡い金髪はラウニイーやノルンと同じハイランド人を思わせる。

オルガナ城がムスペルム城と違うのは、中庭がないことだ。寒冷な地のためか、フェンリルの好みか、城の前には殺風景な平原が広がっているばかりで、平坦な道が続いていた。

「フェンリルさん、久しぶりデスネ！ 今日はあるたの剣を持ってきまシタ」

「ラシュディ様に逆らうおろかな者たちよ。この天空を荒らす悪しき下界の殺りく者たちよ。わが剣を受けてみよ！」

「フェンリルさん、なんてつれない台詞でスカ。せっかくわたしがあいに来たのに、ラシュディのことは言わないなんて寂しいですヨ。まさか、わたしのこと、忘れてしまったわけじゃないですヨネ？」

「忘れてはいないわ。でも、いまのあなたはラシュディさまの敵、一緒にいる反乱軍のリーダーともども倒させてもらいます」

彼女は腰の剣を抜き、さらに近づいてくる。その細身の刃は、離れていても微少な雷を纏っているのが認

められる。

スルストも聖剣ブリュンヒルドを抜いた。その刃の輝きにフェンリルの動きが一瞬止まったが、彼女は素早く近づくと、斬りかかってきた。

グランディーナとサラディンは後方に下がり、二人の半神が斬り結ぶさまを見つめた。その力はほとんど同等だったが、フェンリルが素早さに優れていれば、スルストは力に優れているという違いもあった。

だが、どちらも剣を触れさせることはなく、火花だけが激しく散った。スルストがランスロットとデボネアをたつた一人で圧倒したように、フェンリルもまた、優れた剣士なのだ。

二人の動きはまるで剣舞のようだった。それぞれが互いの動きを紙一重でかわし、また次の手を繰り出す。その仕草が計算されつくしたもののように見えたからである。

しかし、フェンリルにブリュンヒルドを当てれば済むスルストと異なり、彼を倒そうとするフェンリルの息は少しずつ上がってきていた。次第に激しくなっていく彼女の息づかいが、表には出さない焦りを表しているかのようだ。氷のフェンリルの名に相応しく、感情は秘めてしまう方なのだろう。

「フェンリルさん、わたし、あなたにとつても会いたかったデス。いまみたいになちよつと怒った顔も魅力的ですが、わたし、いつものあなたの方がずっと好きでスネ。こうしてあなたに剣を向けるのは忍びないのですが、いつものフェンリルさんに戻ってもらうためには仕方ないのデス」

「あなたは何をごちゃごちゃ言っているの?!」
フェンリルが感情的に叫んだ。

「わたしの勝ちデス」

そこへスルストがブリュンヒルドを突き出す。聖剣は狙い過たずに青い鎧の隙間に突き刺さり、向こう側に抜けた。

何百年、あるいは何千年も愛剣を手にするこのなかったフェンリルは、自分を串刺しにしたブリュンヒルドを見下ろした。

「スルスト?」

青い鎧の天空の騎士が両膝を落とす。雷を纏った細剣が軋げ落ち、形の良い唇からは真紅の血が一筋、滴った。

「フェンリルさん、大丈夫でスカ?!」

スルストがブリュンヒルドを抜き、駆け寄った。その表情には、彼がいままで見せることのなかった恐れ

と思いやりとが浮かんでいる。

「私は、どう、したの? いいえ、そうだわ。ラシュデイ、という、魔導師が、やつ、てきて、それから、私は、虜にされて、しまったのよ」

「正気に戻ってくれたのデスネ」

スルストはフェンリルを支えていた。だが、彼がすぐに死から蘇ったように、彼女の受けた傷もまた直に癒されたようで、次に発したフェンリルの言葉はしっかりしたものになっていた。

「ええ、あなたたちのおかげで助かったわ。ありがとう。感謝します」

彼女が立ち上がるのに、スルストは残念そうな顔で手を貸した。

「あなたたちね、ラシュデイの言っていた反乱軍というのは?」

「そうだ」

「でも、このオルガナまで来たということは、ただの地上の権力争いとは思えない。

それにスルスト、あなたが来た理由も知りたいわ。シグルドのフォーゲルのことも気になるし。あなたたちをオルガナ城に招待します。そこで話をゆっくり聞かせてちょうだい」

「わかった。だが仲間が待っている。あなたたちは先にオルガナ城へ行っていてくれ」

フェンリルの返答を待たずにグランディーナは踵を返し、サラディンもそれに続いた。

呆気にとられたフェンリルの腕に、スルストが手を絡ませる。

「わたしたちは先に行つてまシヨウ、フェンリルさん。なに、対して待たされるわけじゃありませんヨ。彼女たちはすぐにやつてきますネ」

「あなたは相変わらね、スルスト。だけど、あの二人のことを紹介ぐらひしてくれてもよかつたんじゃないかしら？ 私は彼女が反乱軍のリーダーということしか知らなかつたわ」

「オオ！ それは申し訳ないことをしまシタ。わたし、フェンリルさんが正氣に戻つてくれたのが嬉しくて、そんなことは二の次になつてしまつたんです。でも、お仲間が来たら一緒に紹介しますヨ。さあ、オルガナ城へ行きまシヨウ」

「そうね。でもスルスト、この手は余計よ」

そう言つてフェンリルがつまみ上げた手に、スルストは声も出ない。

「どうやら、私の目が届かないと思つて、おいたを

しているみたいだけれど、私が一緒に行く以上、そんなことは許しませんからね」

フェンリルはスルストより背が低く、体格でも劣つていたが、どうやら二人の力関係は逆のようであつた。あわよくばフェンリルの腰にまでまわされかけた手は、^{つま}抓まれたところが変色するほどひねり上げられ、スルストが手をばたつかせても容易には放されなかつた。

二人はグランディーナたちが戻つてくるよりも早くオルガナ城に入つていたが、スルストにとつて幸い

だつたのは、その醜態を見られずに済んだ、ということだけだつたらう。

グランディーナたちがオルガナ城に向かう途中で、それほどの寒さではないというのに雪が降り出してきた。それは淡雪と呼んでもよいようなはかない雪で、服に落ちてはたちまち消えてしまつた。

けれどアイーシャが嬉しそうな声を上げたので、それがただの淡雪でないことがわかつたのだつた。

「フェンリルさまのお心が感じられます。皆さんに安心するよう仰つてますね」

「そうだな。これもグルーザの加護のおかげなのだろうか？」

「さあ。便利な力ではあるがな」

「スルストさまも同じようなことができるのでしうか？」

「雪だから消えてしまっていていいが、スルスト殿の場合はゾシヨネルの加護だ。灰なんか降ってきてても、あまり嬉しくないだろうな」

「まあ、ランスロットさまつたら」

彼女たちがオルガナ城に入っていくと、鎧は身につけたままのフェンリルが穏やかな様子で出迎えた。

「ようこそ、オルガナ城へ。人が過ごすのに快適な場所とは言いかねるのだけれど、我慢してもらえらるわね？」

「私は屋根があれば十分だ」

サラデザインたちもこれに同意したので、フェンリルは頷いた。

「スルストからおおよその事情は聞きました。ありがとうございます。あなたたちが来ていなければ、今頃、天空の島は大変なことになっていたわね」

「礼には及ばない。私たちはあなたたちの力を借りるつもりで来た。たとえあなたたちが天空の島から出られなかったとしても、敵のまままでいられては都合が悪い」

「でも、私にとってはそれだけではないのよ。あなたたちがブリュンヒルドを持ってきてくれたから、私に課せられた罰も解けたのだわ。ありがとうございます、あなたたちは二重の意味での恩人ね」

「ならば、あなたも私たち解放軍に力を貸してもらえるか？」

「ええ、喜んで。次はシグルドへ行くのでしう？」

グランディーナが頷くと、フェンリルは立ち上がった。アイーシャには天空の騎士が身につけた外套のこすれる音が耳に心地よい。

「シグルドへ行くカオスゲートは、バルデラという町の近くにあるわ。明日の朝発てば、日暮れまでには着けると思います。その予定でかまわないかしら？」

「私たちは天空の島には不案内だ。あなたたちに任せよう」

「ありがとうございます。あなたたちはこの部屋を使って。オルガナ騎士団の人たちが時々、泊まる部屋です。

それではスルスト、私たちは別の部屋にさがりましょう」

「いいですネ、フェンリルさん。お互い、時間はたくさんありマス。ゆつくり、これからのことを語り合

いまシヨウ」

「ええ、そうね」

そう言ったフェンリルの腰には聖剣ブリュンヒルドが提げられていたし、スラストも赤い鎧を脱いでいなかった。

だが、その二人がいなくなると彼らを威圧していた空気が去り、ランスロットは思わずため息をついた。

「どうした？」

とグランディーナ。

「フェンリル殿がいらつしやると、スラスト殿お一人の時よりもずっと緊張するんだ。スラスト殿がぐだけすぎなのか、フェンリル殿の方が本来の天空の騎士の姿なのだろうか」

「そうか」

彼女は頷くでなし、荷物を広げた。

ランスロットがサラディンやアイーシャを見ると、二人とも同様の感覚は味わったようで、それぞれに消化しているところと見えた。

「スラスト殿と戦った時は、それどころではなかったのか？」

とサラディンが尋ねる。ランスロットはつい数日前のことを思い返してみたが、圧倒的な力の差は感じて

も、やはり今日のような威圧感はない。

「スラスト殿とフェンリル殿とはかなり違うようですね。一昨日の晩に話を伺った時も、スラスト殿はわたしたちを緊張させぬよう心配っておいでだったようですし。カッファやルーガナの人たちも緊張していた様子はありませんでした」

「天空の島の人がびとの方が我々よりも天空の騎士殿とは慣れてはいるはずだ。最初は緊張しても気にならなくなっていくこともある。だが、一口に天空の三騎士といつても、御三方の性格にもよるのだろう。シグルドのフォーゲル殿とは、どのような方なのだろうな」

「スラスト殿はご自分が批判的な言い方になってしまふとフォーゲル殿のことを仰っていましたね。フェンリル殿がオルガナを閉ざしたようなことが、過去にあったのでしょうか？」

「それももつと重大なことなのだろう。シグルドが分断された理由にも関わっているのかもしれない」

その時、アイーシャが昨日、ルーガナでもらった糧食を渡した。しかしそれは一食にはとても足りなさそうな焼き菓子で、芳ばしい香りがわずかに漂うだけの代物だ。

「なんだい、これは？」

「ルーガナナの方たちが持たせてくださったのです。是非、食べてみると仰つて、食べたなら絶対に驚くからと言われて、これしか持たせてもらえなかったのです。こちらではクラムと呼んでいるようなのですが」

「クラム？ それはとても古い言葉だな。何かあるのだろう、食べてみよう」

クラムは円盤状の焼き菓子といったところで、とても食事には足りそうにない。だが、一口かじつたランスロットは、匂いを嗅いただけではわからぬ、その豊かな味に驚き、満腹とは言いかねるが、たつた一枚で空腹感が失せてしまったことに気づいたのだった。

「何でしょうか、これは？ とても不思議な食べ物ですね。それにクラムとはどのような意味ですか？」

「食べ物のことだ。だが、これはどうやら、天空の島の不思議とも言えそうだな。こんな焼き菓子一枚で糧食が足りるなら、長い旅も少しは楽なものになるだろう。人を当てるにできない土地に行くのに、クラムがあれば、どれほど心強いかわからぬ。」

アイーシャ、そなた、作り方は聞かなかつたのか？
 そう言つたサラディンが料理好きなることを思い出し、ランスロットは微笑ましい気持ちになる。アイーシャが首を振つた時も、彼はひどく残念そうな顔をし

たほどだ。

「申し訳ありません、サラディンさま。出立の直前に渡されたものですから、そのような時間もありませんでした。ルーガナナに戻つて伺つてまいりましょうか？」

「そこまでする必要はないだろう」

グランディーナが口を挟む。

「オルガナで手に入れられる物がシグルドにないはずはないし、ムスベルムでマチルダが知つたかもしれない。ルーガナナに戻る必要があるまい」

しかしアイーシャは反論した。解放軍でもこんなことが出来る者はごく少数だ。

「でも、日没までにはまだ時間があるはずだわ。今日は大して移動したわけでもないし、ルーガナナに行つて帰つてくるぐらい、できるのではないかしら？」

だがグランディーナは頑固に首を振つた。

「教えるつもりがあれば、昨晩ならいくらでも時間があっただろう。それに、いまのところ何もないが、帝国兵だつて完全にいなくなつたわけじゃない」

「だつたら、サラディンさまと一緒に行つてくるわ。作つているところを見られるかもしれないし、サラ

「デインさまとご一緒なら安心でしょ？」

その言葉にグランディーナが返答できないでいると、アイーシャはサラデインの腕をつかんで引つ張った。

「さあ、参りましょう、サラデインさま」

「良いだろう。わたしも是非、見てみたいと思つていたところだ」

彼が同意したので、二人は出かけていった。

この場にカノープスがいたら大変だつたらうな、と思いつつ、ランスロットはグランディーナの表情を盗み見る。

もつとも、彼女はそれほどふてくされたような顔はしなかった。ちよつとだけ頭をかくと、片隅に座り込んだ。

「あなたは どうする？」

「わたしは留守番しているよ。アイーシャの言つたとおり、サラデイン殿と一緒にならば案ずることもあるまい」

「そうか。だつたら、私は少し休む。何かあつたら起こしてくれ」

「承知した」

彼女は相変わらず寝台の脇に腰を下ろしていた。膝を抱えて、顔を伏せたと思つたら、もう寝息を立てて

いる。呆れるほどの早業だ。

天空の島に来てからこちら、戦闘もないのだから、疲れているわけではないのだろう。バルモアの時にそうだったように、思わぬ空き時間に寝だめをしているだけのようだ。

気がつくつと、この部屋には煖炉もないというのに、オルガナに来て以来、ずっと感じていた肌寒さもなく、むしろ室内は快適だった。

どういふからくりなのか、室内のあちこちを調べていたランスロットは、ふと思いついて毛布を取った。解放軍で使っている毛布より、ずっと薄くて軽いのに、羽織ってみるだけで暖かさの違いがわかる逸品だ。

しかし、それをグランディーナにかけてやると、案の定、彼女はすぐに目を覚ましてしまった。

「どうかしたのか？」

「ああ、すまない。君に毛布をかけようと思つただけなんだ」

「毛布？ この暖かさなら、なくても大丈夫だろう。それに私は寒さに強い方だ。気を遣わせた」

「一人だといふ暇を持て余してしまつてね。わたしもサラデイン殿やアイーシャと一緒にに行けばよかつたかな」

「クラムの作り方に、あなたも興味があったのか？
それは意外だったな」

「そういうわけではないが、暇つぶしにはなるだろう？」

珍しく彼女が笑った。ランスロットもつられて、二人は笑い合った。

グランディーナがそのまま休もうとしないので、彼は先ほど感じた疑問をぶつけてみた。

「君はさつき、フェンリル殿と話した時に威圧感を感じなかったようだな？」

「そんなことはない。半神の力は感じたが、気にしないようにしていただけだ」

「それはあの二人が元は人間だからそう思うのか？それとも、神々が相手でも君はそう言えるのか？」

彼女は肩をすくめた。

「さあ。そこまで考えていない。あなたの言うとおりかもしれないけれど」

そう言ってからグランディーナは不意に横を向いた。その表から笑みは失せ、ランスロットはそのまましばらく、彼女が続きを話すのを待った。

けれどグランディーナはやがてゆっくりと首を振り、その話題を打ち切りたそうに見えたので、ランスロット

ともそれ以上、追及しないことにしたのだった。

「休もうとしていたところを邪魔してしまつてすまなかつた。ゆっくり休んでくれ」

「そうさせてもらう」

毛布を身体に巻きつけて、グランディーナはまた顔を伏せた。

その邪魔をせぬよう、ランスロットは鎧を脱ぎ、日課になつている剣の手入れを始めた。

次のシグルドでも戦いはしなくて済むのだろうか。ムスペルムを離れてからもう三日目だ。連絡が取れないが、カノープスやギルバルド、それにアラムートの

城塞の皆はどうしているか。オルガナが薬に片づいたように、シグルドでも城に行くのにつき合うだけで済むのだろうか。

それなのに、気がつくとは彼はグランディーナの言葉の意味を考えていた。ラシュデイに育てられ、サラ

ディンに助けられた娘、常人には及ばぬ剣の腕前を持つ彼女の力は、解放軍を、このゼテギネアを、どのよう

な方向へ導いてゆくのだろうか。

サラディンとアイーシャが戻ってきた時、彼は剣の手入れをすっかり終えたところだった。

「どうでしたか、成果は？」

「どうでしたか、成果は？」

「グランディーナの言うとおりでした。皆さん、口が堅くて教えてくださらないのです。地上には伝えていけない理由でもあるのでしょうか？」

「サラディン殿にも聞き出せませんでしたか？」

「うむ、クラムのことには話を持っていこうとすると、察して逃げられてしまう。遠回しに訊いてみようとしたのだが、材料もよくわからなかった有様だ。一つだけ地上にはない香料を使っていることがわかったが、その種を得られなければ、生産には乗せられない」

「それはご苦労様でした。外はもう暗いのでしよう？」

サラディンは頷いた。

「すっかり遅くなってしまった。夜になると寒さが厳しくなる」

「ですがランスロットさま、皆さん、フェンリルさまが降らせられた雪のことはご存じだったのですよ。フェンリルさまが解放されたことを知って、とても喜んでいらつしやいました」

「それは良かった。オルガナ騎士団ももう知っているようだったかい？」

「はい。それで、フェンリルさまが明日の朝、オルガナ城を発たれるつもりでいらつしやると申し上げた

ら、これからいらつしやると仰っていました」

「フェンリル殿にはお知らせを？」

「はい。フェンリルさまも喜んでいらつしやいました。ですが、天空の騎士の方々が皆、地上に降りてしまわれることになるので、シグルドに行かれたら、フォーゲル様と相談したいとのことでした」

「それは、天空の三騎士殿の力でしか、カオスゲートを開けられないからですか？」

「そのようだ。それと、後でグランディーナに訊きたいことがあると言っていたが、起きられるか？」

「何の話だ？」

「そこまでは仰っていない。オルガナ騎士団との話が終わったら、迎えに来るということだ」

「ふん」

グランディーナは寝台に座り直すと、それきり扉の方を見つめている。

「あなたたちは先に休むといい。オルガナ騎士団との話も、簡単には終わらないかもしれない。明日はかなり歩くはずだ」

「でも、グランディーナに御用ならば、どうして先ほど続けて話されなかったのでしょうか？」

「先にスルストと話をしたかったのだろうか」

「スルストさまもいらつしやつたのに？」

「私たちには聞かれたくない話もあるだろうさ。解放軍に加わると言っても、客員気分だ」

「お二人の力を考えれば仕方あるまい。助力を頼むには過ぎた方たちだ」

グランディーナは鼻で笑つたようだが、自分からその話を混ぜ返そうとはしなかつた。

サラディンは寝台に座り、目をつぶつた。アイーシャも明日に備えて寝る支度を始める。

ランスロットが毛布のことを二人に教えると、二人とも興味深そうな顔をしたが、さすがに作り方とか素材を知りたいとは言ひ出さなかつた。

「良いことは教えてもらえれば、見習いたいと思うのですがね」

「地上の者が皆、そなたのように考えるならば、あの者たちの気持ちも変わるかもしれない。だが現実には、この毛布やクラムを巡つて、地上では殺人を行う者もあるかもしれないからな」

「天空の島の人たちがそのように地上を野蛮なところと考へているとしたら、残念なことですね」

「天空の島とて楽園でないことはムスペルムで聞いたはず、それでも彼らは地上よりましだと思つてい

のだろう」

「あなたの言うとおりだとしたら、愚かな話だな。戦いを憂へて天空の島へ逃げ出したのは彼らではない、その先祖だ。いまの天空の島の住人など、私たちとそれほど違わぬだろうに」

「そうかもしれないし、そうではないかもしれない。そうと判断するには我らは天空の島のことを知らなすぎる。彼らが地上のことを伝え聞いたことしか知らぬようにな。そのような先入観は持たぬがよいぞ」

「わかつている」
グランディーナが振り返ると、サラディンは微笑みながら頷いた。

「あまり無理をせぬようにな」
「大丈夫だ」

それきり、彼は横になるとすぐに寝入つてしまった。それで、ランスロットやアイーシャもいつまでも起きているわけにもいかず、早々に横になった。

しかし、やがてフェンリルが静かにグランディーナを迎えに来た時まで、二人とも眠れないままでいた。オルガナ城の深閑としたさまが、却つて眠れなくしてしまふようであつた。

「こんな夜遅くに呼びつけて悪いわね。シグルドへ発つ前に、どうしても確認しておきたいことがあったものだから」

そう言ったフェンリルは鎧を脱いでいたが、ブリュンヒルドは腰から提げたままだった。同行しているスルストも同じだ。

「別にかまわない。だが何の話だ？」

「スルストにも聞いたのだけれど、あなたのことを知りたいわ。スコルハティを宿していても、千切れなかった腕のこととか、をね」

「そんなことならばスコルハティに訊いてくれ。私の腕を封じていたのは彼だ。千切ろうと千切るまいと、彼の意志によるのだろう」

「ええ、そうしたわ。でもスコルハティは、私たちファイラーハの徒にはつれないの。単に居心地が良かったから千切るのには忍びなかつたなんて、ふざけた答えをしたのよ。だけど彼が言っていたわ。あなたとはまた手合わせしたいと、もしも会うことがあったら、それだけ伝えてくれとまで頼まれた。神殺しの獣にそんなことを言わせるとは、やはりあなたはただの人間ではないようね」

「私は彼とやるのはお断りだ。手と足に怪我を負わ

されたし、右腕は動かなくなるし。もう一度会ったら、そう答えておいてくれ」

「ふざけないで！ スコルハティにそう言わせること自体が尋常ではないのよ。彼と対等に戦える者など、たとえスコルハティが手を抜いていたのだとしても、この世界にはそんなにいない。ましてやただの人間が戦える相手ではないわ」

「残念だな。私も自分のことは知らない。それも、あなたたちが納得できるような説明など持ち合わせていない」

そう言い放つと、グランディーナはすかさず踵を返した。

「お待ちなさい。だからといって、そのまま行かせる気はないわ」

フェンリルがブリュンヒルドを抜き、切っ先をグランディーナに向けた。

「何のつもりだ？」

「あなたの腕前を見せてもらいたいと思つて。スコルハティにまた手合わせしたいと言わせるその腕に、私はとても興味があるの」

「フェンリルさん、それはいけませんヨ。天空の三騎士が人間を傷つけるなど、あつてはなりません」

それまで黙っていたスルストが真顔でフェンリルを止めようとしたが、彼女はブリュンヒルドを収める気はさらさらなようだ。

グランディーナも、挑発するかのようにその正面に立った。

「一つだけ聞かせてもらおう。私と剣を交えようというのはファイラーハの意志か？」

「いいえ、これは私自身の意志だわ」

「なるほど。それならば、私の答えはこれだ！」

彼女は言うなり左手をブリュンヒルドに突き出した。フェンリルは剣を引っ込めようとしたが、その動きを完全に予測できず、聖剣はグランディーナの手の平に刺さってしまった。

「何をするの?!

鮮血が滴ったが、彼女は素早く手を引っ込め、そのまま握り込んだ。

「そんなものにつき合う義理はないということだ」

「だからといって、自分の手を傷つけることはないでしょう?」

「天空の騎士は人間を傷つけられないのだろう。ならば、私が血を流せば、こんな話もおしまいだ」

啞然とするフェンリルを残し、グランディーナはそ

の場を去っていった。

「だから、言ったでしょうウ、一筋縄ではいかない。でも、わたしも見ていましたが、いまのことはグランディーナさんが自分からしたので。あなたの咎にはなりません」

「だからって、自分から手を傷つけるなんて。思ってもみなかったわ」

「彼女には説明のつかないことが多いのです。ただ、一度に尋ねるわけにもいきませんし、本人もあのとおり、知らないと言います。またの機会を待った方がいいでしょう」

「そのようね。どうやら、あなたの得意技も彼女には効き目がなかったようじゃないの?」

「そんなこと言つて、またいじめないでください、フェンリルさん。わたしたちはただ、楽しい時間を過ごしただけなんですよ」

スルストの耳をフェンリルがいきなり引っ張り上げたので、彼は涙目になり、声にならない悲鳴を上げた。

「そうやって、いったい何人の女性を手籠めにしたの?! あなたつて人は、本当に油断がならないんだから。そこになおりなさい、スルスト。彼女の代わりに、というわけにはいかないけれど、少しつき合ってもら

うわよ」

「フェンリルさくん、勘弁してください。久しぶりに会えたというのに、この仕打ちはひどいデス」

「問答無用！」

翌日、グランディーナたちは夜明けとともにオルガナ城を発ち、フェンリルとスルストの先導でバルデラという町を目指した。

フェンリルが説明するには、オルガナとムスペルム、シグルドを結ぶカオスゲートは、そのバルデラの近くにあるということだった。

バルデラで一泊して、彼女たちはカオスゲートに向かった。スルストの頼みでムスペルムに寄り、騎士団長ファアレンに解放軍への手紙を託して、シグルドに至る。閻魔の月五日のことであった。

シグルドの地を踏んだ時、強い風が吹きつけてきてアイーシャは身体が浮いた。彼女が慌てて手を伸ばすと、グランディーナが力強く引き、抱き寄せてくれる。そうしてもらわなければ、彼女は飛ばされていたかもしれない。背筋が寒くなった。

「シグルドへようこそおいでくださいました。スル

ストさま、フェンリルさま」

カオスゲートの前に整列した騎士たちが丁重な挨拶をする。彼らの外套は濃い緑色のお揃いだった。

「やっぱりフォーゲルさんもラシュディに魅入られたのでスネ？」

「ラシュディかどうかはわかりませんが、おかしなことを命じられました。わたしたちは何とカムスペルムかオルガナに連絡を取ろうと思っておりますが、結局カオスゲートが開けないので何もできず、このようにお待ち申し上げていた次第です」

「それはご苦勞様デス。でも、わたしとフェンリルさんが来たからにはもう安心でスヨ」

「ありがとうございます。大したおもてなしもできませんが、まずはエンテペの町でお休みください。そこで詳しい話をさせていただきます」

「そうしまシヨウ。いいですヨネ、フェンリルさん？」

「そうね」

振り返ったフェンリルはアイーシャに微笑みかけた。「フォーゲルは大地の女神バーサの加護を受けているわ。だから、シグルドがこうして残ったとも言える。彼が過去に何をしたのか、彼らから聞くといいわ」

彼女たちは近くに見えるエンテペという町まで急いだ。町の中に入っても、スルストが言ったとおり、天空の三騎士が二人も来たというのに、特に人びとが歓迎するでなし、実に静かに神殿まで行ったのだった。

「改めて紹介するわ。彼はシグルド騎士団長のバンクロフト＝ルーフェルよ。」

彼女たちは地上からきた解放軍の人たち。ラシュディのいるゼテギネア帝国と戦っているわ。最初にスルストを解放してくれたのも彼女たちよ。彼女がリーダーのグランディーナ」

フェンリルの紹介に両者は顔を合わせ、それぞれ挨拶をする。それを見てから、彼女はさらに話し続けた。「バンクロフト、悪いのだけれど、あなたから彼女たちに、フォーゲルのことを話してもらえないかしら？ 彼がシグルドで何をしたのか、というようなことをね」

「わたしでよろしいのですか、フェンリルさま、スルストさま？」

「わたしからもお願いしますネ、バンクロフトさん。彼女たちはシグルドで大昔に何があったのか知りません。わたしたちから話すよりもいいと思います」

「承知いたしました」

それから、彼はグランディーナたちに楽にするように言った。スルストのような黒い肌でも、フェンリルのような金髪碧眼でもなく、ゼノビアでよく見られるような茶色い髪に青い目のシグルド騎士団長は、ランスロットにはすぐ隣にいてもおかしくないような親しみと錯覚を覚えさせる。

だが、やがて彼の口から発せられたのは、解放軍には四つ目となる天空の島を巡つての重大な事件だった。「シグルドの大異変。それは一人の騎士が起こした、忌まわしい事件です。彼は才能あふれる騎士でしたが、同時に鼻持ちならない自信家でもありました。たとえ騎士団の騎士であっても彼からみれば赤子も同然。彼は世界で最強の騎士でした。彼はさらなる力を求め、そしてついに、暗黒道を極めたのです。彼は、より強い相手を求め、世界を旅し、そしてこのシグルドへたどりつきました。シグルドには天竜と呼ばれる幻のデイバインドラゴンがいると噂で聞いたからです。彼とデイバインドラゴンの戦いは七日七晩にもおよび、彼が勝利しました。しかし、それを喜ぶ者はいませんでした。死んだドラゴンの呪いを恐れたからです。呪いはドラゴンの死と同時に始まりました。シグルドの

大地が崩壊をはじめたのです。崩壊だけではありませんでした。彼の姿は呪いによってドラゴンに変えられたからです。その後、彼はその罪を償うため、神の命令によって天空の騎士となりました。その騎士ですか？ お気づきのとおり、騎士の名はフォーゲルと呼ばれています」

バンクロフトの話し方は穏やかだったが、言葉の端々に感情を抑え込んでいる様子もランスロットには感じられた。それも無理はない。故郷ゼノビアが同じような目に遭えば自分とて、そうした者を、そのような事態を引き起こした者を恨まずにいられないだろう。だが、グランディーナの声音が、そんなランスロットの共感を打ち破った。

「だからといって、あなたがフォーゲルを恨むのはお門違いというものだろう」

「何だと？」

「スルストにフェンリル、この程度の話ならば、あなたたちから話してくれた方がよほど公平だと思うが、そうではないのか？」

そう言われて、二人の天空の騎士は顔を見合わせた。立ち上がったバンクロフトが彼女にくっついてかかる。

「何を言うか！ フォーゲル殿がディバインドラゴ

ンを殺したりなどしなければ、シグルドは分断されることもなく、人びとも死なないで済んだのだ。分断される前のシグルドは天空の島のなかでも豊かで美しい島であつただぞ」

「人間がそんなに長生きできるとは知らなかった」「なに？」

「あなたはシグルドが豊かで美しい島だつたと言つたが、その目で見たのか？」

「馬鹿なことを言うな。わたしが見られるわけがないだろう」

「ではシグルドが分断された時に死んだ者のなかにあなたの知り合いや親戚、家族はいたのか？」

「い、いや、いない。ご先祖が生き残ることができたからこそ、わたしもこうして生きていられるのだ」

「ならば、あなたにフォーゲルを恨む理由はないはずだろう。ましてやあなたはフォーゲルに仕えるシグルド騎士団長だ。仕える相手に不信感を持つていて、よく仕えられるものだな」

「ルーフェル家では代々、男子が騎士団に加わることになつている。これは一族の義務なのだ」

「シグルドの人間は皆、あなたのように考えているのか？」

「多かれ少なかれ、わたしの意見に反対する者はほとんどのいなかろう。フォーゲルさまは確かに偉大なる天空の三騎士の一人だが、このシグルドになしたことは、いままシグルドの民には許し難いことなのだ」

「だがそれは神代、オウガバトルのころのことだろう。シグルドがいまのように分断されてから何年になる？ 何百、何千年か？ あなたたちは分断されたシグルドしか知らないだろうに、いつまでそうやってフォーゲルを恨み続けるつもりだ？」

「おまえたちには天空の島などどうなつてもいいのだろう。だがわたしたちにはシグルドはほかならぬ故郷だ。そのシグルドが滅茶滅茶にされたのに、黙つてなどいられるか！」

「ではあなたたちは、その不満を一度でもフォーゲルにぶつけたことがあるのか？」

「何だと？」

「それにシグルドを分断したのは間接的にはフォーゲルの仕業かもしれないが、ダイバインドラゴンがしたことだろう。なぜダイバインドラゴンを恨まずに、フォーゲルだけを責める？ しかもあなたはフォーゲルが竜の頭になつてしまったと言つたな。ダイバインドラゴンを殺した呪いを受けたフォーゲル一人に、シ

グルド分断の責も負わせようとはやりすぎではないのか？」

バンクロフトは拳を震わせていたが、言葉に詰まつてしまった。

ランスロットはスルストが「シグルドは保守的だ」と評したわけを理解したが、もしも自分が同じ立場だつたら、フォーゲルを恨まずにいられるかはわからなかつた。

ただ彼の心情としては、そのような相手に仕えることもできないだろうということだ。忠誠を誓えぬ相手に仕えたところで何の騎士か、それだけははっきりしていた。

「あなたたちはいい」

グランディーナが変わらぬ調子で話し続ける。

「フォーゲルがラシュディに魅了されようと、何もせず、助けが来るのを待つているだけなのだからな。何千年も前の恨み言を当人が聞いてないところで吐き出し、素知らぬ顔で仕える。どれだけの用があるのかは知らないが、シグルド騎士団というのは楽な仕事だ。時間を無駄にした。スルスト、フェンリル、さつさとシグルド城へ行つて、フォーゲルを解放しよう。これ以上、繰り返すを聞いていても意味がない」

「本当にいいんでスカ、バンククロフトさん？」

フォーゲルさんには会ってないんでスカ？」

「お会いしました、スルストさま。反乱軍と一緒に来る、天空の騎士のお二人を倒せと命じられたのですが、わたしたちがお二人に手を出せるはずがありません。それに倒せなどと仰るからには、お二人がフォーゲルさまの敵にまわったということでしょう。ならば、お二人がいらつしやるのをお待ちした方がいいだろうということになったのです」

「それは賢明な判断でスネ。間違っていないでせよ。でももう一つ聞かせてくだサイ。ラシュデイという魔導師と一緒にゼテギネア帝国軍が来たはずデス。彼らがどこへ言ったのか、知りませんカ？」

「申し訳ありません。そのような者たちのことは初めて知りました。わたしたちはいきなりフォーゲルさまに招集されただけなのです。ラシュデイという魔導師を見たという話も聞いておりません」

「それはおかしいわ。ラシュデイはカオスゲートから来たのよ。あなたたちがカオスゲートの監視をしていなかったわけではないでしょう？ 確かに、私はオルガナでカオスゲートを開いたわ。でも、あれは夜ではなかったのだから、誰かが見ていたはずよ」

「それが、どうやら、わたしたちがフォーゲルさまに招集されていた時のことだったようでして、結果的に誰も見られなかったのです」

「フェンリルさん、あなたは覚えていないんですカ？ カオスゲートを開いた時にラシュデイはいたんデスカ？」

「そういえば、カオスゲートを開けてくれとは頼まれたけれど、その時にはラシュデイはいなかったかもしれないわ。でも、それはどういうこと？」

スルストとフェンリルが黙り込み、バンククロフトも答えは思いつかない様子だ。

グランディーナは、せっかく話を切ったところをスルストが蒸し返したのが気に入らないようだったが、サラディンを見やり、互いに頷き合った。

「あなた方の手を借りずに、ラシュデイ殿がカオスゲートを開けたのかもしれない」

「まさか！ そんなことができるというの？」

「地上のカオスゲートを開けるのも天空の島のカオスゲートを開けるのも、大した違いではないのだろう。あの方の力をもつてすれば、可能なはずだ」

「考えられますネ。ラシュデイというのはそれぐらいの力の持ち主のようデス」

「その可能性は否定できないよね。だけど、それにしては甘くない？ 私たちが解放されると、ラシュディは考えなかつたのかしら？ 私たちは魅了して、彼は何をしようとしていたの？」

「そのことなら後で話しましょうウ、フェンリルさん。いまはグランディーナさんの言うとおりに、一刻も早くシグルド城に行つて、フォーゲルさんを解放するのが先ですネ」

「で、ですが、スルストさま！」

「何でスカ？ まだ何かあるのデスカ？」

「フォーゲルさまが自分から、そのラシュディという魔導師の配下に入つた可能性はありませんか？」

その言葉にスルストもフェンリルもかなり驚いた様子だつた。そして二人の驚き方は、バンククロフトの言つたことを肯定しているようでもあつた。

「でもスルスト、いくらフォーゲルでもそんなことをするとは思えないわ」

「ですがフォーゲルさんは暗黒道も極めた最強の騎士でしたネ。天空の騎士としてはあるまじきことですが、万が一ということはあるかもしれませんヨ」

「あなたはそんなにフォーゲルが嫌いなのか？」

「そ、そんなことはないが、かつてシグルドを破壊

した方だ。それにラシュディという魔導師が悪で、おまえたたちが善だとう証明する？」

「ラシュディが虜にした天空の騎士を私たちが助けた。ほかにどんな事実が要るといふんだ？」

「そうでスヨ、バンククロフトさん。あんまりフォーゲルさんを疑つてはいけませんネ。彼は、ああ見えても気さくない人なんですカラ」

「し、しかし」

「だったら、こんなところにいないで、フォーゲルに確認すればいい。あなたたちは彼に会えるのではないのか？」

「あなたも無茶を言いますネエ。招集した時は大丈夫でも、今度もバンククロフトさんが安全とは限らないでスヨ。いくらフォーゲルさんが稽古してあげてるといつても、バンククロフトさんはふつうの人間なんですカラネ」

「ここで繰り返言を垂れ流しているよりも、その方がましだと言つてるんだ」

「ともかく、わたしたちはシグルド城へ急ぎまシヨウ。フォーゲルさんを解放すれば、すべてわかることですネ。」

バンククロフトさん、ワイバーンの用意をしてもらえ

ませんか？」

「この人数分はすぐには無理です。まさか、こんな大勢でいらつしやるとは思わなかつたものですから。何日かかかってもよろしければ揃えてまいります。」

「どうしますか、フェンリルさん、グランディーナさん？ シグルド城まで歩くと五日はかかりますネ。ここはワイバーンが揃うまで待つてもいいんじゃないですか？」

「私は反対だ。単に待つているのは退屈だ。シグルド城へは歩いていつてもいい。」

「私も彼女に賛成だわ。ワイバーンが揃うのに何日かかるの？ それならば歩いていった方が速いかもしれないじゃない。」

「わかりまシタ。だつたら、シグルド城まで歩いていきまシヨウ。バンクロフトさん、グランディーナさんたちに食糧を持たせてあげてくだサイ。ここからカリシンピまでは二日かかりますが、そのあいだにある町は、少し外れたムパンダしかありませんカラネ。」

「承知しました。」

けれども、グランディーナたちがエンテペの町を發つたのは、閏竜の月六日のことになった。

フェンリルの案内で、彼女たちは街道から外れたムパンダの町には寄らず、途中で野宿してカリシンピという町を目指した。

彼女らがシグルドの分断という事実に向面するのはその途上でのことだ。確かにそれは、このような事態を引き起こしたフォーゲルを恨むのに値するものだったかもしれない。

出發の時も強い風が吹いていた。一行を見送つたシグルド騎士団によれば、シグルドではこうした風は年中のことで、伝え聞くとところによれば、分断されて以來らしい。

「この島は周囲を柵で囲つていますが、落ちてしまえば命はありません。どうかお気をつけください。」

その意味も、彼女らはすぐに理解した。

島が南北に分断されたシグルドは現在、大きく四つの島に分かれ、橋で繋いで行き来している。柵は、町にさえ囲いを作らぬ天空の島で、それぞれの島を囲うように建てられた物であつた。補修の跡があちこちで見受けられるのは、風のために吹き飛ばされてしまうからなのかもしれない。

それにシグルドでは町にも壁があり、耕作地も含めてかなり広く囲われていた。

「シグルドの人たち、不便な思いをしていマス。もともと温暖な気候でしたが、島が分断されたのと、この風のためもあって、耕作地が少ないのデス。フォーゲルさんを責めたくなる気持ちもわかりマスネ」

「その気持ちがフォーゲル一人に向いていることがおかしいだろうと言っている。元を正せば、ディバインドラゴンがフォーゲルに負けたのが原因だろう。フォーゲルに呪いを与え、シグルドも分断したドラゴンを恨む気にならないのが不思議だ」

「ディバインドラゴンは天竜でスヨ。いまの時代にはすっかり見られなくなってしまうたようですが、神にも等しいドラゴンをなぜ恨むのデス？」

「フォーゲルに負けたのに神とは笑わせる。神というのほもつと絶対的な力の持ち主だと思っていた。あなたたちもそうではないのか？」

「それは、あなたの力がそう言わせるのではないかしら？ スコルハティと対等に戦える者などほとんどいないのよ。あなたならば、ディバインドラゴンに戦いを挑んだかもしれないわね」

「しない。そんな危険を冒すつもりはない」

「あなたがディバインドラゴンに負けるかもしれないという危険？」

グランディーナはフェンリルを睨みつけた。二人が足を止めたので皆も立ち止まる。

「馬鹿なことを。私にはディバインドラゴンと戦う理由がない」

「そうかしら？ もしもユリマガアスの門番がディバインドラゴンだったなら、あなたには立派な理由があつたことになるわね」

グランディーナは答えずに歩き出し、アイーシャが急いで追う。サラディンとランスロットもそれぞれ続いた。

「フェンリルさん、厳しいでスネ。グランディーナさんをそんなにいじめないであげてくださいヨ」

「何を言っているの。あなたが聞くべきことをちゃんと聞いておかないから私が聞いているんじゃない。スコルハティに後で聞こうと思っていたなんて、言い訳は受けつけませんからね」

「フェンリルさくん。わたしだって彼女から話を聞こうと努力はしていたんでスヨ。でも、それには仲良くなるのがいちばんでスネ。それなのに、彼女はなかなか心を開いてくれないんデス。わたしも苦労したんでスヨ」

「よく言うわ。あなた、まさかファイラーハの前でも

同じ申し開きをするつもり？ 彼女が要注意人物であることを、忘れていたとは言わせないわ」

「それはもちろん、すぐに気づきましたけれど、追求すればいいというものではないでショウ？ それとも、彼女を無理矢理、拘束すれば良かったと言うのでスカ？」

「確かに、それはあまり賢明な策ではないわね。でも、あなたの怠慢を否定するつもりもないわよ」

「いちばんいいのは、彼女の口から天空の島に渡ると言ってもらうことでスネ。あいにくと、わたしはうまくいったとは言いがたいのですが、フォーゲルさんのことはいい教訓になったと思います。彼女がおいたをすれば、いつでも天空の島にいるよう強制できると理解してもらおうのニネ」

「どうかしら？ そんなに単純な人だとは思えないけれど」

強風が先に行くグランディーナたちの髪や服を煽り続けていた。彼女たちは賢明にも、手をつないでいる。もうじき島と島とを結ぶ橋にたどり着くところだった。

「グランディーナ、なぜフェンリル殿に正直なことを言わなかったんだ？」

「言つてどうする？ ファイラーハの騎士が、そんな人間を見逃すとも思っているのか？」

「それは言つてみなければわからないだろう？」
彼女はランスロットを凝視し、小さく息を吐く。

「天空の騎士があなたのような人柄ならば、言つてみる価値もあるだろうが、スコルハテイと戦える私は、彼女らにとつては要注意人物だ。余計なことを言つて、藪を突くのはごめんだ」

赤銅色の髪が翻り、グランディーナは鬱陶しそうに毛を丸めた。ランスロットも、シグルドに来てからマントがばさつくのがうるさかったので、いまは畳んで荷物の中だ。この分では、野宿をする時には相当、面倒なことになりそうだと彼は考えていた。

「一昨日、君が手の平に受けた傷も、そのことと関係があるのか？」

「間接的にはな。大した傷じゃない」

「わたしが案じているのはそんなことではないよ。わかっているだろう？ わわつ！ 何をするんだ？」

グランディーナが手を離れたので、ランスロットはいきなり彼女の髪に巻き込まれた。払いのけるよりも速く彼女が離れたので難を逃れたが、毛の量が半端ではないもので、窒息するかと思つたほどだ。

「あなたに案じられて、私に嬉しいと言っても言えというのか？ その逆だ。やっぱりあなたを連れてこなければ良かった。ギルバルドなら、余計なことは言わないうのに」

「それは期待に添えなくて悪かったね。だが、そうやってお気に入りの者ばかり傍に残すと、いまにとんでもないことになるぞ」

「私のことなど、いつまでも心配していないで、そろそろこの戦いが終わった後のことでも考えたらどうだ？ 経験や年齢からいつても、あなたは国の要職に就く。ゼテギネアの再建は楽なものではないだろう」

「悪いが、この戦いが終わるまで、わたしの剣は君のものだ。わたしもあまり器用な方ではないのでね、一度に二つのことなど考えない方がいいんだ」

彼女は振り返り、少しだけ笑った。けれども、それきり黙ってしまい、後から追ってくるサラディンとアイーシャを待っている。

スラストとフェンリルはさらに後方だ。

「この風では天幕を張れそうにないな」

「そうだな。お二人に野宿するのにいい場所がないか、聞いてみたらどうだろう？」

「そうしよう」

残念ながら、天空の騎士は二人とも適当な場所を知らず、その日の晩は天幕を張ることができなかった。けれど、その翌日からはカリシンピ、タルエスサラーム、マカルダーといった町々に泊まることができ、風の心配もしないで済むようになった。

だがグランディーナたちは、マカルダーで思いもよらぬ人物と再会する。シグルド騎士団長のバンクロフトが、瀕死の重傷を負って神殿に庇護されていると聞かされたのだ。

「そういえば、彼はエンテペの町でも見送りに来なかつたわね。いつたい誰に傷つけられたというの？」

まさか、帝国軍？」

「いいえ、それがフォーゲルさまのようなのです」

「なんですって?!」

「で、ですが、マカルダーにはあれほどの傷を癒せる者がおられません。スラストさま、フェンリルさま、何とかしていただけないでしょうか？」

「私が参ります！」

二人の返答よりも速く、アイーシャが進み出た。

「私はロシユフォル教の司祭です。どれだけのことができるかわかりませんが、治療の心得があります。」

お手伝いをさせてください」

スルストとフェンリルは目を合わせ、どちらからともなく頷いた。

「そうね、あなたにお願いするわ。」

タグロット、彼女を案内してあげて」

「は、はい」

「あなたたちはどうするつもりだ？」

「そのことで相談したいことがあるの。こちらへ来てちょうだい」

グランディーナはサラディンとランスロットを振り返って頷いた。怪我人はアイーシャに任せて、五人は別の部屋に移動する。天空の島の神殿に必ず一つある、窓が開けっ放しの部屋だった。

「いまはバンク rooftop がどうしてあんなことをしたのか詮索しないわ。それよりも重要なものもしも彼を傷つけたのが本当にフォーゲルならば、タグロットによれば瀕死の重傷を負ったのですもの、彼にかけられた魅了の術が解けているかもしれないということよ」

「バンク rooftop の回復を待たずに、それを確かめに行くのか？」

「そうしたいのは山々だけれど、彼を放っておくわけにもいかないでしょ？ それに、フォーゲルの魅

了が解けていなかったら意味がないものね。その前に、バンク rooftop がどうしてそんな無茶をしたのかも訊いておきたいわ」

「わたしもフェンリルさんに賛成でスネ。バンク rooftop さん、フォーゲルさんに挑むなんて無茶をする人じゃありません。何があったのか、とつても気になりマス」

「真相を確かめに行つたんじゃないのか？」

「何のでスカ？」

「私たちより先行したということは、ワイバーンを使つたのだろう。そんなに急いで確かめたいことなど、そうそうあるとは思えない」

「まさか。彼は慎重な方よ。何のためにそんなことをする必要があるの？」

「私の言葉に動かされるころがあつたか」

「ともかく、本人に確認してみましよう」

それで彼女らがバンク rooftop の部屋に行くと、タグロットと呼ばれたシグルド騎士団員が助手になって、アイーシャを手伝っていた。彼女の表情でランスロットはバンク rooftop が一命を取り留めたことを知ったが、彼は深い眠りに落ちていそうだ。

「話はできそう？」

「明日にならなければ難しいと思います。今日は休ませてあげてください」

「あなたは大丈夫なのか？」

「今日はつきつきりで看病することにしました。容態が急変したら困りますから。どうぞ、皆さんはお休んでください」

「誰かに替わることはできないのか？」

アイーシャは微笑みながら、グランディーナの手を取った。

「私は大丈夫。もしも私が休んで、手遅れになつてしまつても嫌だから、このまま看病させて」

グランディーナは不承不承に頷いた。それで彼女ら三人は別の部屋で休むことになり、スルスト、フェンリルと別れた。

別のシグルド騎士団員が食事も用意してくれたが、スルストの言つたとおり、シグルドではどの町でも宴会が開かれることはなかった。それもバンククロフトが言つていたようにフォーゲルへの恨みによるのなら、それは相当、根深いものと思われた。

「あの様子ではアイーシャはしばらく離れられぬかもしれないな。どうする？ その場合は先にシグルド城へ行くのか？」

「フォーゲルもフェンリルのように楽に片づくならばな。彼の実力がどれほどのものか、まだ二人に確認していない」

「だが、ブリュンヒルドが当たれば、フォーゲル殿も正気に返るのだろうか？ それほど難しいとは思えぬが」

「当てられるのならばだ。あなたは、デイバインドラゴンについて、何か知らないか？」

「ドラゴンの最終進化の形態だと聞いたことがある。全てのドラゴンはデイバインドラゴンになる可能性を秘めているとか。だが、確かにデイバインドラゴンは天竜、神のドラゴンだ。人が容易に狩れる存在ではない。フォーゲル殿のお力、スルスト殿もフェンリル殿も及ばぬのかもしれない」

「だとしたら厄介だな」

「おまえは手を出すな。天空の騎士のことはお二人にお任せするのだ」

「いざとなつたら、そんなことも言つてられないだろう？ 私だって要らぬ危険は犯したくない」

「そうしてくれ。わたしとしてはフォーゲル殿には絶対に手を出さぬと約してほしいぐらいだ」

「できない約束はしない。明日にでも確認する」

軽口をたたいているようだがサラディンの表情は真剣だ。グランディーナも先日の話を書い出したように黙り込む。

「フォーゲル殿の魅了が解けたということはありませんか？」

「フアーレンの話では、それはフォーゲル殿が禁を破り、人を傷つけたからになる。とすれば、フォーゲル殿は罰を受けねばなるまいが、さてファイラーハの与えられる罰が地上に降りることを禁ずるものでなければ良いのだが」

「それも、かもしれないというだけだ。スルストもデボネアを傷つけたがお咎めを受けた素振りはない。ならば、フォーゲルも罰は受けておらず、魅了の術が解けていない可能性もある。それにしても面倒なことをしたものだな」

「責任を感じているのかい？」

「まさか！ 自分の命を張って、何を証明するつもりだったのやら。だがアイーシャがついているんだ、もう心配ないだろう」

今日も真つ先に寝ついたのはサラディンだった。

灯りを消してもグランディーナが眠らずにいたので、ランスロットもつい起きていたのである。

ついに彼女は立ち上がり、足音を忍ばせて部屋を出ていった。ムスペルムやオルガナでも、町に泊まった時は彼女はいつも夜中に抜け出している。

ランスロットは彼女の後を追って部屋を出た。

すでに廊下にグランディーナの姿はなかったが、右手から話し声が聞こえてきた。二人の天空の騎士は休む必要がないと言っていたが、そこに混じったものらしかった。

「明日にしようと思ったが、ちょうどいい、いま教えてくれ。あなたたちとフォーゲルの力の差はどれぐらいのものだ？」

「わからない、と言った方がいいかもしれないわね。彼は私たちより先に天空の騎士に任ぜられたわ。そのせいか、戦っていても、いつも余裕があるように感じられたこともある。でも、彼は力を求めるあまり、ディバインドラゴンを殺したことを悔いていたわ。だから、いつも全力は出していなかったようなのよ」

「そうですね。それに、わたしたち、長いこと戦っています。たまに手合わせすることはありますが、お互いに本気を出しませんネ」

「ならば、あなたたちの感触ではどうなんだ？ 勝てるのか、勝てないのか？」

少し沈黙があつたが、グランディーナの声音も、いらついているようではない。彼女は単に事実を知りたがつているだけなのだ。

「勝つようにするわ。いまはそれしか言えない。せめて、あなたたちの手を借りるようなことにならなければ、よいのだけれど」

「そうなるよう願う」

「でも、もしもそうなつたら、あなたは勝てるつもりでいるのかしら？」

また沈黙。聞いているだけのランスロットの方が、息が詰まるようだ。

「ならば逆に訊こう。あなたたちは一対一でスコルハティに勝てるか？」

「難しいわね。それが神殺しの由来だもの。だけどフォーゲルならば勝てるかもしれないわ。やっぱり勝てないかもしれないけれど」

「それが答えだ」

踵を返したグランディーナと、ランスロットは鉢合わせした。彼女は無言で彼を引つ張つていき、誰もいない部屋に連れ込んだ。

「こんなところで何をやっている？」

「君が毎晩のように出かけるから追いかけてみたん

だ。すまない、立ち聞きするつもりはなかったんだが、話に入るわけにもいかなくてね」

グランディーナが珍しくため息をつく。

「あんな話、私はかまわないが、天空の騎士まで同じように考えるとは限らない。あなたまで目をつけられたいのか？」

「わたしなら大丈夫だ。やましいこともしない」

「そういう問題じゃない」

そう言つてから、彼女はまた、ため息をついた。

「君こそ大丈夫か、グランディーナ？」

「明日はどうなるか、わからない。もう休め」

「君はどうするんだ？」

「少し頭を冷やしてくる。あなたは、もう休め」

「わかつているよ」

翌閏竜の月十日、アイーシャが朝食後に、バンクロフトが話せるようになったことを知らせてきた。彼女の看病が功を奏したことに、タグロットが感謝していたのがランスロットには印象的だった。

「あまり長時間は無理ですが、バンクロフトさまもお話ししたいそうです」

「いったい何を話してくれるんでしょうウネ？」

それで彼女らが入っていくと、シグルド騎士団長は頭に包帯を巻いた痛々しい姿であったが、笑顔を浮かべて出迎えた。

「あなたらしくない無茶をしたものね。いったい何がこんなことをさせたのかしら？」

「彼女と話した後、どうしてもフォーゲルさまの真意を確かめられなくなったのです」

そう言つてバンクロフトが眼差しを向けたのはグラデイナーだ。彼女はそれほど驚いた様子もなく、先を話すよう促した。

「わたしはフォーゲルさまにお仕える騎士でありながら、周りの言うことを鵜呑みにしているだけで、ずっとフォーゲルさまのことが信じられませんでした。でも彼女にそのことを指摘されるまで疑問にも思わなかった。当たり前のことだと思つていたのです」

「それは無理ないでスネ、バンクロフトさん。シグルドの姿を見れば、誰だつてそう思いますヨ」

「いいえ、スラストさま、フェンリルさま。それなのに、わたしたちは決してシグルドを離れようとは思わないのです。フォーゲルさまの悪口を陰で言い合うだけで、決して本人にはおつけけない。言つたことがない。わたしたちはそれをおかしいとも思わず、自分の

当然の権利のように考えていたのです」

バンクロフトは軽く咳き込んだが、話すのを止めることはなかった。

「でも、わたしは初めて、彼女に言われたことで疑問を抱きました。それで、どうしてもフォーゲルさまの意志を確かめられなくなり、ワイバーンが用意されていないことにして、シグルド城へ向かったのです」

そこで彼は目をつぶり、しばらく沈黙したが、また続きを話した。

「わたしは、わたしの正しさを証明するためにも、フォーゲルさまにご自分の意志でラシュディとかいう魔導師に従つてもらいたかった。フォーゲルさまにシグルドを治める資格などないのだと言いたかったのです」

スラストとフェンリルが息を呑んだ。

「申し訳ありません、スラストさま、フェンリルさま。わたしは何と愚か者だったのでしょうか。たかが人間のわたしが、あなた方の資格を疑うなど、許されることではありませんまい」

「いいえ。それよりも教えてちょうだい。フォーゲルはどうだったの？ まさか、彼は？」

「とんでもありません、フェンリルさま！」

彼がまた咳き込んだので、アイーシャが急いで背をさすり、白湯を与えた。

「ありがとう。あなたがいなくなったら、わたしはとうに死んでいただろう」

「お礼などより、どうかお話を。本当ならば、私はあなたを止めなければならぬのですよ」

「それはすまない。だがわたしはあなた方、地上の人びとのことも誤解していた、思いがついていたのだ。どうか、わたしたちのことを許してほしい。

グランディーナ、あなたもだ」

「私のことなど、どうでもいい。アイーシャの言うとおり、さつきと先を話して休んだらどうだ」

「そうしよう。だが、話すべきことは、もうそれほどない。フォーゲルさまはラシュデイに操られており、愚かにも戦いを挑んだわたしを殺そうとしました。けれど、わたしが深傷を負ったところで正気に返られ、それでわたしはこうして生き延びることができたのです。フォーゲルさまはわたしが来たことにひどく驚かされたようでしたが、黙ってシグルド城の奥へ消えてゆかれました」

「ありがとウ、バンクロフトさん。わたしたちはこれからシグルド城へ行って、確かめてきます。フォー

ゲルさんが正気に戻ってくれば万々歳でスネ。あなたが危険を冒した甲斐もあったというものデス」

「そうね。フォーゲルと戦わないで済めば、それに越したことはないわ。

アイーシャ、あなたはまだ彼についていなければならぬのかしら？」

「できたら、もう二、三日はそうしたいのですが」

「だったら、シグルド城にはスルストと私で行くわ。あなたたちは留守番していてちょうだい」

「そうしまシヨウ」

「そううまくいくかな？」

二人の天空の騎士が立ち上がると、グランディーナが言葉を発した。しかし彼女はすぐに立ち、外に出ようと二人を促す。当然、サラディンとランスロットもついて出た。

「いまはどういうこと？ あなた、今度は何を心配しているの？」

「フォーゲルがそのまま正気に戻ったとは思えないというだけだ」

「何を根拠にそんなことを言い出すの？ まさか、バンクロフトの言ったことは信じられないと言っても言うつもり？」

「そうは言っていない。ただ、これでフォーゲルが正気に返ったら、ラシュデイが天空の島に来たことがすべて無駄になる。あなたたちの力によるものじゃない、奴が眼中にもなかったシグルド騎士団長のためにだ。何が目的かは知らないが、奴がこのまま天空の島を去るとは思えない」

「わたしもグランディーナに賛成だ。シグルド城にはもつと慎重に行くべきだと思う」

サラディンの言葉に、スルストとフェンリルは顔を見合わせた。

「どう思いますか、フェンリルさん？」

少し長く考えてから、彼女が答える。

二人からは、フォーゲルが解放されたかもしれないという楽観的な態度は、もう失せていた。

「そうね、一理あるかもしれないわ。それに、もしもフォーゲルが正気になったなら、何か連絡があるのではないかしら？ 彼はそういうところは真面目な人よ、でも、あなたもまだ、彼からの連絡は受け取っていないでしょう？」

「そういえばそうですね。フォーゲルさん、バーサの加護を受けています。きつと植物か何かに託して知らせてくれるはずでスネ。でも、それが無いという

ことは、バンクロフトさんのしたことは無駄になってしまったのデスネ」

「それはしょうがないわね。彼だって、元々そんな気持ちで行ったのではないでしょうし。だけど、それならば、ラシュデイはなぜ天空の島に来たの？ 彼の目的は何？ 彼がキャターズアイの行方を知りたがっていたという話はスルストから聞いたわ。でも、それだけのことならば、フォーゲルをまた虜にする必要はないわよね？」

「私たちが案じているのも、そういうことだ」

「だったら、あなたたちはどうしたらいいと思えますか？ アイーシャさんが一緒に来られるようになるのを待つのでスカ？」

グランディーナはこれに即答しなかった。目を伏せ、しばらく考え込む。

「シグルド城はここから一日の距離だったな？」

「そうデス。いますぐ発つても、戦うのは明日になりマスネ」

「行こう。どちらにしてもフォーゲルをこのままにしておけない」

「サラディンさんとランロットさんも行くのでスカ？」

彼女は頷いた。

「だったら、タグロットに言つて、食糧をもらつてこなくてはね。シグルド城にはそれほど蓄えはないでしょうから」

「わかった」

それで彼女たちが慌ただしくマカルダーを発つたのは、闇竜の月十日の午後のことだった。

町の外に出ると相変わらず風がきつく、ランスロットは改めてその不便さを思った。こんな風では翼の重いワイバーンはともかく、グリフォンや有翼人はかなり飛びづらそうだ。

良くも悪くも、天空の島はシグルドが最後だ。かなり慣れてきたとはいえ、彼はそろそろゼテギネアが恋しかった。足下の確かな大地を踏みしめたいのだった。

シグルド城の入口に異形の騎士が座っていた。竜の頭に緑色の鎧を着込み、夜のように真っ黒な剣を己の前に突き立てている。

「あれがフォーゲルさんでスネ。あの剣はゼピュロスといって、彼が天空の騎士になった時に西風神ゼピュロスから贈られた剣だそうデス」

一行が近づいていくのをフォーゲルは待ちかまえて

いたが、やがて立ち上がり、ゼピュロスを抜き放つた。スルストとフェンリルを先に行かせて、グランディーナたちは手前で立ち止まる。まずは天空の騎士にフォーゲルを任せ、あとは戦局を見て臨機応変に対応するという話だけまとまつていた。

「ランシュデイ様に逆らうおろかな者たちよ。この天空を荒らす悪しき下界の殺りく者たちよ。わが剣を受けてみよ！」

彼の動きは素早く、フェンリルはかろうじて剣を合わせたが、スルストは遅れた。

鮮血が飛んで後退した彼に、フォーゲルが怒濤の勢いで斬りかかってくる。

とつさにフェンリルが割つて入らねば、スルストはそのまま切り刻まれていたかもしれない。

だが、彼女はスルストに比べて力が劣る。フォーゲルの攻め方が速さから力主体に変わり、フェンリルも押されてしまった。

スルストがすぐに加わつて二対一としたが、それでもフォーゲルの強さの方が際立つばかりだ。

二人の強さも弱さも、彼は熟知しているのだろう。いちばん最初に天空の騎士に任せられたフォーゲルには、オウガバトルの最終盤で天空の騎士になった二人

より一日の長もあるようだ。

それでも二人は善戦している方だ。

だが、あと一太刀が足りない。竜頭の騎士にブリュンヒルドを当てることができない。

「はあああああつ!!」

「うおっ?」

グランディーナが割って入ったのはその時だ。

スラストとフェンリルを相手にしても一方的に攻めていたフォーゲルの動きが、初めて防戦に転じた。

彼女の攻撃はそれほど激しく、しかもその動きが徐々に速さを増して、次第に捉えるのが困難になっていった。

「何をしているのだ、フェンリル! 早く、ブリュンヒルドを早くフォーゲルに当てぬか!」

サラディンが青ざめて叫ぶ。

ランスロットにもこれが尋常でないことはわかっていた。スコルハティと戦った時のグランディーナが脳裏に蘇る。フォーゲルと激しく剣を打ち合うさまは、まさにあの時の再来だ。

だが結果、彼女は巨大な灰色狼に負け、地面に押さえつけられた。代名詞でもあった曲刀が折れてしまい、戦い続けられなくなったからだ。

「駄目です!」

フェンリルの悲鳴のような声がランスロットを現実
に引き戻す。

「私ではこの戦いに介入できません!」

「ならば、ブリュンヒルドをよこせ!!」

グランディーナが下がって、手を差し伸べたが、フォーゲルが斬りかかってきたので聖剣は渡されなかった。

同時に血しぶきが飛んだ。

斬られたのはグランディーナの方だ。一瞬の隙さえも、フォーゲルとの戦いでは命がけなのだ。

「貴様がグランディーナか」

フォーゲルの声には抑揚がなかった。

「ラシュディさまの言っていた反乱軍のリーダーだがおもしろい。この俺と対等に戦える奴が、この世に残っているとは思わなかったぞ!」

フォーゲルの攻撃が勢いを増す。スラストやフェンリルを相手にしていた時とは明らかに違う。

彼はグランディーナの方を、より強敵と認めたのだ。だが彼女もこれを捌いた。

その激しさはスコルハティのそれに勝るとも劣らなかったが、彼女も易々と当てさせない。

しかし、一度、先手を取られると反撃に転じにくいらしく、さすがの彼女も防戦一方だ。

そこへ果敢にもスルストが斬り込んだ。彼の剣はムスペルムに置いてきてしまったので、どこからか持ってきた無名の剣を使っているが、フォーゲルに敵わないのはそれだけが理由ではなさそうだ。

それでもフォーゲルが退き、グランディーナが攻撃に転じる。

さしもの彼も傷つけられ、その竜頭からは想像もつかない赤い血を流した。

「何をしているか、フェンリル！ いまのうちにブリュンヒルドをフォーゲルに当てよ！」

サラディンの再度の叱咤に彼女は我に返った。

グランディーナに加えてスルストもフォーゲルを攻撃する。切り札を持ったフェンリルから、少しでもフォーゲルの気をそらすためだ。

とうとう竜頭の騎士にブリュンヒルドが当たった。彼の動きが止まり、己を傷つけた聖剣を凝視する。

「スルスト、フェンリル？」

だが次の瞬間には、彼はフェンリルを後方に殴り飛ばし、そのままスルストに斬りかかった。

それで済んだと思った油断が二人の天空の騎士を動

けなくさせたのだ。

スルストはたちまちのうちにフォーゲルにめつた斬りにされた。

フェンリルも倒れたきり動かない。

けれど、そのあいだにグランディーナも、曲刀を捨ててブリュンヒルドを拾っていた。

フォーゲルが彼女の動きに舌なめずりをする。

「これで邪魔者はいなくなつた。おまえの力、とことん見せてもらうぞ！」

二人のあいだでさらに激しい戦いが繰り広げられた。それはもはや常人が到達できる腕前を遙かに超えていた。

サラディンもランスロットも言葉もなく、目にもとまらぬ早業をただ眺めているしかできない。

その時、ランスロットはブリュンヒルドの歌う声を聞いたように思った。天空の島シャングリラで、邪龍ティアマツトと戦った時に自分を振り回したように、聖剣が改心の使い手を得て、その喜びを謳っているような気がした。

ついにフォーゲルが倒れた。全身からの夥しい出血が彼の受けた打撃の多さを物語っている。

その傍らでグランディーナがブリュンヒルドを放り

出して膝をつく。激しい息づかいはいまの戦いの厳しさの証であり、彼女も無数の傷を受けて、返り血も浴びていた。

だがランスロットは、彼女に近づこうとするサラディンを止めた。

「何をするのだ?！」

「駄目です! いまの彼女に近づいてはなりません。あなたでさえ殺してしまいます、わたしを楯にして逃げてください!」

「馬鹿な」

「近づくな!!」

グランディーナの声は悲鳴同然だった。

彼女の手足が意志に逆らって動き出す。

それでも彼女は抵抗を試みた。持っていた短刀をいきなり自分の足に突き刺したのだ。

「グランディーナ!」

「来ないで、サラディン! 怖い、あの時と同じだ、目の前にあるものを壊したい、あなたたちも誰もかも殺してしまいたい、私も呑み込まれる、私もみんなと同じだ!!」

「どきなさい、ランスロット」

「しかし、危険です!」

「そなたもそのために楯になろうとしているのだろうか? だが、わたしもそうだ。いつかこんな日が来るのではないかと恐れ、覚悟してきたつもりだ。それなのに、こんなことにならぬよう何の手が打てなかったのもわたしの落ち度、ならば、グランディーナを止めるのはわたしの責務ではないか」

「ですが——」

二人が話す合間にも肉を切り裂く音が不気味に響く。片足だけでは動けると判断して、グランディーナがもう片方の足にも短刀を突き刺したばかりか、これをひねったのだ。

「やめなさい、グランディーナ!」

「駄目だ!!」

近づこうとしたサラディンに彼女は血まみれの短刀を向けた。

すると脇から手が伸びてきて短刀をたたき落とした上に、彼女の首筋に手刀をたたき込んだ者があった。

いつの間にか蘇生したフォーゲルだ。彼は気絶したグランディーナを抱えて立ち上がった。

「迷惑をかけてしまったな。おぬしたちには、いろいろと訊きたいこともある。しばらくシグルド城で休んでいかぬか?」

「そうさせていただけると助かります。彼女の傷の手当てもしなければならぬ」

「スラスト！ フェンリル！ おぬしたちもとうに気がついているのだろう？ とともに来い」

名を呼ばれて二人の天空の騎士は、ばつが悪そうに立ち上がった。

ランスロットはフォーゲルに駆け寄り、グランディーナを引き取った。アイーシャの来なかったことが悔やまれるような怪我だ。

「フォーゲル殿、いまから急いでマカルダーに戻ることはできませんか？」

「なぜだ？」

「わたしたちの仲間がマカルダーにいます。彼女はあなたに傷つけられたバンクロフト殿の看病のため、マカルダーに残ったのです。サラディン殿もわたしも、このような傷の手当てではできません」

「ならばワイバーンを出そう。そのあいだに止血めをしてやるがいい」

「ありがとうございます！」

「すまぬ、ランスロット。そなたの方が実用的な考えができたな」

「いいえ、わたしはアイーシャがいてくれればと

思っただけです」

やがてフォーゲルが二頭のワイバーンを引いてきた。シングルでの評判はどうであれ、ワイバーンは彼によく馴染んでいるようだ。ランスロットは改めて、自分の見たもの、感じたことでフォーゲルについても判断したいと思った。

「サラディン殿、グランディーナと乗ってください。わたしが一緒では、いくらワイバーンでも重くて速度が落ちてしまうでしょう」

「うむ、そうさせてもらおう」

二人を乗せたワイバーンはすぐに飛び立った。ランスロットとしてはグランディーナが途中で目覚め、さっきの惨劇を続けぬよう願うばかりだ。

そんな気持ちで見送っていると、フォーゲルに肩をたたかれた。

「おぬしも行くよ。彼女が心配なのだろう？」

「ですが、ワイバーンはあと一頭しかありません。皆さまを歩かせるのは申し訳ないと思います」

「気にするな！」

今度は背をはたかれて、彼は咳き込んだ。とても大きな手だ。

「俺たちは歩いてゆく。天空の騎士同士、積もる話

もあるしな。最初からそのつもりでワイバーンを連れてきたのだ。おぬしは騎士なのだろう？ 騎士が守るべき者から離れてしまつては駄目だ。俺たちのことなど気にせず、先に行け。マカルダーでまた会おう」

「そうよ。あなたも先に行きなさい」

フェンリルにまでそう言われては断るのが悪いようだ。ランスロットはとうとうワイバーンにまたがった。

「それでは先に参ります」

「うむ。気をつけてな」

ワイバーンはよく仕込まれていて、初めて乗せるランスロットにもおとなしく従った。

サラデインたちを乗せた、もう一頭のワイバーンはまだ東の空に見え、だんだんと追いついていった。

「サラデイン殿！」

彼は手を振つて応じた。グランディーナは幸い、まだ目を覚ましていないようだ。

「先に行つて、アイーシャに知らせておきます！」

「頼む！」

上空はさらに風が強かったが、ワイバーンの羽ばたきはそれぐらいで左右されることもなく、ランスロットもいまは風どころではなかつたので、急いでマカルダーに向かった。

ようやく町に着いた時、西の空にはとつくに太陽が沈んでいた。

ランスロットの心配をよそに、グランディーナは手当てが終わつてからも目を覚まさなかつた。ふだんの彼女からはあり得ないほど、深い眠りに陥つていようだった。

アイーシャはつきつきりで看病し、サラデインとランスロットも交代でグランディーナに付き添つた。

そのうちに天空の三騎士が帰つてきても、彼女は目覚めることはなかつた。

それなのに彼女はしばしば、苦しげに息を吐く。寝苦しそうに何度も寝返りを打ちながら、決して目を覚まさない。

誰もが眠れぬまま、夜が明けた。閏竜の月十一日になつていた。

殺せ。

いやだ！

己ガ力ヲ存分ニ振ルエ。

殺せ。

壊せ。

世界ヲ破壊シツクセ。

いやだいやだ！

武器ヲ取レ。

立チ上ガレ。

殺セ。

壊セ。

ソレガオマエノ本性、オマエノ本心。

違う！

足ガ萎エタグライデ戦エヌカ？

腕ガナイグライデ戦エヌカ？

身体ガ動カネバ戦ワヌカ？

そうだ！ 足を傷つけては動けまい！ 腕がなけれ

ば武器は取れまい！

ダガソレハオマエノ手足デモアル。

オマエハ私、私ハオマエ。

私ガイナケレバ、オマエモコノ世ニアルコトハカナ

ワヌ。

おまえは私、私はおまえ！

殺セ。

いやだ！

壊セ。

いやだ！

一度ナラズ望ンダデアロウ？

望んだことなどない！

オマエガ私ニ会ウノハ二度目、コノ深淵ヲノゾイタ

デアロウ？

二度と会いたくなんかなかった！

オマエノ兄妹モシタデアロウ？

彼らは私が殺した！

オマエハ私モ殺スノカ？

彼らを傷つけるぐらいなら、おまえを殺す!!

オマエハ私。

私ハオマエ。

オマエガ死ナヌ限り、私ハ死ナナイ。

ダガ忌々シイノハ天空ノ騎士、竜牙ノふおーげる。

コノ私ヲ束縛シヨウトハ。

その方がいい！ このままおまえを野放しにするぐ

らいなら、おまえとともに滅んだ方がましだ！

心ノナカデ願ツタコトハナイノカ、コノ力ヲ存分ニ

振ルツテミタイト？

あるわけがない！

心ノナカデ望ンデハイナカッタカ、コノ力ヲ出シ尽

クシテミタイト？

ない！

イイヤ、オマエハ望ンデイタ。

願ッテイタ。

ソウデナケレバ、ナゼ私ガココニイルノダ？

それは——。

イマノオマエハソレヲ否定スルカモシレナイ。

オマエノ兄妹ヲ殺シタノモソノタメナノダカラ。

違う違う！

何が違ウト言ウノダ？

恐レルコトハナイ。

オマエハ自由。

オマエヲ止メラレル者ナドホトンドイナイ。

私ハオマエ。

オマエハ私。

私ニ身体ヲ明ケ渡スノダ。

ソシテオマエハユツクリ眠ルガイイ。

私ニスベテヲ任せテ、傷ヲ癒スガイイ。

私が眠る？

ソウダ。

オマエハモウ十分、戦ッタ。

疲レタノダロウ？

休ミタイノダロウ？

オマエガソウスルコトヲ誰ガ咎メ得ヨウカ。

だけど、私はレクサールを殺した。この世界でたつ

た一人の兄を殺した！レクサールだけじゃない、

アーウィンドも私が殺した。私を犯そうとした名も知

らない男、私が意図せずに辱めた男、戦場で向かい

合った敵、殺されるために集められた捕虜、ゼテギネ

ア帝国の兵士、みんな、みんな、私が殺したんだ！！

れくさーるトあーういんどヲ殺サナケレバ、オマエ

ガ殺サレテイタ。

オマエハ自分ノ身ヲ守ルタメニ殺シタ。

武器ヲ取ツタ以上、兵士デアル以上、戦場デハ常ニ

誰カガ殺サレ、誰カガ殺ス。

オマエハ生キ延ビタ、ソノ力ヲモツテ。

そうだ、すべては私の罪。償うべきは私自身。

その私に休めと？ その私に傷を癒せと？ 私が十

分に戦つただと？ 疲れただろうだと？ 休みたいだ

ろうだと？！

誰が咎めなくても私は私の罪を知っている。それは

おまえなどに労ってもらうような類のものじゃない、

私が死ぬまで引きずっていくものだ！

ダカラ、ソノ罪モ吞ミ込ンデヤロウトイウノダ。

オマエ自身ト一緒ニナ！！

ああっ？！
「いいえ、あなたは去りなさい！」

アナタハあいーしゃ。

ナゼ私ニダケ去レト言ウ?

私ハぐらんでいーな自身、カソノモノダツイウノニ。
「だけど、あなたは自分自身を傷つけているわ。こ
れ以上、グランディーナを傷つけないで。お願い、も
う帰って!」

オマエノ兄モ待ツテイルノニ。

レクサールはそんなところにいない。私にはわかる。
彼は私を捜している。

でも、二度と会うことはないだろう。私たちの道は、
十四年前のあの日に別たれてしまったのだから。

「アイーシャ!」

「力を使い果たしたのでしょう。ゆっくり休ませて
あげるといいわ」

「ありがとうございます」

グランディーナが目を開けると、サラディン、スル
スト、フォーゲルが彼女を見下ろしていた。そこにラ
ンスロットとフェンリルが加わる。

「すまぬな、少し荒療治をしてみました。傷は痛む
か?」

「これぐらい大丈夫だ。支障はない」

「ならば話を聞かせてもらおう。返答によっては、
このまま、おぬしをシグルドに拘留する。天空の三騎
士として見逃せる事態ではないからな」

「フォーゲルさん、いきなり脅すことはないでショ
ウ。彼女だつて返事に困つてしまふじやありませんか。
女性にはもつと優しくしてあげるべきでスヨ」

「いいや、私はこちらの方がいい。遠回しな言い方をさ
れるより、よほど気楽だ。」

それで、何から話す?」

「その前に起き上がれるか?」

「大丈夫だ。手を貸さなくてもいい」

「このままおぬしの顔を見下ろしているのも気疲れ
するのでな。俺たちも座つてしまった方がいいと思つ
たのだ」

「そうしてくれ。私も話しづらい」

しかし、その小さい部屋に五脚の椅子は多すぎて、
ほとんど身動きは取れなくなった。

身を起こしたグランディーナはそれほど躊躇う様子
もなく、サラディンを見た。

「あなたの知つていることから話してくれないか?
私の話だけでは足りないだろうし」

「話してしまつても良いのか?」

「この面子なら、かまわないだろう」

天空の三騎士の眼差しが一斉にサラディンにそそがれる。しかし彼はいつものように受け止め、頷いた。

「おまえとフォーゲル殿との戦いを見ていて、わたしなりの答えを得た。それとガルビア半島以来、ずっと気にかかっていたことも話そう」

「頼む」

「ラシュディ殿が天空の島へ来たのは、おまえの力を知るためだと思う。それも純然たるおまえ自身の力をだ。半神たる天空の騎士と戦わせることで、おまえがどれだけの力を備えているのか知る。それが目的だったのだと思っている」

「馬鹿ナ！ 何を根拠にそんなことを言い出すのです？ だいいち、あなたの推論では誰も得しませんよ。わたしたちを魅了してラシュディにとって何の役に立つのです？ 何の得になりますか？」

「まあ、待て、スルスト。そのことも含めてサラディンが語ろうとしているのだ、話の腰を折るものじゃない」

「さあ、続きを話してくれ」

「ラシュディ殿はおそらく、単に確認したかったのではないかと思う。あの方が生み出した者の力を見た

かったのではないかと思う。かつて、生まれながらに

禁呪を操り、並の人間では遙かに及ばぬ剣の腕前を持った子どもたちをラシュディ殿は生み出した。だが、その子らはある時、死んだ。残ったのはグランディーナだけだ。ラシュディ殿の試みはその時に頓挫したと言わざるを得ないが、いまは敵と味方に分かれた。あ

の方が己の試みの成果を、あなたのたちの力を借りて試したくなつたところで、何の不思議もあるまい？ 一度、己の支配下から解かれたフォーゲル殿をより強力な術で魅了した、その理由もわかろうというものだ」

「確かに、ブリュンヒルドが当たった時、私はこれでフォーゲルも解放できたと思ひ込んだわ。でも、結果はそうではなかった。あなたはあの時、まだラシュディの呪縛から解かれていなかったのね？」

「そうだ。バンクロフトと戦った時に一度は呪縛が解かれた。だが、俺はもう一度、ラシュディの虜にされてしまったのだ」

「ファイラーハの守りが効かなかつたのですか？」

「奴もかなり苦労していたから、守りを打ち破つたのかもしれない。何にしてもラシュディという魔導師、このままにはしておけん」

「話が逸れてしまったな。続けてくれ」

「だが、これらのことはすべて推測にすぎない。わたしが確証に近いものを抱いたのはガルビア半島でだ。おまえがかつて同等の魔法を受け、傷が痛むと言いつ出した時、ラシュディ殿に言われたことを思い出した。オウガバトルの時代にデュルダという賢者がいた。一度は十二使徒に数えられながら、後に神々を裏切った者だ。十二使徒のなかでも最も力の優れた者であり、一時は最も神に近い賢者とも呼ばれたとか。だが、デュルダは最後にはファイラーハに捕えられ、その力を封印された、魔石キャターズアイにだ。デュルダについてはわたしはこれぐらいしか知らない。しかしこの時、ラシュディ殿はこうも言ったのだ。もしもデュルダが己の力を完全に使えたのなら、たとえ相手がファイラーハであろうと負けることはなかったろう。だがファイラーハは人がその力を完全に振るうことを禁じた。人の力を恐れ、その可能性を封印した、と。それが嘘か真かは知らぬ。わたしは興味もない。もしもファイラーハが人に封印を施したのなら、それはただ恐れるなどという単純な理由ではなく、そうすることの災いの方が大きいからだろう。与えられた力のなかで懸命に生きていくのが分相応というものだと思うと答えだが、ラシュディ殿はわたしの言葉を一笑に付され、

二度とデュルダの話はしてもらえなかった」

「おぬしの言うことに嘘とも真とも、俺たちは応えることはできない。だが、その結果として彼女を生み出したのならば、ラシュディというのは恐ろしい魔導師だな。それに彼はどこでデュルダの名を聞いたのだ？ オウガバトルの伝説で地上に奴の名は伝わっていたのか？」

「わたしはラシュディ殿からしか聞いたことがない。ただ地上には十二人の賢者の名も伝えられておらぬ。あるいは邪神を奉る者が伝えたのかもしれないが、ラシュディ殿がどこで知ったのかは聞いたこともない」

サラデインはグランデイーナに目をやった。

彼女の表情は変わることなく、ただ事実を受け入れようとしているようにも、ランスロットには見えた。

「あまり、驚かぬのだな」

「自分のことだ、思い当たることはいくつもある。あなたの言う災いにも心当たりがある。疑問が解消して、むしろほつとしているくらいだ」

彼女はそう言うとき目をつぶった。穏やかな笑みさえ口元に浮かんでいるのは、いままで知らぬことが、いかに彼女を苦しめてきたかを物語る。

やがて彼女は目を開き、その眼差しをフォーゲルに

向けた。その口元から笑みは消えていた。

「私から話せることは大したものじゃない。なにしろ十四年前、子どもだったころの話だ。覚えていないことも多いが、勘弁してくれ」

「かまわん。おぬしと同じような力を持っていたという子どもらのことだな？」

「そうだ。私たちは二人ずつの兄妹、八人だった。そのなかで私と兄だけが魔法を使えず、ほかの六人が使えた。ただ、六歳のあの時まで、彼らが魔法を使えたなんてことを私は知らなかった。私の知らないところで使っていたのかもしれない、その可能性は否定しない。でも、隠れて魔法を使うには、私たちがいたのは使われなくなつた教会で、一人きりになることは難しかった。私と兄も、剣が使えるなんてわかつたのは六歳のあの時だ」

グランディーナはフォーゲルから目をそらし、フェンリルの方を見やつた。

「それは、突然始まつた。真つ先にサイノスが私にアイスレクイエムを放ち、私は倒された。それがきっかけで、ほかの六人も殺し合いを始めた」

「なぜアイスレクイエムだと言い切れるのです？」
フェンリルの声はわずかに震えている。水神グルー

ザの加護を受けた者として、禁呪の恐ろしさも、その力の扱いがたさも知っているからだろう。

「二四年前の戦いでラシュデイが二度、禁呪を使つたことがある。その地は天候が崩れ、年中冬となり、雪が降る凍土と化した。ムスペルムに行く時、その土地の一つにカオスゲートがあつて、そこを通つてきた。その時に古傷がひどく痛んだ。それで十四年前に私が受けたのも禁呪だろうと思つたのだ」

フェンリルはしばらく考え込んでいたが、やがて鎮いた。

「不思議な因縁だけれど、あり得ない話ではないわね。でも禁呪を二度も使うなんて、なぜ、そんなに危険な人間を地上は放置しているの？」

それに答えたのはサラディンだ。

「ラシュデイ殿を倒せるものならば、この件はあなた方の力を借りるまでもない、とづくに片づいていよう。だが地上では、ラシュデイ殿とハイランド王国のために、わずか一年で四つの王国が滅ぼされた。ラシュデイ殿を倒そうとする勢力など残つていなかったのだ。そのなかで解放軍はゼテギニアに現れた最後の希望だ。我らが倒されれば、もはやラシュデイ殿を阻めるものは何もなからう」

「それはとても危険なことね。地上がそのような状態に陥つているとは知らなかったわ」

「だから我々はあなた方の手を借りに来たのだ」

「その話は後でしょう。それほど話すことも残つてはいませんが、全部、話してくれ」

「ほかの五人がどのような魔法を使ったのか、私は知らない。実際に見ていないのと、同じような魔法を見たことも受けたこともないからだ。私は生き延びた。倒れていたから皆の注意が逸れたので、魔法が幾つも荒れ狂い、傷つけられたが死なずに済んだ。残つた者が少なくなるのを待つて、不意をついて殺した」

グランディーナがそこで言葉を切つたのは、発するのを躊躇つたからだろうとランスロットは推測した。だが相手は天空の三騎士だ。彼女は逃れられないことを知つてもいよう。やがてゆつくりと、つぶやくようにつけ加えたのだつた。

「彼らは、墮ちた」

その一言にスラストとフェンリルの顔色が変わるのをランスロットは見ていた。あいにくとフォーゲルは変わったのかどうか、わからぬ色だ。

「その時の私が、そんなことを知つていたわけではないが、彼らが、二度と元に戻らないことはわかつた。

だから、殺した、何より、私自身が生き延びるために」

「暗黒道か。そうだろう、それだけの力を振るえば、墮ちるのは時間の問題と言つてもいい。だがそれも無理はない。人の心はそれほど大きな力を使うには脆い。力の大きさに心が耐えきれないのだ。遅かれ早かれ、おぬしの兄妹たちは暗黒道に墮ちていただろう。それを止めることもできなかったに違いない。むしろ六年もよくもつた方だ。だが驚くのはおぬしのことだ。それだけの力を持つていながら、よく暗黒道に墮ちずにいられるものだ」

「その理由は、私にもわからない。スコルハティと戦つた時は、彼が私を鎮めてくれた。いまも、あなたとアイーシャが助けてくれた。ありがとう」

「礼には及ばん。おぬしほどの力の持ち主が暗黒道に墮ちれば、取り返しのつかないことになる。今度は俺でさえ勝てるかわからん。現に、ラシュデイに魅了されていた時には負けたのだ。おぬしともう一度、戦う羽目には陥りたくないな」

「私も、あなたやスコルハティのような強者とは、二度とやりたくない」

フォーゲルが笑い、グランディーナも笑つた。竜頭でも笑つているところはわかるものだと、ランスロット

トはおかしなところで感心していた。

「ほかに聞きたいことはあるのか？」

笑みはすぐに消えたグランディーナが尋ねる。

「暗黒道に堕ちかけるといったようなことは、しばしば起きていたのか？」

「私が覚えている限り、今回で二度目だ。ただ、初めて戦場に出た時から、そのことに気づいてはいた。だからずっと力を抑えてきた。何があっても最悪の事態に陥るよりはましだ、私は自分の足下に転がっていた者たちと同じ過ちは犯すまい。それが自分の兄妹だとわかったのは、つい最近のことだ」

「なるほど。力を持っていても暗黒道に堕ちないでいることはできる。強力な精神力だけがそれを制せられる。おぬしが堕ちずにこられたのも、その自制心のゆえかもしれない。だが驚きだ。いかに強力に自らを制しているても、人はひよんなことから容易に堕ちるのだ。それが二回とは、信じられん」

フォーゲルは腕を組み、うなり声さえ上げたが、急に後ろの二人を振り返った。

「スルストにフェンリル、おぬしたちも何か訊きたいことがあるう？」

それで赤い鎧の騎士が膝を乗り出した。

「なぜ、あなたのような人が、ファイラーハに存在を許されているのですか？」

「許されてなんかいない、あの時、私は殺されるところだった。理屈は知らない、ただ、自分の知らない強大な力を感じた。私たちを見下ろす冷たい眼、そこに至った経緯も理由も知らぬくせに、できそこないと私たちを見下す尊大な目を一生忘れるものか。だけど、一人の神が私を助けてくれた。だから、私はここにいられる、地上から放逐されなくて済んでいる」

「まさか、ゾシヨネルですか？」

フェンリルの言葉にグランディーナは頷いた。

「でも、それだけのつき合いだ。私のすること、いちいち干渉もしない。あなたたちの加護と似たようなものかな」

「ゾシヨネルが、あなたが堕ちないよう加護しているということはないのですか？」

「それはないようだ」

天空の三騎士は視線を交わし合った。

昨日、シグルド城からマカルダーに来る時に、すでにこの話にはある程度の結論を出していたのだろうと思われる。それほど時間をかけずに、フォーゲルが再度、グランディーナに向き直った。

「それでおぬしの処遇だが、このまま天空の島に残るつもりはないか？ フィラーハの天空の騎士となつて、その力を天界のために振るつてはくれないか？」

「断る。私はフィラーハが嫌いだ。一度、殺されかけた神に仕える気はない」

「地上に置いておくにはおぬしの力は大きすぎる。ただゼテギネア帝国というのも気になるから、いまの戦いが終わつてからでも良い」

「いやだ。どうしても言うのなら、私を殺せ。そうしなければ抗う術もない」

「おぬしが暗黒道に堕ちれば、地上は壊滅するかもしれない。そのことには気づいているのだろうか？ 二度、そうした危険を経たことで、おぬしはより闇に近づいている。三度目はなからう」

「いやだ！」

そう言つた彼女の手が震えた。うつむき、掛け布団をつかみ、ランスロットにはそれが精一杯の抵抗とも見える。

そこで口を挟んだのはフェンリルだ。

「だから私が言つたでしょう、彼女の同意が得られないはずがないと？」

グランディーナ、それではこうしたらどうかしら。

私たちはあなたに同行するわ、監視し、見張るためにね。申し訳ないのだけれど、あなたたちが私たちの助力を頼んで天空の島まで来たことは、幾つかの例外をおいて、できなくなります」

「例外とは何だ？」

彼女は顔を上げないまま訊き返す。

「アンタンジルに封印した暗黒のガルフ、アンタリア大地において彼への封印が行われなくなつていて聞きました。もしもガルフが復活しているようなら、これは私たちの手で倒さなければなりません。それとラシュデイも危険です。これ以外の例外は認められないということですよ。そのあいだ、あなたに落ちそうな兆候があれば、即座に天空の島に拘束します」

「断つても、ほかに選択肢は与えないのだろうか？」

そう言つて顔を上げたグランディーナはもはや震えてなどいかなかった。フォーゲルを真正面から睨みつけ、スルスト、フェンリルの順に視線を移す。

「なくはない」

答えたフォーゲルが聖剣ブリュンヒルドを取り出す。グランディーナが手放したそれを拾ってきたらしい。それに彼はゼピュロスもまだ帯びたままだ。

「だが、その時はおぬしの命をもらう。その魂を

もつて、ファイラーハに仕えるがいい」

彼女は掛け布団を握り締め、口元は一文字に引き結んだ。その眼差しが怒りに燃え上がっているのをランスロットは認めた。それも彼が知る限り、最も激しい怒りだ。彼女の赤銅色の髪が炎のように燃え上がったかと思うほどの激しい憎悪だ。グランディーナは力づくで強制する者を嫌う。たとえこの場合、理が天空の三騎士の側にあるのだとしても、彼女にとつてそれは、決して受け入れられないことなのだ。

だがグランディーナはすぐに大きく息を吐き出した。どのようなきつかけで墮ちるのかはわからないが、彼女が常に平静でいようとすると、それと無関係ではなさそうだ。

「承知した。あなたたちの好きにするがいい。ただ、解放軍に来るのに、戦わない理由がそれでは厄介だ。あなたたちは地上の戦いには介入できない、ということにしておいてくれ」

「よかろう」

フォーゲルは頷き、ブリュンヒルドをフェンリルに手渡した。

「俺はバンクロフトに会ってくる。この剣はおぬしの手から渡してくれ」

「わかりました」

彼が出ていくと、彼女はすぐにグランディーナに近づき、枕元に聖剣を横たえた。

「何の用だ？」

彼女の声音はすでにいつもの調子に戻っていた。だがそのために、彼女がどれだけの労苦を払ってきたのか、ランスロットはいまさらのように思い至る。

「ブリュンヒルドはあなたに、正確には地上に預けるわ。もともと、そのつもりで地上に降ろしたのだし、私に返すことはないのよ。いままでは私たちをラッシュディの魔力から解放するという目的があったから使わせてもらっていたけれど、その用も済んだわ。この剣がなければ、地上はまた、天界と連絡する手段を失ってしまうものね」

「これはあなたの、いいや、ファイラーハの剣ではなかったのか？」

「ええ、そうね。でも、地上はこの剣を悪しきことに使わないと証明したわ。だから、ここで私が手放しても、もう罰せられることはないでしょう。そして、あなたにはそれを判断できる力があると思います。だから、いまはあなたに預けておくわ。地上でどこに置くのか、考えてほしいの」

グランディーナは頷いたが、ブリュンヒルドに手をかけなかった。

そこにフェンリルが手を重ねる。彼女は弾かれたように天空の騎士を見やった。

「ごめんなさい。あなたのことをろくに知りもしないで、酷いことを言ったわ」

「謝るには及ばない。私にはどうでもいいことだ」
フェンリルが手を離す。

「私に何かできることはない？」

「もう十分だ。あなたたちに望むことはない」

その答えに、彼女は寂しそうに微笑んだ。

「ならば、私たちはここから出ていくわ。あなたたちも地上に戻りたいでしょう。少しでも早く戻れるように、ワイバーンを手配するよう頼んできます」

「そうしてくれ」

だが天空の騎士が二人とも退室すると、グランディーナも立ち上がった。髪をまとめ、靴をはき直す。壁に立てかけてあった曲刀も、腰から提げた。

「怪我は大丈夫なのか？」

「走ることでできる。ワイバーンなどに乗らなくても、このまま歩いて帰ってもいいぐらいだ」

「無理を言うな。おまえは自分の怪我をすぐ軽く考

える」

「別にいまに始まったことじゃない。それに動けないままにいるのは嫌いなんだ。戦場では無理をしてでも動く」

「それでどこへ行こうというのだ？」

「少し頭を冷やしてくる。これからのことも考えなければならぬ。あなたたちは休んでいてくれ」

「わたしも行こう」

「一人になりたいんだ」

「誰がいても君は一人だ。だが、いまの君は少し危なっかしい」

「好みにしろ」

そこで部屋を出ていったグランディーナとランスロットは、アイーシャが目を覚まして、一連の話を一部始終、聞いていたことを知らなかった。震える彼女の頭に手を置いたのはサラディンだ。

「すまぬな。ランスロットはともかく、そなたまでとんでもないことに巻き込んでしまった」

「いいえ、サラディンさま、私のことならば、お氣遣いには及びません。ですが、あれではグランディーナがかわいそうです」

「生まれた時から、あれはそのような特異な星の下

にいるのだ。それも承知の上で解放軍の将となり、己の力を振るって来た。これからも、ゼテギネア帝国を倒すまで、その運命さだめから抜けられることはあるまい。だから、わたしからそなたに頼む。決して、あれを哀れんでくれるなど。たとえラシュディ殿に与えられた生とはいえ、あれは精一杯、抗い、自らの手で運命を選び取るうとしてしている。できるなら、そなたがそれを支え、助けてやってほしい。もしもできぬと言うのなら、今日の話はすべて忘れよ。二度とあれには近づくな」

アイーシャは起き上がり、赤い目をサラディンに向けた。話を聞きながら、彼女は自分が起きていることを知られぬよう、ずっと堪えていたのだ、泣きはらすほど目を赤くして。

「わかつております、サラディンさま。私は彼女の側にいましょう。それが母の願いであり、私の望みでもあるのです。どうか案じられますな。私が彼女を守ります」

「すまぬ」

そう言ったとき、サラディンは絶句し、目頭を押さえた。

アイーシャはそんな彼を抱擁した。その温かさは彼

に大神官フォーリスを思い出せるものであった。

グランディーナはしつかりした足取りで町の外まで出ていった。昨日、自らに負わせた傷を思えば、いくらアイーシャが優秀な癒し手とはいえ、かなり無理しているのだろうとランスロットは思ってしまう。

けれど、彼女はいつもそうしてきたのだ。解放軍の結成前から、常に危険な綱渡りをしてきたのではあるまいか。その自制心は彼の想像など遙かに超えている。見るものが違うはずだ、グランディーナは最初から天空の騎士、半神と同じ次元にいるのだから。

「バルモアであなたたちに言ったことが本当になっ
てしまったな。それも今度はうるさい監視付きだ」

「別に気にすることはないさ。知っているのは天空の三騎士の方たちとわたしたちだけだ。誰からも話が漏れることはあるまい」

「話など、したければするがいい。カノープスなど黙っていなかろうか？」

「サラディン殿やわたしが適当に答えておくさ。皆に話してまわるようなことではないからね。ただ、できたらトリスタンさまには君の方から話してくれないか？ あの方だけは事実を知っておくべきだと思う」

グランディーナはランスロットを見た。

初めて出会った時は迷いのない眼差しだと感じたことを思い出した。

だがいまは、彼女が脆いものを隠していることに気づく。彼女の足下の、ひどく頼りなかったことを思う。

「わかった。トリスタンには私から話す」

「ありがとう」

思わず微笑んだ彼に、グランディーナもつられたように笑った。バルモアで、カノープスも含めて笑いあつたことが、遠い昔のように思える。

「あなたはおかしな人だな」

「何だい、藪から棒に？ それに、いまさら言うことでもないが、失礼だぞ」

「あんな話を聞かされて、私への態度が変わらないのが不思議だ。そんなことをしていたら、あなたまで天空の騎士に目をつけられるぞ」

「わたしにそんな力はないよ。それにバルモアでも言つただろう、わたしの気持ちは変わらないと？ 君に捧げた剣をわたしは悔いたことはない。それがわたしの、騎士としての誇りだ」

「後悔してからでは遅い。いまのうちに引つ込めておけ」

「君流に言えば、余計なお世話だ」

「だから、おかしいと言うんだ」

「もう、この手の不毛な会話はやめにしないか？

君に何があるうと、わたしの気持ちは変わらないし、変えられないよ」

「私もよく頑固だと言われるが、あなたには兜を脱ぐな。確かに、あなたの言うとおり、これ以上、不毛な会話もない」

「はははっ」

その時、グランディーナの傍に降り立つた者があつた。純白の翼と衣の天使たちが三人だ。

彼女が剣を抜くより早く、そのうちの一人、スローンズが二人に十字架を向けて、高らかにこう命じた。

「人間たちよ、聖なる父の御名において命じます。

地上にて行方不明になった天使長ユーシスを探し出し、暗黒のガルフを打ち倒しなさい！」